Fate strange Fake
フェイト／ストレンジ　フェイク
5
成田良悟
Narita Ryohgo
イラスト／森井しづき
Illustration:Morii Siduki
原作／TYPE-MOON
Original Planning:TYPE-MOON
電撃文庫

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

１８４２年　夏　地中海洋上

　燦さん々さんと照りつける陽光を受け入れ、穏やかな波が互いに身を寄せ合っていた。
　その輝きを砕き散らせながら、一隻の船が水面を進む。
　豪ごう奢しやとまでは言いがたいが、それなりの気品と力強さを持ち合わせた帆船の上で、一人の男が声をあげた。
「……ありゃあ、なんの島だ？」
　男の視線の先にあるのは、一つの島影。
　なだらかな弧を描く美しい形をしているが、黄褐色の岩肌に薄緑が入り交じる殺風景な島。
「ああ、あれは……何もない島ですよ旦那。ただの無人島です」
　近場にいた船員の答えを聞いた男は、興味深げに船員に問い掛ける。
「ほう？　なんか建物みてえなもんが見えるが、人はいねえのかい？」
「え？　ああ……さて、あっしにゃとんと解わかりませんねぇ。わざわざ船を停とめた事もありやせんし……。確かに、なんでしょうね、ありゃ」
　首を傾かしげながら作業に戻る船員と入れ替わりに、一人の男が盃さかずきを片手に近づいて来た。
「どうしたね、兄弟。あの島に恋でもしたか？」
　それは身なりと恰かつ幅ぷくの良いい男であり、穏やかな顔つきをしているが、その双そう眸ぼうにはどこか荘そう厳ごんたる知性の輝きを揺蕩たゆたわせている。
「だが、島や海に惚ほれるのはやめておけ。怒らせると怖いし、隙あらばこちらを素す寒かん貧ぴんにしてくる怖い女だぞ？　男かもしれ

ないが」
　肩を竦すくめる男に、最初に島を見ていた男が首を振る。
「……出会った初日に『友よ』、行きの船じゃ『親友』呼ばわりしてきたかと思えば、帰りにゃとうとう『兄弟』呼ばわりかよ王子様。他人に聞かれりゃ俺が不敬罪で石を投げられらぁ」
「何を言う。友や親友以上の親愛の情を抱きつつも、色恋とは別の感情とならば、もはや共に育った同胞扱いするしかあるまいよ」
　王子様プリンスと呼ばれた男は、グラスの中の液体を軽く呷あおってニヤリと笑う。
「そもそも、君には最初からそんな形式上の敬意などありはしないだろう？」
「ま、文章ならもうちょい見み栄ばえ良く語り合えるんだがな。文通でもするか？」
「世の人間が真しんに敬意を払うのは私ではない、君のような……他者に喜びを与える側の人間だよ。少なくとも私には、かの浪漫派戯曲『錬金術師』や、『騎士アルマンタル』の小説ほどの喜びを人々に与える事はできないからね。それをやってのけたのは、君だ。アレクサンドル・デュマをおいて他ならない。元皇帝の甥の身内として格落ちする事はあるまいよ」
　過剰なまでの物言いで持ち上げられた男――アレクサンドル・デュマは、目の前の男に対して苦笑しながら首を振った。
「参ったね。かの名高き皇帝陛下、ナポレオン・ボナパルトの甥おい御ご殿どのにそこまで言われるとは。ありがたいが、さっきの島で軟禁生活は勘弁願いたい所だな」
　デュマがそう言った相手――ナポレオン・ジョゼフ・シャルル・ポール・ボナパルトは、船の揺れに合わせて愉たのしげに口角を上げる。
　彼はかのフランス皇帝、ナポレオン一世の甥おいであり、ナポレオン三世の従兄にあたる存在だ。
　父親のジェロームがかつて存在したヴェストファーレン王国の王だった事から、『プリンス』あるいは『プロン＝プロン』という渾あ

だ名なで呼ばれている19歳の若者だ。
　当時既にベストセラー作家であったデュマがイタリア旅行をした際に知己となり、ジェロームの勧めで共にエルバ島へと赴いたのだ。かつてジョゼフの伯父であるナポレオン一世が追放されたその島で狩りに興じ、現在はその帰りとなる船に揺られている。
「なあ兄弟。時に尋ねるのだが……」
　ジョゼフは人当たりの良い笑顔を向けながら、20歳以上も年上であるデュマに言った。
「君は、私の伯父上を恨んではいないのかい？」
　すると、デュマは肩を竦すくめて答える。
「ハハッ！　この俺が、かのフランス皇帝、ナポレオン閣下の何を恨むって？」
「君の父上を、伯父上は随分冷遇したと聞いている。君の御母堂の年金の申請も却下したと」
「よせよせ、終わった事だ。そりゃあ、まあ、そのせいで割と貧乏暮らしが長かったし、お袋も苦労したからよ。お袋の代わりにぶん殴ってもバチは当たらねえと思うが……」
　デュマは少し考えた後、島影を眺めながらゆっくりと言葉を紡つむぎ出した。
「俺が、あんたの伯父上……ボナパルト一世に会った話はしてねえよな」
「初耳だ」
「まだ13になるかならねえかって頃だ。凱がい旋せんパレードに来たあの男を観みに行ったのさ」
　そこで僅かに間を空け、船が大きく傾く。
「銃を、懐ふところに忍ばせてな」
「……」
　波の音の合間を縫って語られたその一言は、まるで芝居の一幕であるかのように重く耳じ朶だを震わせたが、ジョゼフは黙ってその言葉を聞いていた。

「決闘をするつもりだった。手袋を奴やつこさんの馬車に投げつけてよ。最初に俺の親父おやじとお袋を侮辱したのは皇帝陛下の方だ。武器はこっちが選んだっていいだろ？」
「だが、伯父上はそこでは死なず、偉大な作家はここにこうして生きている」
「ああ。周りがみんな『皇帝万歳』って叫んでる所で、俺はきっと幽鬼みてえな顔をして近づいたんだろうよ。馬車の隙間から、青白い顔が見えた。なんてことはない、戦疲れでヘトヘトになった小男だ、そら、簡単だ。あとは決闘状代わりの手袋を投げつけてやればいいだけだ。そんなことになった日には、きっとあいつは周りの兵士に命じて俺を撃たせて、殺すなり追い払うなりするに違いない。だが、そいつは決闘からの逃亡に他ならない。餓鬼の決闘から逃げた皇帝陛下として街の連中に笑われるがいいさ！　……と、そんな皇帝の顔よりも青っ白い考えに酔っ払ってた貧乏人の餓鬼は、次の瞬間、手袋を取り出して何をしたと思う？」
　船の揺れに合わせて、リズミカルに、まるで舞台上でセリフを唱うたいあげる役者のように、デュマは朗々と自分の過去について語り続けた。
「……答えは、その手袋を振っていたのさ。投げつける予定だったもんを高らかに上に上げて、気付けば周りの連中と一緒に『皇帝万歳』……ってな。ああ、王子様プリンス。あんたの伯父上は確かに英雄だったが、一方じゃ大勢に恨まれてた。俺の他にも、皇帝に手袋を投げつけたかった奴はいくらでもいただろうよ。決闘じゃなく、直接銃弾を馬車にぶち込んでやろうって思いの奴もわんさかと集まってただろうさ。だが、そんな連中が揃そろいも揃そろって、青白い疲れ果てた男に喝采を浴びせるんだ。いったい何がそうさせるのかは解わからねえが、確かに、あの陛下は人民の夢だよ、憧れだったのさ。それに気付いちまったらもう駄目だ。憧れた相手だろうが平気で銃を向けられるのは、優秀な兵士だ。だが、俺はきっと兵士じゃあない。そう気付かせてくれたからこそ、俺は今、銃のかわりにペンを持って戦って

るってわけだ」
　重々しい調子で始まった長い言葉を軽やかな調子で終わらせ、デュマは片目を瞑つぶって20以上も年下の友人に笑いかける。
「と、こんな風に言や、少しは様になるかい？　王子様プリンス」
「今のは、君の創作かね、兄弟」
「どうかな？　だが、そういう事にしたい奴がいりゃ、俺が肯定しようと否定しようと、そういう事にしちまうもんさ。面白い嘘うその前に真実は曇る。逆に言うと、真実とかいう煮ても焼いても食えねえ不味まずい肉があったとしても、歴史って下味を付けて何年も寝かせた後に、ちょっとした嘘うその調味料を振りかけりゃ、少しは食えるもんになるってわけだ」
　自分の過去よりは遙はるかに楽しそうに語るデュマに、ジョゼフは呆あきれながら言った。
「だが、こうなってくると、肉の正体も気になるものだよ、兄弟」
「この場合の真実ってのは、あー、まあ、アレだ。俺は、ナポレオン一世とその血筋を今更恨んじゃいねえって事だ。さっきみたいな話を付け加えときゃ、真実か創作かなんざ、どうでもいいだろ？」
「なるほど。ならば、そんな君にとっては、無人島ですら食すに値する素材というわけか。とはいえ、山ほどある無人島の中で、何故あの島だけ気になるのかね？　もしかして、何かあの島に縁でも？」
　カラコロと笑いながら尋ねるジョゼフの言葉に、デュマは肩を竦すくめてみせた。
「勘だよ。ただの勘さ」
「勘か。それは、君のような職業にとっては重要なのかもしれないな」
「こうして皇帝陛下の縁者と乗り合わせた船で見かけた島だ。あんたと俺が出会った記念に、あの島を有名にしてやってもいいかと思ってな」
　すると、元フランス皇帝だった男の甥おいは、子供のようにはしゃぎながら熱の籠もる声で島影を仰いだ。

「ああ、私も、あの島には何かあると思っているよ。数年前にあの島と同じ名を冠した人物の噂うわさを聞いた事もある。ここだけの話……昔、教会の裏の連中が妙な動きを見せた事もあってな」
「教会の、裏？」
「おっと、忘れてくれたまえ。王であった父上にも、教会は腹の内を曝さらけ出だそうとしなかったからな。まあ、あの島には昔から、確かに財宝伝説や奇跡の伝説など、様々な噂うわさが立ったよ。街の子供達や猟師、冒険家、宗教家。何も無い島であるが故に、様々な人間達が自分の見たい夢をあの島に投影させた。だが、何もないと解わかってしまうのを怖おそれるが故に、調べようとする者も殆ほとんど居ない」
「おいおい、俺の役目を横取りする気かよ。あの島について語るのは俺の仕事だろ？　いいから島の名前だけ教えてくれよ、兄弟」
　兄弟と呼び返された事に気をよくしたジョゼフは、将来デュマが書くであろう、まだ見ぬ物語に目を輝かせながら、その島の名前を謳うたいあげた。

「あの島の名は、モンテクリスト！　何も無いが故に、全てを内包する可能性の島さ」

『続いてのニュースです。昨日、上院議員や企業のトップがたて続けに事故や病気で急逝した事を受け、ＮＹ市場の株価は強い混乱を見せており――』

×　×

　スノーフィールドに起こった『それ』を『試練』と呼ぶべきか否いなか。
　それについては、正確に事態を観測していた者ほど、天てん秤びんを否いなへと傾けさせる。
　町として、あるいはアメリカとしても未曽有の事態といえるその一連の事件―即すなわち『聖杯戦争』は、起こるべくして引き起こされたものだからだ。
　そのスノーフィールドという都市そのものが、儀式の為ためにアメリカの大地に生み落とされた実験場であり―最初から土地の御破算も含めて織り込み済みとなっている。
　だが、それはあくまでそれを試みた黒幕側の視点の話だ。
　魔術的な事情など欠片かけらも知らぬ一般人からすれば、そんな事は関係ない。
　裏の理ことわりを知らぬ市民達からすれば、それは唐突に訪れた災禍に他ならなかった。

　聖杯戦争。
　魔術師達の間でも一部の者達が知る、限定された儀式。
　世界の『座』に存在を刻まれた英霊達を自らの使い魔とし、複数の魔術師達が万能の願望器―真なる意味では『根源』への足がかりを巡って全霊を持って相争う。

始まりは別の意図があったとも言われているが──半世紀以上前に行われた、無数の勢力が水面下での権謀術数を張り巡らせた第三次聖杯戦争。そして十数年前に行われた第四次聖杯戦争にて、時計塔のロードが一人失われた事を契機として、情報操作を潜くぐり抜ぬけた魔術師達のごく一部から強く注目されていた。
もっとも、大局においては『極東で行われる胡う散さん臭くさい儀式』という位置づけだったのだが──今回アメリカで執り行われている『ソレ』は、聖杯戦争として見てもあまりにも異質で歪いびつな様相を見せ始めている。

まず、召喚された英霊の数が多すぎる事。
通常は七騎によるサーヴァントによって争われるというその聖杯戦争は、確かにはじめこそはその人数で執り行われるかと思われたのだが──
『セイバー』と思おぼしき英霊が地元のテレビ局のカメラの前に現れ、破壊された劇場の損害を弁済すると宣言した前後から、本来の聖杯戦争と大きな『ズレ』が生じ始めた。

本来秘匿されるべき魔術の儀式。
だが、その魔術、あるいは神秘全般を扱う者達にとっての絶対的な規範は、この偽りの聖杯戦争の開始早々に破られる事となった。
あるいは、それこそが儀式を執り行う黒幕達の思惑通りだとでも言うかのように。

砂漠における『アーチャー』と『ランサー』による一騎討ち。
互いの宝具の衝突による余波は砂漠の一部を硝子ガラス化させ、巨大なクレーターを造り出す結果となり、表向きはガス会社が設置したパイプラインの爆発事故として処理された。

更に、警察署にいる『セイバー』を狙ったと思われる『アサシン』

による襲撃。
　その最中に、『アサシン』のマスターと思おぼしき吸血種が乱入、聖杯戦争の監督官として聖堂教会より派遣されたハンザ・セルバンテスを巻き込んだ乱戦となったが、表向きはテロリストによる警察署の襲撃という形で処理された。

　続いて、クリスタルパレスに陣取ったアーチャー陣営が襲撃され、周辺の建築物の窓まど硝子ガラスが一斉に割れるという被害があったものの、こちらは突発的に発生した竜巻という形で処理を行った。

　そして、工業地区の一角にある食肉工場──スクラディオ・ファミリーの息が掛かっている魔術工房を中心とした、強大なサーヴァント二柱と、更に別の『何か』による広域破壊。
　こちらは、恐らくキャスター系のサーヴァントによる広域の幻術により、住民の目を誤魔化し続けている状況だ。

　僅か数日で、既に儀式の進行に深刻な歪ゆがみが生じている。
　魔術師とその使い魔──それもただの使い魔ではない、神秘そのものの具象化たる英霊達による殺し合いという形の魔術儀式。
　その儀式が如何いかに綿密な下準備の元に行われていたのだとしても、街が崩壊するレベルのイレギュラーが続く状況では、その隠匿も限界は近い。

　だが、事象は収束を見せるどころか、不可逆的な増大の兆きざしを見せ始めた。
　それまでの気象条件を無視する形で生まれた、西海岸の巨大なハリケーン。
　ワシントンを中心として、米国で発生した財界や政界、情報関係の要人が次々と死んでいくという異常事態。
　事の裏側を知っている者ならば、それが人災だと気付いていた。

スノーフィールドという街に開いた、大きなうねり。
その仄ほの暗ぐらい穴の淵ふちに、世界の側が否いや応おうなしに引きずり込まれつつあるのだと。

仮に、これを『大いなる存在が与えた試練』と称するのならば━
到達点は疎おろか、一寸先の道すら見えぬ、果て無き迷宮へと放り込まれたようなものだろう。
彼らはまだ、自分達が迷宮に囚とらわれている事にすら気付いていないのだから。

×　×

某ＳＮＳ　クローズドチャット

フリュー『まあ、大まかに言うとそんな感じだが……結論だけ言うぜ。
スノーフィールドはヤバイ。
正直な話、俺もとっとと逃げ出したいところだよ。
大体、こっちが最初に聞いてた話とまるで違う。
ああ、いや、魔術絡がらみの人間が制約も無しに真実を言うわきゃねえんだが、それを踏まえた上で、なお理不尽だ。
儀式の根幹は恐らく冬ふゆ木きのソレをなぞっているんだろうが、規模だの基礎だのがまるごとおかしな事になってると来た。

まず、境界記録帯ゴーストライナー。
あんたら経験者連中が言う英霊サーヴアントって奴だが、そっちの話じゃ、冬ふゆ木きとやらで行われてた時は七騎が争ったって話だったろ？
だけどな、俺の占星術で探ってみても、そんなレベルじゃねえ。倍近く、いや、英霊なのかなんなのか解わからねぇ星の乱れからする

と、倍以上はヤバイのがいる。夕べ、病院の前を監視してたんだがな。三つ首の犬が出て来たと思ったら、幻想種みてえなバケモンが二百も沸いて、凝視するのもやばいレベルの英霊とやり合ってやがった。その後はもう、魔力が乱れてろくすっぽ監視もできなかったがな。
　まさかケルベロスだの悪魔だの言わねえよな？　どっちにしろ、本来表側に居ちゃいけねえような化け物がアメリカの都市の大通りを闊かつ歩ぽしてやがるんだ。夢なら覚めて欲しいね。こんな夢を見せるのは相当に子供じみた魔術師だろうよ。

　その後に起こった事は、説明するのも面倒だ。
　疑似映像記録を暗号化して添付しといたからよ、そっちで魔術的に解凍してくれ。
　あー……だがな、俺の捏ねつ造ぞうだと疑われりゃそれまでだ。
　疑われても怒りゃしねえよ。
　逆の立場だったら巫山戯ふざけんな金返せって呪じゅ詛その一つでも送ってる所だ。
　まあ、アンタは俺とは違うから、別の見方をできるんだろうがな、魔術世界の破壊者さんよ』

エルメロイII世『その渾あだ名なは心外だ』
エルメロイII世『とはいえ、報告、感謝する。予想していたよりも事態は悪化しているな』

フリュー『そりゃそうだろう。俺も最初は砂漠のクレーターがどん底かと思ってたが、半日毎ごとに底が抜けて新しい底に街を引きずり込んでやがる』
フリュー『しかし、英霊の数が多すぎるのはどういうわけだ？』
フリュー『ここは確かに霊脈も整った土地だが、話に聞く冬ふゆ木きには一歩及ばんだろうよ。それにも関わらず、通常より数が多く英霊

が召喚されるってのは道理が通らねえだろ』

エルメロイII世『恐らくは、呼び水だろう』

フリュー『呼び水ときたか』

エルメロイII世『最初に召喚された何体かの英霊は、土地の霊脈を意図的に乱し、一時的にアメリカ大陸の別の場所から魔力を呼び込む切っ掛けとしたものだ。免疫を活性化させる為ために一度肉体にダメージを与えるような荒療治だよ』

フリュー『境界記録帯ゴーストライナーを七柱呼び出すのに、別の六柱を呼んで犠牲にするってのか？　あのデタラメな境界記録帯ゴーストライナーが、ニワトリの血代わりの触媒だと？　そいつはちょいと横紙破りにも程があるぞ？』

エルメロイII世『静止した七つの振り子を表面へと押し出す為ために、裏側から……恐らくは五つか六つの振り子を無理矢理衝突させたのだろう。本来ならニュートンの揺り籠宜よろしく、同数の振り子が動くだけだが、七つ目の振り子までを押し出す分の力は、この土地を形作った管理者達が上乗せすればいい。恐らく、用済みとなった最初の英霊達は、バランスを取る為ために時間経過で土地に吸収される事だろう』

フリュー『ぞっとしねえな。あんたの話は半信半疑だったが、あの金ピカの鎧よろい着た奴は確かにかのアッカドの「英雄王」なんだろうよ。遠見の術式越しに奴やつこさんの星回りを観測みた途端、目が眩くらんでそのまま脳のう味み噌そを掻かき回まわされるかと思ったぜ。そんな奴までひっくるめて、聖杯の材料ですらない、焚たき付つけの藁わら束たばとして使い捨てるなんざ正気じゃないな』

エルメロイII世『ああ、その通りだ。魔術師としても神秘から縁遠い人間としても、到底まともな思考とは言えない。そんな真似まねができるのは、神秘を神秘とも思わない輩やからのやり口だろう。それこそ、正に「破壊者」と呼ぶべき位置づけの存在だ』

フリュー『クローズドとはいえ、ＳＮＳで神秘の解析をしてるあんたが言える台詞せりふかよ』

エルメロイII世『現状では、電子ハッキングに精を出す魔術師は、魔術による通信以上に限られる。どんな手段でもリスクはつきものだが、私の能力の範囲内ではより安全な行為といえるだろう。仮に盗み見られたとしても、一般人はそもそも冗談の類にしか思わず、こちら側に踏み込んでいる相手ならばそもそも隠す必要がない。いや、神秘の秘匿を旨むねとする真っ当な魔術師であればあるほど、このような馬鹿げた報告は必死になって消し去ってくれるだろうとも』

フリュー『魔術師が聞いた所で与太話だろこんなの』

エルメロイII世『まあ、それもあと数年で様相が一変するだろうがね。最近出回り始めたスマートフォンという携帯機、あれは恐らく魔術世界にも影響を及ぼすレベルで普及するだろう。神秘を記録される危険性が増すとともに、隠匿の方法も以前と方法を変えざるを得まい。たとえばフェイクニュースと言い張ったり、偽装情報ダミーストーリーを紛れ込ませるのは逆にたやすくなるだろうしな。それだけに、このような規模が無駄に大きい儀式でほころびが生じるのは避けたい所だ』

フリュー『相変わらず、ペラペラペラペラと口が回るな。いや、この場合回ってるのは指先か？　一分足らずでよくもまあ言葉の羅列をこ

こまで打ち込めるもんだ。まさか今までの文字列の中に、俺にも読み取れねえ魔術を仕込んでるわけじゃねえよな？』

エルメロイII世『買かい被かぶりだよ。趣味の遊戯には、時に圧縮した情報を瞬時にやりとりする必要もあるのでね』
エルメロイII世『そもそも、私に君に気付かれぬレベルの高度な隠蔽術式を組む事などできない。しかし、オンライン上というか、文章の上でも君の物言いは変わらないな』

フリュー『慣れてねえんだ。逆に、あんたがハンドルネームを偽名にしてねえのも、照応の問題だ。慣れない場で下手なイメージを混ぜ込んで呪じゅ詛その自家中毒になっても困るからだろ？』
フリュー『まあそれはともあれ、だ。俺はもう少し探って、いざとなりゃこの街を脱出するぜ。外に出ようとした連中は妙な呪じゅ詛そに当てられて精神支配されて戻ってくるが、なんとか星読みで呪じゅ詛その薄い道筋を探してみるつもりだ』

エルメロイII世『すまない。君が既に街の中に居てくれて本当に助かった』
エルメロイII世『黒幕側の人間──警察署長と接触は持てたが、一時的な共闘関係は結べたものの、引き出せた情報はほんの一部だ。話した感じからすると、彼も裏の裏までは知らされていない可能性が高い。だからこそ、君からの客観的な情報はありがたい』

フリュー『なに、何か美味うまい仕事があるんじゃねえかと思って来ただけだ。魔術使いの傭よう兵へいは腰が重くちゃ飯にありつけねえからな。結局の所、あんたに貸しを作るのが一番実入りが良さそうだからよ、渡りに船って奴さ』
フリュー『……一応聞いとくが、まさかあんた以外の君主ロードが出向くって事はねえよな？』

エルメロイII世『それは無いな。降霊科のルフレウス翁おうは現在所用で時計塔を離れているが、ことの現場に赴いてどうこうする御仁ではない。仮にそちらで何かしらの間違いが起こったとしても、「到いたる者が到いたっただけの話だ」と肩を竦すくめるだけだろう。もっとも、境界記録帯ゴーストライナーには幾ばくかの興味を持っているようだがね』

フリュー『ああ、これ以上ヤバイのが街にこないって解わかれば充分だ。ただでさえ、同業者だらけで迂う闊かつに手の内も見せられねえ状況だからよ』
フリュー『そういや、アジアの方でそこそこ名前の知れた同業者もマスターとして参加してるらしい。まあ、本当の手て練だれ共に比べりゃまだペーペーだが……魔力がとことん低い代わりに生存能力の高さはピカイチの人形みたいな奴でな。シグマって名前だから、あんたの可愛かわいい生徒には近づかねえように言っときな』

エルメロイII世『忠言、感謝する』
エルメロイII世『フラットには、そもそも聖杯戦争の危険性についてもっと強く忠告しておくべきだったと後悔しているがね』

フリュー『おっと、そいつは金目当てでここに来た俺の耳にも刺さる言葉だねえ』

エルメロイ『すまない、君への皮肉の意図はない』

フリュー『解わかってるよ、君主殿』
フリュー『じゃあ、こっちものっぴきならねえ状態になってるんでな、そろそろ閉じるぜ』
フリュー『さっき、妙な星のお導きが出てな。そっちも報告書のデー

タに付け加えといた』
フリュー『ま、何か解わかったら連絡するから、報酬にはきちんと色つけてくれよ？』

——フリューさんがログアウトしました。

　　　　×　×

スノーフィールド　市庁舎

「さて……見得を切ったのはいいが、そろそろヤバイよなあ」
　人払いの結界が張られ、底知れぬ魔力が渦巻くスノーフィールドの大通り。
　病院や警察署が混在する市の中心部であるその通りを眺めながら、市庁舎ビルの中にいた一人の男が肩を竦すくめた。
　つい先刻まで、オンライン上のクローズドチャットルームで『依頼人』である時計塔の君主ロード、ロード・エルメロイII世と文章のやり取りを行っていた男は、静かに窓の外の星を仰ぎ見る。
　―しかし、エルメロイの旦那も随分と怒ってるみてえだったな。
　先刻のチャットルームでのやり取りの中に、確かに文字列に仕込んだ呪じゆ詛そや魔術のようなものは見受けられなかった。
　だが、エルメロイII世という男の中に、静かに煮えたぎっている怒りが確かに感じ取れた。
　―魔術の神秘を弄いじられた事じゃねえな。
　―大事な居場所を穢けがされたって所かね。
　―ったく、とことん魔術師らしくねえのに、人様の魔術を暴きに掛かるんだからな。あの旦那の頭ん中じゃ、もうとっくにこのイカれた儀式を解体する筋道は出来上がってんだろうよ。
「魔術で渡り合うなら怖くねえが、魔術師として敵対するのは絶対に御免だな。存り方のピーキーさは、確かに時計塔の十二の頂点の一

人ってわけだ」
　がっしりとした体たい軀くの上に伸び放題の髭ひげ面づらを載せた男は、砂漠地帯から離れた都心部には似合わぬ砂塵避けの頭巾クーフイーヤを軽く指で撫なで、市庁舎の空き部屋の窓から無人となった大通りに目を落とした。
「まあ、この街から星が見えなくなる前に、斥候は斥候らしい事をしておくかね」
　彼の名はフリューガー。
　魔術使いの傭よう兵へいであり、〈師父殺し〉のレッテルを貼られている占星術師だ。
　今回の聖杯戦争の噂うわさを聞きつけ、直接的な金銭よりも、様々な方面の魔術師達に己を売り込む事で、より手広いコネクションを築く為ためにやってきたのだが──魔術使いの間でも悪名高いスクラディオ・ファミリーがこの件に関わっていると知り、見に徹していた所で昔むかし馴な染じみである時計塔のロードから連絡を受け、そのまま調査役を請け負った形となる。
「確かに星の巡りは吉凶交わり、ハイリスクハイリターンだってのは解わかってたが、本当にそれに見合うリターンはあるのかねえ？」
　溜ため息いきを吐くと、もはや引けぬと笑い、懐ふところから数本のナイフを取り出して宙に投げた。
「Lead me導きたまえ」
　すると、ナイフが空中で円を描くように均等に静止したかと思うと、まるでそれぞれが意志を持っているかのように、能動的な動きでフリューガーの周囲の床へと突き立っていく。
　石のタイル床であるにも関わらず、まるで染しみ込むように刃の半身を潜らせる短剣の群。
　フリューガーはその点の配置よって描かれた『魔法陣』の中心へと拳を叩たたき付つけ、自らの魔力を大地と空に循環させた。
「Lead me,now今こそ、導きたまえ!」
　すると、短剣が床を泳ぐ鮫さめの背びれのように蠢うごめき出し、

重力に逆らう形で再びフリューガーの周囲へと浮かび上がった。
　そして、それぞれの切っ先が羅針盤のように蠢うごめき、それぞれバラバラの方向を指して静止し始める。
　だが──その内のいくつかは、磁場を乱された方位磁針のように、激しい回転を続けたまま一向にその動きを止めようとしない。
「英霊の数が減ったか？　いや……」
　彼が行った事は占星術による因果の流れを観みる魔術であり、英霊存在という本来異質な存在の方向と距離を見定めるものだ。
　もしも英霊が消失しているのならば、短剣はただ地面に落ちて終わりの筈はずだ。
　だが、宙に浮いた短剣の何本かは、その場に浮いたまま勢い良く回転を続けている。
　まるで、【存在はしているが、どこにもいない】という矛盾を表しているかのように。
「……やれやれ、俺はただの斥候だ。運命の筋道に割り込む事はしねえし、謎解きはそれこそ時計塔の先生の得意分野だろうけどよ……」
　そして、改めて窓の外の大通りを見やる。
　日光が差し始めた通りに浮かび上がるのは、生々しい破壊の跡。
「あの後、ここで何が起こったってんだ？」
　まるで大通りの上だけを災害が通り過ぎたかのように、アスファルトが捲めくれた道路には周囲にあった病院のフェンスや路上駐車の車の残骸などが散乱し、水道管でも破れたのか、ところどころで深く抉えぐれた地面から水が噴き出しているような状態だ。
　砂漠に生まれたクレーターに比べれば、大した被害ではないと言えるだろう。
　だが、人の住まう街の中心部で起こされたその破壊は、砂漠の惨状よりも深く住民達の心を抉えぐる事は明白だ。
　寧むしろ、砂漠での爆発やその他の怪現象と結びつける可能性が高い。
　しかし、ロード・エルメロイII世に雇われた斥候である魔術使い

は、別の一点が気になっていた。
　それは──恐らくは壮絶な戦闘が行われたであろうその現場に、一つの死体も、血の痕すらも残されていなかったという事だ。
　まるで、生命の存在そのものが、綺き麗れいに消きえ失うせたかのように。

　　　　×　×

時計塔

「大丈夫ですか、師匠」
「ああ、問題はない」
　眉間に皺しわを刻みながら疲れ切った顔をする。そんな器用な真似まねをしながら、ロード・エルメロイII世は内弟子に対してそう答えた。
　それがただの強がりだと解わかっている内弟子の女性は、自分も師の憂いを打開すべく、一つの案を口にした。
「遠とお坂さかさんに、連絡を取られては如何いかがでしょう？　聖杯戦争の経験者である彼女なら、何かフラットさんが生き残る手段を思いつくのでは？」
「駄目だ。経験者の声というなら私で充分に代用できるし、ここまで異質となっては、寧むしろ深く【冬ふゆ木き】に関わっていた彼女の知識は仇あだになる可能性がある」
「……」
「そもそも、あのレディにそんな事を伝えてみろ。今からでもアメリカに乗り込みかねん。スヴィンや他のＯＢにもフラットの件は伝えていない。既に卒業していようと、私の生徒をわざわざ危険に巻き込むわけにもいかないからな」
　II世の手には、普段のトレードマークである葉巻煙草たばこの代わりに、一台の携帯電話が握られている。

内弟子と話しながらも何度もある番号に掛けているが、相手が出る様子は欠片かけらもない。
　そして、電話の相手──ＯＢではない現役最古参の生徒である青年、フラット・エスカルドスの顔を思い浮かべながら、数時間前から一切返信の無い携帯電話に愚痴を溢こぼした。

「あのバカめ……これでただ寝入っているだけというオチだったら、本当に許さんぞ」
　許さぬと言いながら、その結末を心底願っているかのような声色で。

×　×

『続いてのニュースです。アメリカ西海岸に突如発生したハリケーンは、その挙動が過去に例を見ない事から、通常のセットリストとは違う名が付けられる事となり──』

数時間前　スノーフィールド中央病院沿い　大通り

　それは、まさに幻想のような光景だった。
　もっとも、それは甘美な桃源郷のような意味ではなく──神々の戦か、あるいは地獄か、という意味合いでの幻想だったのだが。

　二百体を超える悪魔と化した『バーサーカー』、ジャック・ザ・リッパー。
　アルケイデスと名乗る『真アーチャー』が飼っていた三つ首の魔犬を屠ほふり去ったその圧倒的なまでの制圧力は、そのまま英霊も圧倒するかと思われたのだが──
　その『悪魔と化す力』──つまりは宝具と言われる霊基そのものが、アルケイデスの宝具『天つ風の簒奪者リィンカーネーション・パンドーラ』によって完全に奪われる形となった。
　宝具を奪う宝具。
　あまりにも常識を逸脱したその力をもってして、異形の力を身に宿したアルケイデス。
　ジャックを一蹴した彼は、そのまま目の前に立ち塞がる警官達を屠ほふり去ろうと武器を構えた。
　だが、そこに他ならぬもう一人の『アーチャー』である、黄金の鎧よろいを纏まとった原初の英雄が現れる。
　更に、赤毛混じりの金髪を靡なびかせた『セイバー』一行が現れた事によって、事態は更なる混迷へと加速する事となった。

「おいおい、参ったな。サーヴァントってのは、悪鬼羅刹も呼べるのか？」

明らかに異常な状態、一歩間違えれば即座に無数の死が満ちるであろう空気の中で、そのセイバー──『獅し子し心しん王おう』リチャードI世は、まるでこれこそが自分の居場所だとでも言うかのような自然体で、背後にいた黒髪の若者に語りかけた。
　すると、その黒髪の若者──自称『ランサー・チャップリン』のマスターであるシグマは、セイバーとは別の意味で空気を読まず、淡々とした調子で言葉を返す。
「冬ふゆ木きの聖杯戦争でも、反英雄が現れた可能性があるとは聞かされている。雇い主が言うには、条件が揃そろえばそういった存在が喚よばれる事もあるそうだ」
「なるほど。まあ、妖精を喚べる程だしな。バンシーでも現れるなら久方ぶりに見てみたかったが、どうやら、のんびりと見物できる相手じゃなさそうだ」
　悪魔のような外観となっている英霊を見た後、チラリと頭上を見上げるセイバー。
「上にいる、あの派手な英霊もな」
　するとそこには、金色の鎧よろいを纏まとった、強い気配を纏まとわせる男が立っていた。
　教会の鐘楼の上からこちらを見下ろしていたその英霊は、セイバーに対して不機嫌そうに口を開く。

「身の程を弁わきまえよ、雑種。誰の許可を取って我の姿を見上げている？」

　不遜。
　一言で表すならば、そう受け取られても仕方のない物言いだ。
　だが、それが決して思い上がりなどではなく、『そう言っても許されるだけの存在だ』という事は、セイバーには即座に理解できた。
　頭上に立つ金色の英霊。
　眼前に立つ悪鬼めいた弓兵。

──あのきんきらきんな方も弓兵か？

──なるほど、弓兵が二人って時点で、確かに今回の聖杯戦争は異常だな。

森で出会ったランサーの英霊が警告していたように、この聖杯戦争は到底まともとは言えないものらしい。

それでいて、聖杯から与えられた筈はずの知識は『正しい聖杯戦争』のものであるという事にも何かしら意味があるのだろう。

リチャードはそう考えたが、今は難しく考えているヒマもない。

恐らく、金色の英霊は自分よりも遙はるかに格上の英霊であろう。

霊基の強さは、森で出会ったあの美しいランサーに匹敵する。

正面からやり合っては決して勝てぬであろう相手だと、一目で解わかる存在だ。

そして、彼と先刻会話を交わしていた、悪魔の角の生えた異形の弓兵。

こちらもまた、絶望的なまでに力の強い英霊だという事も理解できる。

リチャードの霊基が緊迫し、強く危険を訴えかけている。

その警戒は、リチャードの宝具により随伴させた、英霊未満の欠片かけら達たちによるものだ。

暗殺者のロクスレイや弓兵のピエールと言った霊基の欠片かけら達たちは、『無駄死にする気か、早く退け』と冷静なままに警鐘を鳴らし続けている。

無関心な様子の剣士や、薄く微笑ほほえんでいるだけの魔術師の霊基も感じるが、セイバー本人は、寧むしろ目を輝かせながら目の前に立つ『絶対の強つわ者もの達たち』を見据えていた。

「俺の心に許可を取った。君を見下ろす事はできそうにないが、見上げるには値する名のある英雄と見たぞ。物言いからすると、王の類だ。ただそこに立っているだけで尊敬に値するという存在というのは中々目にかかれないからな。身の程を弁わきまえた上で、今日、ここに立てた事を感謝しよう」

「雑種め。その程度の眼めで我を値踏みしたつもりか？　感謝などいらぬ、そも、我は何一つ貴様に許しを与えておらんわ」

　表情を変えぬまま、金色の鎧よろいを纏まとう英雄は淡々と言った。

「疾とく失うせよ」

　すると──その英霊の背後の空間に歪ゆがみが生じ、宙に開いた穴から無数の武具が湧き出したではないか。

　何事かと眼めを見開いたセイバーに、それらは殺意の籠もった動きを見せる。

　まるで引かれた弩ど弓きゆうから射出される矢のように、『宝具』そのものと言った魔力を纏まとっている武具の数々が、セイバーのいる場所に向かって射出された。

　危険を事前に察したのか、シグマは既にその場を離れ、教会の陰の路地まで身を引いている。

　一人その場に残されていたセイバーは、一瞬戸惑った後、納得したように口を開いた。

「失うせよって、この世からって事か！」

　そして、愉たのしげに笑いながら己の剣を抜き放つ。

「ハハ！　君は面白いな！」

　シグマが拠点としていた沼地の屋や敷しきに飾られていた、刃引きされた装飾用の剣。

　だが、彼にとっては、持ち手があるという分だけ上等な武器だった。

　剣が一瞬煌きらめいたかと思うと、金色の英霊の背後から射出された武具をひとなぎで払い落としていく。

　が、撃ち落とせたのは僅か数本。

　数十を超える宝具が降り注ぐ中では焼け石に水状態であり、金色の英雄もそれで充分と思ったのか、既に視線を異形のアーチャーへと戻していた。

　だが──当の悪魔めいた姿のアーチャーは、リチャードの方へと顔を

向ける。
　奇妙な布地で顔を隠している為ため、その表情は窺うかがい知れない。
　何か明確な目的を持って値踏みされているという事は、リチャードの英霊としての本能が即座に理解した。
　しかし、その事を考察しているヒマはない。
　一秒に満たぬ時間の中で、既に無数の武具がこちらに迫ってきていた。
　リチャードは握った剣を再度振り抜きながら跳躍し、先刻数本の武器を打ち払った事で生じた僅かな『隙間』へと己の身を躍らせた。
　間一髪で全てを躱かわしきったが、地面に突き立った別の武具がアスファルトを破砕し、捲めくれ上がった地面そのものが新たな災厄となってリチャードの立つ場所へと降り注ぐ。

　だが、リチャードの姿は既にそこから消えていた。

「なるほどなるほど！　これほどの業物なら、地面に突き立つだけで大惨事になるわけだ！」
　神速で移動したリチャードは、地面に突き立った宝具の一つ、長剣の形をした武具を拾いあげながら声をあげる。
「この見事な拵こしらえはどうだ！　持つだけで万軍の味方を得たようだ！　何も内包された魔力の量だけの話じゃない。この作り、この造り、そしてこの創りだ！　装飾一つ取っても、簡素にして完結されている事が良く解わかる！　この武具の一つ一つが星の営みであるならば、まさに源流でありながら沃野を形作っている！　なあ！　君！　凄すごいなこれ！　周りの武器も全て同格か!?　それを惜しげも無く投げ落とすとは、君はいったい何処どこのマハーラージャだ？　ああ、ここは敬意を表して素直に言おう！　素晴らしい、そして羨ましい！」
　直撃すれば絶命は必至であろう攻撃を避けた直後に、リチャードは

まるで子供のように眼めを輝かせていた。
　突然の物言いに、遠巻きに距離を置いて態勢を立て直そうとした警官達も思わず眼めを白黒させる。
　そしてリチャードは次の瞬間、金色の英雄を知る者からすれば、命を捨てているとしか思えないような言葉を口にした。

「なあ！　これ……こんなにあるんだったら、何本か俺にくれないか!?」

×　×

教会内部

「あいつ……あんな状況なのに、なんで笑ってられるの？」
　病院のはす向かいに立つ、スノーフィールドの大教会。
　その片隅にて、一人の女性が息を呑のみながら呟つぶやいた。
　すると、その背後から、渋い男の声が木霊こだまする。
「それで？　お嬢さんの視線から察するに、君はあのセイバーのマスター……という事でいいのかな？」
　此こ度たびの聖杯戦争の監督役として聖堂教会から派遣された神父──ハンザ・セルバンテスの言葉に、窓まど際ぎわから外を覗のぞいていた金髪の女性──アヤカ・サジョウが、神父の方に僅かに眼めを向けた後、首を左右に振って口を開いた。
「私は……マスターじゃない……です」
「ほう？　君と彼の魔力の経路は繫つながっているように感じるが？　そもそもこの教会の中に現れたという事は、庇ひ護ごを求めに来たんじゃあないのか？」
「……違う。セイバーが、近くにいるならここが一番安全だって言うから来ただけ……です」
　無愛想な感じではあるが、一応神父には目上への礼を取るアヤカ。

ハンザは特に不機嫌になったわけではなく、彼女と同じように窓の外から見える大通りの様子を眺めながら言った。
「やれやれ、避難場所であるここを物もの見み櫓やぐらか塹ざん壕ごうのように扱われても困るんだが、まあいいだろう。使えるものは使うのが戦争というものだ。魔術師同士の戦争なら、尚なお更さらな」
　そしてハンザは、僅かに頭上に意識を向け、困ったように溜ため息いきを吐いた。
「どうやら、この屋根の上に英霊が一人乗っているらしいな。まったく、神聖な教会をなんだと思っているのやら」

×　×

「単なる羽虫かと思えば、不ふ貞て不ぶ貞てしい物乞いであったか」
　教会の屋根にいる英霊は、そこで初めてリチャードに興味を抱いたのか、視線だけではなく首をこちらに向けてみせた。
　怒りというよりも、憐あわれむような眼めで見下ろしてくる金色の英霊に、リチャードは悪びれた様子もなく言葉の続きを口にする。
「くれ、というのは不ぶ躾しつけだったな！　俺に対価が払えるものなら、是非とも買い取りたい！」
　そんな金色の英霊に対し、リチャードはあくまで軽い調子で語りかける。
「しかし、こんな宝を眼めにしたんだ、心に湧き上がる情動は抑えられない！　あわよくばこれらを抱えるだけ抱えて戦場を駆けたい所だ！　先制攻撃を受けたからには既に開戦中と見なすが、これ程の代物。どんな状況だろうと筋は通したい！　君達と戦う間、これらの武具を縦横無尽に借り受けたいと願うが、如何いかがか！」
「先にそこまで嬲なぶり触れておきながら、よくぞ斯か様ような戯ざれ言ごとを吐き捨てたものだな、雑種！」
　僅かに眉を顰ひそめ、金色の弓兵が口を開いた。
「とはいえ、輝きに心を眩くらませる前に、拵こしらえの良さを見抜

く程度の眼めは持ち合わせているようだな。ならば、褒ほう美びとして我が宝物の錆さびとなる事を許す。ありがたく拝領せよ」
　言い終えた時には既に行動を終えており、再び数十本の武具が空中から射出され、新たな剣と自前の剣の二刀持ちとなったリチャードに容赦なく降り注ぐ。
　先刻よりも、僅かに速度と数が上回る攻勢。
　リチャードはその武具の合間を駆け抜け──そのまま、射出された武器によって宙に舞った瓦が礫れきに足をかけ、それらを踏み台として空高くへと駆け上がる。
「ああ、命懸けの戯ざれ言ごとだ！　それ故に、君に更に願おう！」
　そして、身体からだを軽業師のように回転させながら、重々しい連撃を撃ち放つ。
「俺が望むのは武具の錆さびじゃあない」
「ほう……」
「その華美な鎧よろいに残る、ほんの些さ細さいな疵きず痕あとさ」
　迫り来る『必殺の一撃の群』を潜くぐり抜ぬけ、リチャードは空中で方向を転換させた。
　何を踏み台にするわけでもなく、空中での完全な方向転換。
　本人にもかなり負荷が掛かるであろう状態から、更にもう一段階身体からだを捻ひねり、回転の力を上乗せして金色の英雄に剣を伸ばす。
　その動きを観みた金色の英霊は、眉を顰ひそめながら自らの手にした剣を抜き放つ。
「貴様、剣けん奴どでありながら魔術を繰くるか！」
　不意打ちに近い一撃をいなした金色の英霊は、鐘楼から一段下がった屋根に下り立ち、己の宝物を握るリチャードを睨ねめ付つけた。
　余裕を失った怒声ではなく、あくまで自分に対する無礼を咎とがめる声色だった。
「いいや、今のは俺じゃない」
　まだ相手を自分の土俵に降ろす事すらできていないと判断したリ

チャードは、再び剣を構えながら、相手を挑発するように笑いかけた。
「供回りが君に仕掛けた、戯れ事さ」

×　×

「……疾はやいな」
　その状況を一歩離れた場所で観察していた、異形の弓兵━アルケイデスは、荒々しい外見とは裏腹に、冷静な眼めで新あら手ての英霊の戦力を観察していた。
　器用さは、恐らく馬上におけるアマゾネスのライダーと同程度だろう。
　神気は感じられず、純粋に人として形作られた英霊だという事は解わかる。
　だが、その速度は人間の限界を超えており、その周囲に渦巻く魔力には、人間でも神霊でもない、異質な魔力が取り巻いている。
　━我が心胆を寒からしめる程の強さはない。
　━しかし、速さだけなら、我が身を上回るか。
　━宝具次第では警戒すべき対象だ。
　アルケイデスは、そこでセイバーの身体からだから湧き出す魔力と近しいものを思い出す。
　━あれは……我が従者ヒユラスを拐かどわかした水妖どもの……。
　アルゴナウタイを脱落した時の記憶を霊基の奥底から引ひき摺ずり出だしかけた所で、その思考は強制的に中断させられた。
　彼の周囲にいた警官達が陣形を取り戻し、こちらへの攻撃を再開する兆きざしが見えたからだ。
「ふむ……詫わびねばなるまい。貴様らという敵と相対しながら、別の敵に眼めを向けた事を」
「……どうしても、退かない気か」
　警官の一人の声に、アルケイデスは首を縦に振る。

「貴様らに守らねばならぬ者がいるのと同様に、私にも奪わねばならぬ物がある。分かり合う必要などない。我が意に妥協できる者がいるとすれば、そのような悪辣の徒もまた、我が道の敵に他ならぬ」
　敵対する者は打ち倒す。
　自らと和を結ぶ者も討ち滅ぼす。
　理不尽極まりない言葉に聞こえるが、アルケイデスは、警官隊を試すように言葉を続けた。
「私が今から為なす事は、道理を理解できぬままの幼童を屠ほふり去る事だ。それを為なせば、貴様らに用はない。己の命惜しさに幼おさな子ごを見捨てる者が、お前達の中にいるのか？」

　弓を握りながらの問い掛け。
　弦つるを引くわけでもなく、ただ、握り込んだだけだ。
　それでも、次の瞬間にはその弓を振り回すだけで、死人が出る事が予想できる。
　警官隊の持つ宝具の良よし悪あしではない。
　そんなものの差異を超越した高みに、目の前の英霊は立っている。
　警官隊の誰もが足を震わせているが、それでも、それでもなお、彼らはその場から逃げなかった。眼めを背ける事すらしなかった。
　怯おびえていないわけではない。
　中には眼めに涙を溜ため、歯を打ち鳴らしている者もいる。
　通常の任務であれば、一度撤退する事が常道だろう。
　だが、彼らは理解している。
　自分達がここで一度退却した所で、もう後はないのだと。
　凶悪犯に立ち向かう重装備の機動隊も州軍もやって来る事はない。仮にやって来た所で、宝具を持つ自分達よりもまともに相手ができる筈はずがない。
　最上。
　自分達は警察という組織が用意した最上の駒であるからこそ、ここに居るのだ。

それは果たして、署長のかけた暗示の類だったのか、それとも、自己暗示として染しみついていたルーチンなのかは解わからない。

二十八人の怪物クラン・カラティンとして登録された彼らは、ただ、署長から保証されただけだ。

──「君達は、正義だ」

と、なんの裏付けもない、ただの言葉によって。

だが、それを信じる者にとって、言葉は明確な呪じゅ詛そとなり、あるいは祝福となって行動と運命を縛り付ける。

最もその言葉に縛られていたのは──右腕を失って尚なお戦場に立つ、一人の歳とし若い警官だった。

×　×

【偽りの聖杯戦争】の運営、あるいは黒幕とでもいうべき側に属している一人である、スノーフィールド警察署長、オーランド・リーヴ。

彼の部下であり、警官隊の一人であるジョン・ウィンガードは、市民にとって理想的な警官だったと言えるだろう。

物心がつくかつかないかの頃、テレビ越しに観みた母の最期。

炎に包まれているその光景を息子に見せまいと、ジョンの父は即座にテレビを消したのだが──その一瞬の炎は、ジョンの心の奥に深く刻み込まれる結果となった。

彼の母親は、数々の功績を挙げ、何度も表彰されている女性警官だったという。

普段は感情の薄い父親が、幼いジョンを泣なき止やませる為ために、寝物語として母親の話をしていた事は覚えている。

今思えば、あれは呪いの一種だったのかもしれない。

それ以来、ジョンは殆ほとんど記憶に無い母親の影を追い続ける事となる。

父親が魔術師だと言う事は、警察官になった時でさえ知らされていなかった。
ジョンは三男であり、跡目は長男が受け継ぐという事で、彼には魔術師としては兄のスペアという認識しかされていなかったのである。
どうやら父は母親にも自分の正体を隠していたようだが、アメリカという国家の上層部、その中でも魔術という分野を取り扱う一部の部署からは存在を把握されていたようだ。
聖堂教会や魔術協会と比べると、如何いかに強国であろうとも神秘への対応は一歩も二歩も遅れている状況。
そんな中、彼は警察のとある施設に呼び出され、唐突に自分の出自を明かされた。
父親も了承済みだったようで、時計塔からは疎遠な魔術師である父を、政府が経済的にバックアップするという条件で、ジョンの身は国家に売り渡された形となる。
困惑はあったが、実際に自らの手で魔術を行使した瞬間、懐疑の念は消きえ失うせ、受け入れざるをえなかった。
恐怖を覚えたからだ。
こんな力が実在するならば、今まで、いくつの事件が欺かれてきたのだろうと。
迷宮入りの事件の内、いくつが魔術絡がらみのものだったのだろうと。
あるいは、何人の無む辜この民が、偽装情報の為ために謂いわれなき罪を着せられたのだろうと。
神秘の秘匿、という概念は理解できた。
だが、その為ために他者を犠牲にするという概念は理解できなかった。
魔術師としては当然の概念だが、ジョンは一般人として育てられた身の上である。
魔術世界への理不尽に怒りを覚えていた中──オーランド・リーヴが

言った。
「外げ法ほうによる理不尽は、同じく外げ法ほうによって取り締まるしかない」
　オーランドに引き抜かれる形で直属部隊となったジョンは、転属先のスノーフィールドにおいて、驚きよう愕がくの事実を知らされる。
　──「この街は、魔術師達の戦場になる。国家が動く以上、それはもはや止められん」
　──「国を相手どる道はあるが、それは無謀すら通り越す愚策だ」
　──「ならば、我々が為なすべき事は、その中で秩序を護まもり続ける事だ。魔術世界との境界を守る番人がここにありと、世の魔術師達に証明するしかないのだよ」
　──「心せよ。我々がしくじれば、最悪八十万人の市民が犠牲となる」
　署長の言葉にも、全て納得したわけではない。
　そんな非道な真似まねをする国家など、国家であろう筈はずがないと、最初からその計画を御破算にさせようと動いた事もある。
　だが、計画を知れば知る程、個人の手では何をしようと間に合わないという事を理解し、署長の言うやり方が最も合理的であると考えるようになった。
　自分達が、聖杯戦争の流れを掌握し、市民に危害が出る前に状況を制圧する。
　ジョンは、それができれば、一つの証明となると考えた。
　英霊と呼ばれる最高の使い魔を制する力があれば、ただそこに在り続けるだけで、魔術師達への大きな牽けん制せいとなると。
　ジョンは理解していなかったのだ。
　魔術師という人でなし達が、斯か様ような常識で止まる筈はずがない事を。
　根源に到いたる為ためならば、自分達の命すら駒の一つとして扱う魔術師達にとって、ただ強大な力というだけの『牽けん制せい』など、体の良い観察対象でしかない。

真なる意味で神秘の管理者たりうる魔術協会と聖堂教会が、どれほど老ろう獪かいな手練手管を用いて世界に根を張り巡らせているのかという事を、魔術師として育たなかった彼には理解する事ができなかったのだ。
更に、もう一つだけ彼が理解していなかった事がある。
どれだけ素晴らしい武具を持とうとも、どれだけ魔術や心身を鍛えようとも──その全てを無に帰す、悍おぞましい怪物達がこの世にいる。
ジョンがそれを理解したのは、ジェスター・カルトゥーレと名乗る、俗に『死徒』と呼ばれる化け物に、己の右腕を奪われた瞬間だった。

彼は、先日の警察署襲撃事件の際、死徒を名乗る吸血種にその右腕を『喰くわれ』、完全に失う形となっている。
だが、彼らの支援者であるキャスター──アレクサンドル・デュマが新たな義手をジョンに与えた為ため、警察署長も渋々ながらに彼がメンバーに戻る事を了承した。
しかし、あくまで最前線に立たず、他の『二十八人の怪物クラン・カラティン』のサポートという形での復帰許可だったのだが──
前線や後衛を維持できる規模の陣はあっさりと崩れ去り、それぞれが宝具を手にした三十人近い警官達は、半数が怪我けがを負ってまともに動けずにいる状態だ。
残るメンバーもこうしてかろうじて陣形を取る事が精一杯であり、ジャック・ザ・リッパーが退避した今、自分達だけでまともに闘える状況ではない。

更に予定外だったことは、事前に情報を得ていた英霊、英雄王ギルガメッシュの参戦だ。
新たに現れたセイバーと戦闘状態に入っているが、その英雄王の戦い方は、まさに異質にして王道。圧倒的な物量による制圧力で無理矢

理相手の命をねじ伏せるというやり方である。
　話には聞いていた宝具の乱射も、現実に目まの当あたりにしては、ただ呆ぼう然ぜんとその光景を目に焼き付ける事しかできなかった。
　こうして異形の弓兵の前に立つのも、英雄王の強さの現実から目を逸そらす為ためではないかとジョンは一瞬考えたが、目の前にいるこの英霊も危険度では変わらぬ為ため、意味の無い比較であると考える事を放棄した。

「私が今から為なす事は、道理を理解できぬままの幼童を屠ほふり去る事だ。それを為なせば、貴様らに用はない。己の命惜しさに幼おさな子ごを見捨てる者が、お前達の中にいるのか？」
　目の前の弓兵が、重々しい声で問い掛ける。
　それに答える義務はないのだが──
　ジョンは、気付けば口を開いていた。
「居た所で笑わないし失望もしない。だが、それは、お前がここを通る事を許すわけじゃない」
「ほう、ならば、貴様は逃げないのか？」
「……冷静に先を考えるなら逃げたい所だ。どう足あ掻がいてもあんたには勝てそうもない。……だけどな、冷静さや未来と引き替えに子供を見捨てて生きる方が、俺は怖い」
　だが、その答えを聞いた異形の弓兵は、一瞬ジョンを観みた後、奇妙な事を口にする。
「……勇敢だな、人の子よ。それを蛮勇とは言うまい。それ故に、憐れなものよ」
「……？」
　首を傾かしげるジョンに、弓兵は言った。
「いや……こちらの話だ」
　刹那、ジョンの目の前に、弓兵が立っていた。
「え……？」
　瞬間移動したのかと見み紛まがう状況だが、それを為なしたのは膂

りよ力りよくによるスピードではなく、虚をついた移動によるものである。
　それは、異形の弓兵が決してフィジカルな強さだけに頼るものではなく、常人離れした修練の末に積み上げた技術まで持ち合わせているという事の証明なのだが、ジョンがその事実に絶望する事は無かった。
　何故なら、その戦力差を理解する暇もなく、ジョンの首筋を大弓が打ち据えたからだ。

　そしてジョン・ウィンガードは、自分が何をされたかを理解するよりも先に、あるいは、デュマから受け取った義手で闘えるという事を証明するよりも先に──
　首の骨を砕かれながら吹き飛ばされ、病院の入口であるガラス扉に、派手な音と共に叩たたき込こまれる結果となった。

×　×

　憐あわれな警官の一人が命を散らそうという瞬間も、教会の屋根ではリチャードと金色の弓兵の戦いが繰り広げられていた。
　攻撃の手が止やむことはなく、金色の英霊はまだ余裕を見せている。
　だが、攻撃を避け続けるリチャードに対して時々訝いぶかしげな眼めを向け、尊大な態度のまま問い掛けた。
「雑種よ。我の問いに答える事を許す」
「それは光栄だ」
　攻撃の手が緩まったものの、相手の眼めに油断や慢心の色は無い。
　この隙に突貫しようものならば、手痛いカウンターを喰くらうのは眼めに見えている為ため、リチャードも一度足を止めて相手の言葉に耳を傾ける事にした。
「避ける挙動を観みれば解わかる。貴様、似たような状況を潜くぐり

抜ぬけた事があるな？」
　するとリチャードは、肩を竦すくめながら答えた。
「ああ、昨日、同じような目にあったよ。天地は逆様だったけどな」
「……その相手はどうした？」
「仲良くなったよ。マスター……いや、契約者同士も気が合ってね」
　アヤカがマスターである事を否定している事を慮おもんぱかって言い直したのだが、相手にとってはさしたる意味も無かったようで、特に反応は無かった。
　ただ、『仲良くなった』という部分で、ピクリ、と、相手の瞼まぶたが僅かに動いた事にリチャードは気付かなかった。
　だが、空気が変わったという事は、嫌でも理解できる。
　それまでは『無礼者を排除する』という調子の敵意だったのだが、現在は、敵意が薄れる代わりに、何か別の空気が周辺に満ちつつある。
　それは、リチャードも生前に纏まとっていた空気なのだが、今の彼は気付かない。
「そうか……あいつめ、我が友ながら、相変わらず他者に甘い奴よ」
　苦笑しながら言う金色の英霊の言葉を聞き、リチャードは嫌な予感を覚えて首を傾かしげた。
「あれ？」
　──我が友。
　──どこかで聞いたぞ、この流れ。
　それは正しく１日前。
　広大な森の中で出会った英霊に対し、同盟を持ちかけた時に、
　──「僕の唯一の親友は結構気難しくてね」
　──「僕が友達を作ったり、誰かと手を組もうとする度に『友と手を組むに相応ふさわしいか、我が試してくれよう』なんて言って無理難題をふっかけては追い払うんだ」
　そして──
　それまでとは違い、自分の周囲全ての空間が歪ゆがみ始める事に気

が付いた。
　──あ、これ、俺死ぬ流れじゃないか？
　宝具の射出される『歪ゆがみ』に四方を囲まれた状態で、全身に『死』を感じるリチャード。
　そんな彼に、金色の英雄は、森で出会ったランサーが言った通りの言葉を口にした。
「友と手を組むに相応ふさわしいか、我が試してくれよう」
「おいおい、友達を取られるかもしれないからって……」
　軽口を叩たたき掛けたリチャードだが、その言葉を途中で噤つぐんだ。
　彼は、勘は鈍い方ではない。
　相対する英雄の表情を観みれば、それが単なる独占欲や嫉妬などと言った俗な感情で動いているわけではないという事は解わかる。
「いや、流してくれ。今のは俺の未熟だ」
「良くぞ言葉を止めたな。褒めてやろう。もしも続きを言い切っていたならば、試すまでもない。その首を刎はねて終わらせていた所だ」
　そして、金色の英雄は、王ではなく、戦士ではなく、英霊でもなく、一人の『裁定者』としての言葉をリチャードに対して紡つむぎ出した。
「事情が変わった。雑種、貴様は有象無象ではなく、我が試練を与えるに相応ふさわしい『求道者』として認めてやろう。もしも生き延びれば、お前は奴の同盟者であり、我の明確な『敵』となる」

「その時は改めて、『人』として我が宝物の錆さびとなる事を許す。誇りに思うが良い」

　　　　×　×

●●●●●にて

チキ、カチャ、シャラリ、と。
小さな音の群が、男の暗闇を渡り歩く。

硬い物の触れ合う音に混じり、人が何かをささめく声が、ジョンの耳じ朶だを幽かすかに震わせた。
声を伴いながら絶え間なく響くその金属音は粗野にも聞こえるが、まるで音楽を奏かなでているような優雅さも感じられる。
「ここは……？」
ゆっくりと身体からだを起こす。
痛みは不思議と感じない。
だが、それ以外の感覚も曖昧だ。
匂いだけが僅かに心を擽くすぐるが、それは、果実酒やバターの焦げる匂いが入り交じった、食欲をそそる類のものだった。
そしてジョンは、そこがレストランの中であるという事に気付く。
オレンジ色の暖かい光が満ちた空間だが、それは電球の明かりではなく、燭しよく台だいの炎によって照らされた色だった。
明かりの中に浮かぶ巨大な長テーブルには一人の男が座っており、その周りでは絶世の美女達が談笑したり、時に男のグラスに酒を注いだりしているのが見える。
「あの……俺……」
そのテーブルに座る人間に声をかけようとすると、その男はナプキンで口を上品に拭いた後、ゆっくりとこちらを振り返った。
「よう、目が醒さめたか」
「え……デュ……キャスターさん!?」
それは、ジョン達『二十八人の怪物クラン・カラテイン』がよく知る英霊、警察署長と契約を結んだキャスターである、アレクサンドル・デュマの姿であった。
だが、髪は逆立つような形で伸びており、体格も工房で会った時より少し大柄になっているような気がする。
「あの、なんでここに、俺……あの、他の皆は？」

そこまで話しかけて、ジョンは気付いた。
デュマが、自分の事を見ていないという事に。
「え？」
燭しよく台だいを触ろうとするが、ジョンの手はそれをスルリと擦り抜けた。
そればかりか、料理を運んできた美女がジョンの身体からだを幽霊のように擦り抜けるのを観みて、彼は、自分がここには存在していないという事に気付く。
短い期間ではあるが、魔術師として修行した事も巧を奏したのだろう。
これがただの夢などではなく、魔術的な意味のある何かであるという事も理解していた。
「そう警戒すんな。ここは食堂だ。ちょいとばかし高級だから、騒いだりしねえでくれよ？　俺があんたの敵でも味方でも、とりあえずは話を聞く事を勧めるがね」
一見、自分に対して話しかけているようにも思える。
だが、デュマの目はこちらではなく、自分の斜め後ろに立つ誰かへと向けられている。
ジョンは混乱がまだ収まっていなかったが、覚悟を決め、ゆっくりと己の背後を振り返る。

するとそこには──怪我けがを負った一人の男がいた。
身体からだの一部に包帯を巻いており、ところどころに血の滲にじんだ跡がある。
だが、包帯の白のイメージも、乾きかけの血の赤褐色もすぐに印象から消える事となった。

黒。

その男の纏まとう外がい套とうの黒さは、男の魂の色を表している

かのようだった。
　肌の色は病的なまでの青白さであり、髪の色も漆黒には程遠い。
　外がい套とうの下には貴族が纏まとうような豪ごう奢しやな服が見え隠れしており、何か大きなトラブルにでも巻き込まれたのであろうか、外がい套とうのアチラこちらが焼け焦げているようにも見える。
　だが、その身を包む外がい套とうの黒さこそが、その男の本質であるように思えてならなかった。
　ジョンが戸惑う一方で、その黒い外がい套とうの男も、一言も発さぬまま、警戒した目つきでデュマの事を睨にらみ付つけている。
　その殺気を感じ取ったのか、デュマは肩を竦すくめながら手を振った。
「あー、今のは無しだ。殺されるのは勘弁なんで、俺は敵じゃねえって断言しとくぜ。俺が敵なら、あんたはとっくに冥府行きの船に乗ってる。そうだろ？　いや、あんたが相手取ってきた『敵』の事を考えりゃ、冥府に落ちる程度で済むならまだ幸運って所だな」
　デュマは手近にあった水の瓶を手に取ると、それをグラスに注ぎながら言葉を続ける。
「まあ、水でも飲めよ、毒味がいるなら俺がやる」
　すると、その黒尽くめの男は、警戒を解かぬままデュマに対して口を開いた。
「何者だ……私を……知っているのか……？」
「ああ、まあな。直接の関係者じゃねえが、あんたの事はたまたま知った。あんたがこれまで成し遂げて来た事と、これからやり遂げようとしてる事もな」
　すると、警戒の色を強めた黒い男が、ゆっくりと立ち上がる。
　その男に対して、デュマはグラスに注がれた水を差し出し──
　試すように、向かいの席を顎で指す。
「座りなよ、そんな形相で立ち続けるのは、伯爵様らしくねえぜ」
「……」
「ああ、それとも、こう呼んだ方がいいか？」

そしてデュマは、相手の表層的な一面であり、彼の核心でもある固有名詞を口にした。
「エドモン・ダンテス。まあ、いい名前だな。こいつはきっと文章映えするぜ？」

「小説の題としちゃ、『モンテクリスト伯』の方がいいけどな」

　　　　×　×

市街地中心部

「裁定、か」
　リチャードは同じ屋根の上に立つ男に対し、剣を構え直しながら問い掛ける。
「なるほど、君は弓兵だと思っていたが、もしや裁定者ルーラーのクラス持ちか？」
　聖杯から与えられた知識を元に、リチャードは、とあるエクストラクラスを口にした。
　だが、金色の英霊はそれを鼻で笑う。
「戯たわけ。聖杯戦争における裁定者ルーラーはあくまで世界の規範に則のつとった中立な天てん秤びんに過ぎん。我の裁定には中立性などない。我の歩んだ路みちと、我が宝ほう物もつ庫こに積み上げた財こそが貴様を裁く天てん秤びんよ」
『俺がルールだ』という事を仰々しく言い放った英霊に対し、リチャードは寧むしろ喜色の笑みを浮かべて頷うなずいた。
「戯たわけ、か。良く言われる」
　剣を肩に担かつぎ、教会の屋根からチラリと大通りを見下ろしつつ、リチャードは嘆息する。
「そもそも俺は、この街を守る衛士達が謎の病魔を振りまく英霊を調査する、と聞いたから、何か手伝える事は無いかと思って来ただけな

んだけどな。やはり聖杯戦争、出会ってしまえば自然と荒事にもなる、か」
「己を偽るな、雑種」
　金色の英霊が、鼻を鳴らして言った。
「何を憂う事がある。誰よりもこの状況を楽しんでいるのは、他ならぬ貴様であろう？」
「……」
　不敵な笑みを返答代わりとし、リチャードは金色の英霊に問い掛ける。
「だいたい、その病魔……君の友達は『黒い呪い』って呼んでいたけどな。それを何とかする為ためにあの衛士達は集まっているんだろう？　手伝わなくていいのか？　君と同盟を結ぶという手もあるが？」
　警官の事を敢あえて『衛士』と呼ぶリチャードは、同盟を結んだランサーの話――『呪いと泥が混じれば大変な事になる』という話を思い出しつつ、相手の反応を待った。
　だが、金色の英霊はリチャードから視線を外さず、腕を組んだまま言う。
「あの無礼な死呪まじないか。そんなものは現れ次第消し飛ばすまでよ。貴様如ごときが何をしようと結果は変わらん。多少忌いま々いましい風を吹かせているようだが、呪いの源流を誅ちゆうすれば終わる話だ」
「なるほど。確かに俺はここに来たばかりで、状況を摑つかみきれていない。だが、どうやら君の言う『裁定』には俺の全てが懸かっているらしい」
　リチャードは首をコキリと鳴らしながら、自分の現状について問い掛けた。
「天てん秤びんに載ってるのは命なんてもんじゃない。まさしく全部ひっくるめた俺の未来と過去全部だ。そうだろう？」
「囀さえずるな。一々問とい質たださねば理解できぬ愚者でもあるま

い」
　理不尽な事を言う金色のサーヴァントを見て、リチャードは苦笑する。
「なるほど。納得できる。ならここは既に生き残りを懸けた戦場というわけだ」
　そして—次の言葉を吐くと同時に、獅し子し心しん王おうが動き出した。

「盟約は為なされた。今の互いの言葉を鬨あわせとし———俺も、侵攻を開始する」

　彼が一歩踏み出すのと同時に、周囲の歪ゆがんだ空間が輝き出す。
　そして、夜空を埋め尽くす星が全て落ちてきたかのように、無数の『宝具』がスノーフィールドの街に降り注いだ。
　教会の隣のビルの屋上へと跳んだリチャードに対し、四方からの『裁き』が迫る。
　それは、無限の連撃でありながら、終わりの無い強烈な一撃とも言えた。
　四方から迫る果ての無い死。
　だが、リチャードもまた、ただ狩られる獣ではない。
　まがりなりにも、七種の中で『最優』と言われるセイバーのクラスにて顕現した英霊だ。
　意図の読めぬ金色の英霊の試練を前に、リチャードもまた、王の霊基を持つ英雄として己の力を解放し始める。
　緩急を付けて降り注ぐ宝具の雨。
　その合間を縫いながら、リチャードは屋根の上に跳躍する。
　迫り来る宝具。
　その武具の一つを蹴りつけて身体からだを捩よじり、続く連撃を紙一重で躱かわし抜けた。
　曲芸というには無骨に過ぎ、戦いと言うには流麗に過ぎる動き。

一つでもその身に喰くらえば致命傷となるであろう連撃の中心へと突き進み、その圧倒的な速さを持って、先刻の宣言通り、死の領域へと侵略を開始した。

リチャードは自らが手にした剣を構えながら身体からだを捻ひねり、下から思い切り宙を斬り上げる。

その剣筋から溢あふれ出でる輝きが迫り来る刃を纏まとめて薙なぎ払はらい、自らが攻め込むべき新たなる路みちを生み出した。

とは言え、一つ間違えれば即死する状況に変わりはない。

その死と生の境界を神速で歩みながら、彼は誰に語りかけるわけでもなく、自らを鼓舞すべく独り言として、その言葉を呟つぶやいた。

「俺には、あんたに届く要素は少ないかもな」

まるで、己自身との誓約であるかのように。

「だが……」

「速さなら、俺が勝てる」

×　×

カジノホテル『クリスタル・ヒル』　最上階

ティーネ・チェルク。

英雄王ギルガメッシュのマスターにして、心の奥底から臣下の礼を取る少女。

彼女は、部族の復ふく讐しゆうを成す為ために、数代かけて『造り出された』巫女みこだ。

教会には属さぬ形で連綿と力を受け継いで来た、土と地ち守もりの一族。

無数の魔術師と一部の権力者達の手によって、魔術世界の外側と内側、両方からの圧力に膝を屈する結果となったその部族は、いずれ土地を奪い返す為ために、自分達が護まもり続けて来た土地に、文字通

り身を捧げた。
　新たに生まれた子供達に刻んだ魔術刻印。
　西洋魔術のソレとは多少異なる理ことわりによって刻まれたその紋様を通し、それを経路として土地の霊脈と魔術回路そのものを無理矢理繋つなげ、魔術の『触媒』として育て上げる。

　其は、一つの願い。
　其は、一つの奇跡。
　其は、一つの叫び。
　其は、一つの回路。
　其は、一つの贄にえ。
　其は――幾千幾万の命を煮詰め上げた、鈴すず生なりの呪じゆ詛そ。

　土地を管理する魔術師達の行為は、土地に誓約を結ばせる事と同義だった。
　誓約という名の、至極単純にして純粋な呪い。
　土地の霊脈の力が及ばぬ場所に移れば、死ぬ。
　その見返りとして、土地の霊脈と己の命を同化させる事で、無詠唱にも関わらず最高の効率で強力な魔術を繰り出す事ができる。
　土地に無理矢理魔術回路を拡張させ、それを子へと引き継いでいく。
　ティーネ・チェルクもまた、次世代の為ための贄にえとして、その苦しみの果てに次代の後継者へとその遺伝子と刻印を受け継がせる装置として生まれた。
　彼女には、十二人の兄と九人の姉が居た。
　だが、彼ら、彼女らは全て土地の中に取り込まれた。
　人の身の魔術回路と土地の霊脈を同化させる為ための犠牲の果てに、ティーネの身体からだはようやく父親を超える程の魔術行使力を身につけたのである。

そして、次代の子孫、息子であろうと娘であろうと、素質のある者達に同じ事を成さねばならぬ運命だったのだが――

聖杯戦争が、その運命を狂わせた。

魔術師達が、ティーネの祖先から土地を奪った目的。

簒さん奪だつ者しゃ達たちは、今、まさにその悲願を成じょう就じゅさせようとしていたのだ。

土と地ち守もりの一族はすぐに彼女を担かつぎ上あげ、ティーネに聖杯戦争の知識と戦う為ための魔術を仕込み始めた。

ティーネ・チェルクを、聖杯戦争のマスターとする為ために。

彼らが、彼女を長として崇あがめているのは事実である。

気に食わぬと反発する者も居るが、一族の中では少数派だ。

同時に彼らは理解している。

敬意を払うべき長であると同時に、少女は、事を成す為ために命を使い果たす一つの贄にえ――『土地の奪還』というある種の呪じゅ詛そを打ち込む為ために使い潰さねばならぬ触媒であるという事を。

しかし、彼女は部族に唆そそのかされている憐あわれな傀儡くぐつではない。

彼女自身も、己の命を使い潰す覚悟で今回の聖杯戦争に臨んでいた。

たとえそれが部族の意志ではなく、受け継がれてきた宿命そのものによって操られた意志だとしても。

ティーネ・チェルクは、自らが簒さん奪だつ者しゃである魔術師達への呪いそのものとして生きる事を、幼き頃から受け入れていたのだから。

そのティーネは今――眼めを見開き、ただ、その光景を瞳に焼き付ける事しかできなかった。

流星のように降り注ぐ、宝具の群。

それぞれの武具が神代を思わせるマナを纏まとい、無機質な空気を

切り裂き続けていた。
　彼女は現在、カジノホテル『クリスタル・ヒル』の最上階から、遠見の術式を用いて地上の様子を把握している。
　最上階から直接見下ろし、魔術で視力を強化すれば事済んだかもしれないが、彼女の人としての性根、魔術師としての危機感知能力、そしてマスターとして英霊と結んだ経路によって開かれた種族としての本能が、自らの英霊──英雄王ことギルガメッシュを高みから見下ろす事を拒絶していた。
　彼女が老練な魔術師であれば、迷わず高みから見下ろしただろう。
　あるいはその行動により英雄王の強い不興を買うかもしれないが、それはまた別の話だ。
　使い魔越しに覗のぞき見る事すら不敬なのではと考えていた程だが、一度エルキドゥとの戦いを遠方より観測した事は黙認されたので、それは超えてはならぬ境界の内側だと判じている。
　──流石さすがはギルガメッシュ様。
　──確かにあのもう一人の弓兵は難敵だけれど、あの御方の力は、きっとそれを超える。
　──あの憐あわれなセイバーは、もう……。
　そう考えた瞬間、ティーネは僅かに息を呑のむ。
　遠見の術式越しに見たその映像の中で──未いまだにセイバーは生きていた。
　それどころか、徐々に英雄王の攻撃に対応し始めたではないか。
「あの英霊は……いったい……？」
　セイバー。
　聖杯戦争では最優とされるクラス。
　ティーネの部下達による事前の調査では、触媒として運び込まれた遺物から、黒幕陣営は恐らくアーサー王を呼ぶつもりだろうと推測されていた。
　同じく黒幕陣営に身を置く繰くる丘おかの魔術師は、中国本土より『秦しんの始し皇こう帝てい』に纏まつわる遺物を運び入れたとの情

報が入っており、こちらはなんのクラスで顕現するか予想もつかない。
　だが、ティーネはそれらの触媒を奪うつもりはなかった。
　遺物を運び込んだのが黒幕の魔術師達であるのならば、容易に奪う事は叶かなうまい。
　そもそも、ティーネは『ギルガメッシュ』の触媒を持った者がこの土地に足を踏み入れたと知った瞬間から、自分が契約を結ぶべきサーヴァントは、仕えるべき王は、あらゆる王の源流であると噂うわさされる英雄王に他ならぬと決意していた。
　あのもう一人の弓兵──アルケイデスと名乗った男や、アマゾネスの女王を名乗った騎兵。
　そうした尋常ならざるサーヴァント達を目にした後でも、ティーネは英雄王が最後まで勝ち進む事を信じて疑わない。
　繋つながった経路から感じられる魔力は、それ程までに尊く、傲慢で、全てを傅かしずかせる王気に満ちていた。
　敵となりうるのは、その英雄王自身が『友』と呼んだあのランサーぐらいだろう。
　なれば、最後の導きの時まで間に立つ者は全て薙なぎ払はらわれる定めだと思っていた。
『セイバーが最優』などというのは、ただの目安に過ぎぬと、頭の端に追いやっていた情報だったのだが──
「速い……」
　ティーネ・チェルクは、思い知らされた。
　確かに、最優と謳うたわれるからには、どのようなセイバーであろうと、何かしら『突破した』部分があるのだろうと。
　あれが推測通りアーサー王なのか、それとも全く別の英霊なのかは解わからない。
　遠見の術式越しに見えたセイバーを見ても、英雄王やアルケイデスと比ひ肩けんする霊基とは思えない。ヒッポリュテと名乗ったアマゾネスの女王と同等か、少し高い程度だと感じられた。

だが、そのセイバーは、ギルガメッシュの『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』の猛攻の中、まだ生きている。
　ギルガメッシュの友だというランサーのように全て迎撃したわけでも、今は警官隊と対たい峙じしているアルケイデスのように宝具の全てを受けきったわけでもなく──セイバーは、その雨の全てを躱かわし続けていた。
　時折手持ちの剣を輝かせていくつかの宝具を打ち払ってはいるが、その行為は必要最低限の場面に留とどめている。
　ただ逃げ続けているだけというのならばまだ解わかるが、何より異様だったのは、そのセイバーの行動が、逃亡ではなく、明確な『攻勢』であるように感じられた事だ。
「まさか……」
　徐々にギルガメッシュへと接近しつつあるセイバーを見て、ティーネの頬に汗が伝う。
「まだ……速くなる……？」

×　×

教会裏　広場

　広場の植樹の陰に隠れていた少年──フラット・エスカルドスが、教会や隣接する建造物の上で行われている攻防を見て声をあげた。
「凄すごい……あの金色の人の攻撃もチートですけど、それを避けてるあの人も相当ですよ！　アクションゲームの緊急回避を無限に、しかもずっとモーションキャンセル状態でやってるみたいだ！」
『君の例えは……一々俗物的だな……』
　ぼやくように念話を飛ばしてきたのは、時計の姿に戻ったサーヴァント、ジャック・ザ・リッパーだ。
　フラットと契約したバーサーカーであるジャックは、アルケイデスに霊基の半身ともいえる宝具の一つを奪われ、尋常ならざるダメージ

を負っている。
　その為ため、魔力の消費が少なくて済む無機物へと変じているのだが――
『さて、我々も動くとしようか』
「でも、本当に大丈夫なんですか、ジャッ……バーサーカーさん」
『私が撤退すると言っても、君はなんやかんや理由をつけて一人で警官隊に協力する気だろう？　短い付き合いだが、大体君の行動は理解した』
「やだな……俺、そんな正義の味方みたいに見えます？」
　困ったように言うフラットに、腕時計となった英霊が念話を飛ばす。
『君は恐らく違うだろう。だが、君の師匠は、正義や悪の概念はともかく、やりとげようとするのではないかね？　ならば、その生徒たる君はそれに倣ならう筈はずだ』
「……参ったなあ、ジャックさんは、俺の心でも読めるんですか？」
『よほど勘の悪い者でなければ解わかる。しかし、君は無策で突っ込む程バカではないが、その策自体がバカの極みである可能性は大いにある。私が舵かじ取とりをしなければなるまい』
「大丈夫ですよ、俺も生きて帰るつもりですから！　貴方あなたの事を、みんなに自慢しないといけないですからね！」
『もう少しこう、小こ洒落じやれた理由はないのかね？』
　馬鹿げた会話に興じるジャックだが、それは、怪け我が人にんが痛みを紛らわす為ために会話を続けているようなものだった。
『まあいい。君は荒事というよりサポート向きなのは解わかっている。私はサポート役の君の更にサポートに徹するとしよう』
「……そうですね」
　フラットは、敢あえて『もう闘えないか？』とは聞かなかった。
　彼の目から見ても、著しく弱体化している事が見て取れたからだ。
　宝具という概念を奪われた事で、彼の霊基は著しく不安定になっている。

だが、代わりに別の事を問とい質ただした。
「……あの人を倒せば、バーサーカーさんの霊基は戻りますか？」
『解わかっている事を聞くものではない。君には見えているだろう？』
「……はい。俺の目だと、もう完全に霊基が融合してます……なんだろう……凄すごく気味の悪い、泥みたいなのの中で溶け合ってるみたいな……」
『ああ、恐らくアレを消滅させた所で、私にあの力は戻らないだろう。それこそ、一度消滅して座より再召喚でもされなければな』
そう言うジャックに、フラットはシュンとしながら言葉を紡つむぐ。
「でも、そのジャ……バーサーカーさんは、もう記憶とかもリセットされて、今のバーサーカーさんとは別人なんですよね？」
『もうジャックで構わん。あそこまで宝具と口上で己を晒さらした以上、既に私の真名はバレているだろう。……【座】に記録はされるかもしれんが、聖杯戦争の駒として呼ばれる以上、記憶は別人だな。よほど特殊……いや、異常とでも言える事態であれば話は別かもしれんが』
「ええ、知ってます。教授は、それでも会おうとしていましたが……」
『ああ……君の師は、聖杯戦争の経験者だったな』
眼めの届く距離で金色の英霊の宝具が飛び交っている状態だというのに、日常的とも言える会話を続ける二人。
フラットは生来の気質だろうが、あるいは、ジャックを気遣っての事かもしれない。
ジャック自身も、気が付いていた。
会話を続ける事で正気を保たなければ、霊基そのものが危うくなるであろうという事を。
『とはいえ、ここで手をこまねいているわけにもいかない。撤退がないのなら、如何いかにしてあの悪鬼と化した英霊を止めるかだ』

「あの金色の人とぶつかって、どこかに行ってくれればいいんですけどね……」
『あの金色の弓兵は、君の師が「絶対に近づくな」と言っていた相手だろう。今なら私にも解わかる。あれは、誰に対しても平等な災厄だ。基本は隠おん密みつ行動で行くしかない』
　如何いかにして短時間で再起を図り、警官隊を援護するか二人で思案する。
　とはいえ、真っ当に思案する余裕はあまりない。
　頭上で争いを繰り広げているアーチャーとセイバーの流れ弾がいつこちらに飛んでくるか解わからない上に、警官隊があの英霊を相手に長く持つとも思えない。
「令呪をもう一画使ってブーストをかけて、病院内にいる少女を確保するのはどうでしょう？」
『警察所長からの情報によれば、件くだんの少女は未知の病魔に脳髄を蝕むしばまれているという話だ。警察のサポート無しで少女を無理矢理連れ出すのは賛同できんな。他者への感染の危険は薄いという話だが、警察のサポート無しに連れ出せば、少女の身体からだが持たないかもしれない。そもそも、少女を運ぶ先として想定していた教会が、今はあの有あり様さまだ』
　金色のアーチャーが屋根に仁王立ちしている教会を見て、フラットは困ったように言った。
「じゃあ、結界か何かで隔離して、見えなくしちゃうってのはどうですかね？　前に教授とお墓とかに行った時に、色々な隠蔽のパターンを覚えたんで！」
『その場合、私の力を奪ったあの弓兵は病院ごと消し飛ばすだろうな。恐らくあの英霊にとって、その程度は朝飯前だろう……待て』
「え？」
『誰かが来たぞ』
　会話を一旦止め、ジャックはフラットに警戒を促す。
　フラットが周囲に意識を向けると、いつの間にか彼らが身を潜めて

いる植樹に向かって、一つの影が近づいて来ていた。
　それを見た瞬間、マスターとして儀式に登録されたフラットは、相手がジャックと同じく、英霊として顕現した存在であると理解した。
　同時に、それが戦闘向けの英霊ではないという事も。
　すると、ジャックは即座に巨大な狼おおかみの姿に身を変え、相手を威圧するように吼ほえた。
「そこで止まって貰もらおう！　貴君は何者か！」
「うわあ⁉　ジャックさんがル・シアン君になった⁉」
　なんらかの固有名詞を叫ぶフラットだが、それには答えず、目の前に迫る男に目を向ける。
　短く刈り込んだ髪の毛に、アンティークな感じがするが、上品に誂あつらえられた質の良い服。
　戦士という雰囲気ではないが、魔術師や騎兵とも違う趣がある。
「その服装、１００年から２００年ほど前のフランスの者と見受けるが？」
『切り裂きジャックの正体は獣である』という噂うわさ話ばなしを元に、狼おおかみの姿となったジャック。
　獣特有の殺気と威圧感が籠められた問いに対し、10m程先で止まった男は、肩を竦すくめながら言った。
「おいおい、人を見た目で判断するなって教わらなかったのか？　俺はあんたの事を見た目で判断してねえぞ？　そのナリで好物がコメルシーのマドレーヌだって言われても驚かねえさ。……多分な」
「あ、美味おいしいですよね！　コメルシーのマドレーヌ！」
　フラットが警戒しつつも器用に言葉を返し、それに更に男が反応した。
「お？　話が通じるってこたぁ、まだ名物なのか？　コメルシーの焼き菓子はよ」
「はい！　フランスが地元の友達が、教授や友達へのお土産によく持ってくるんです！」
「そうかー。俺が生きてる頃とどう味が変わったのか、喰くって比べ

てみてえなぁ。おっと、今の会話で結局俺が見た目通りフランス出身ってバレちまったがまあいい。そんな事はマドレーヌの味に比べりゃ大した話じゃねえ」
　談笑めいた雰囲気で、フランスの地方自治体コミューンについての会話を続ける謎の男とフラット。
　彼らの背後の上空では宝具の流星が降り続けており、隣に立つ巨きよ狼ろうの姿を取ったジャックは、居心地の悪そうな眼めでフラットに声を掛ける。
「おい、そんな話をしてる場合ではないぞ。警官隊もあの怪物を相手にあと何分持つか……」
　だが──
「坊ぼう主ずの事は、少し量りかねるな」
　ニイ、と口角をつり上げながら空気を変え、男が言った。
「菓子の話に食いついときながら、こっそりと俺の影に術式を仕込むあたりは如何いかにも魔術師だ。だがな、とっくに術式が完成してんのに、そのまま菓子の話で盛り上がるってのは魔術師らしくねえ」
　その言葉に、ジャックは驚いたようにフラットを見て、フラットは不思議そうに首を傾かしげる。
「え？　だって、もし敵だったら危ないなと思って仕込みましたけど、敵じゃないのに発動させたら魔力の無駄遣いだし、貴方あなたに悪いじゃないですか」
「……」
　少し黙って観察した後、男はフラットを見て愉たのしそうに言葉を続ける。
「坊ぼう主ず……、お前、何だ？」
「え……？　ああ、名乗りの話ですね！　俺はフラットです！　呪じゅ詛その対象になるといけないし無駄に長いから軽々しくフルネームは明かせないんですけど、普通に人に名乗る名前はフラット・エスカルドスです！　バーサーカーさんのマスターをやっています！」
「いや、そういう意味じゃねえんだが、まあいいや。あと、フルネー

ムがあるって事自体を軽々しく話すもんじゃねえと思うぞ？　ま、名乗られちまったからには俺も名乗らないとフェアじゃねえな」
　すると、訝いぶかしげにジャックが尋ねる。
「……名乗る？　仮にもサーヴァントが、同じく聖杯戦争の参加者である我々にか？」
「あんだけ『俺は切り裂きジャックだー！』って言いたげな口上と宝具を見せつけてた奴に言われたかねえなあ？　まあ、あんたが暴れたのは俺が死んだ後らしいがね」
「……」
「俺の真名なんざ明かしても明かさなくても弱点なんか変わらねえよ。首を刎はねりゃ死ぬ。心臓を突き刺しゃ死ぬ。溺れりゃ死ぬ。飢えりゃ死ぬ。凍えりゃ死ぬ。歳とし取りゃ死ぬ。そうら、弱点だらけだ。簡単な呪いも防げやしねえ男が、今さらなんの弱点を明かすって？」
　敵意は欠片かけらも見せない英霊だが、ジャックは己の霊基に余裕がないこともあってか、フラットを守る位置に立ち、尚なおも警戒の眼めを向けた。
「解わからんな。敵対する意志がないなら、何故我々に接触した？」
「おいおい、マスター同士が同盟を結んだろ？　いわんや、サーヴァントをや……って奴だ」
「……なるほど、君がそうか。それならば理解できるが……」
　ジャックとフラットは、同盟相手であるマスター、スノーフィールド市警の署長から『こちらのサーヴァントの真名は明かせないが、どのみち後方支援専門だ。君達と顔を合わせる事はあるまい』と言っていた。
　一時的な共闘関係とはいえ、最終的には聖杯を巡って争うので真名を明かさなかったり、無意味にサーヴァント同士を接触させるのは得策とは言えない。
　ジャックもそう納得していたからこそ、そのサーヴァントが眼前に現れる事が不自然に思えてならなかったのだが──

「とは言え、名乗るにはそれなりに理由がある。戦闘において、真っ当な共闘関係を結べる程の担保は俺にはねぇ。だが、坊ぼう主ずのやり口を見る限り、これは素直に俺が腑はらわたの一部を晒さらすのが、坊ぼう主ずと一番真っ当に手を組める筋道って判断した」
　そんな疑念の眼めを向けられている事を承知の上とでもばかりに、その英霊は愉たのしげに肩を竦すくめながら名乗りを上げた。
「俺の名前は、デュマだ。何故かキャスターって事になってる」
「えッ？」
　思わず問い返したフラットに、デュマと名乗った英霊が肩を竦すくめた。
「アレクサンドル・デュマ。聞いた事ねえか？」
「ええッ!?」
　今度は明確な驚きの声を上げ、フラットが大声を上げる。
「ど、どの!?」
「どの？」
「ナポレオンの部下の超強い将軍ですか!?　それとも、その将軍の子供の『三銃士』とか『Les Mille et Un Fantômes千一夜亡霊奇譚』の作者の!?　まさか、更に息子さんの『椿つばき姫ひめ』の!?」
「二番目だ。三銃士はともかく、随分とコアなもんまで知ってんだな。ま、俺のなんかよりもせがれの作品がきっちり知られてるようで何よりだ」
　自嘲気味に笑いながら言うキャスター、デュマに対し、フラットは眼めを輝かせながら叫ぶ。
「知ってるに決まってるじゃないですか！　俺、三銃士の映画もアニメも人形劇も見ました！　ええ!?　本当に本物ですか!?」
「英霊は複写みてえなもんだから『本物か』って言われると困るが、まあ俺がデュマかどうかって意味なら、答えはイエスウイだ。しかし、俺の本は１００年以上は残らねえだろうって思ってたんだが、良かれ悪かれ、何年経たっても人の本質ってのはそんなに変わらなかったって事かねえ。憧れるなら俺の息子の方にしといた方がいいぜ？

あいつの才能は本物だ」
「そんな、自分の才能が偽にせ物ものみたいに言わないで下さい！　俺の教室のＯＢに一家揃そろって本好きな人がいるんですけど、当時に出版された原本を何冊も持ってるぐらいですよ！　凄すごい凄すごい！　これは百人力ですよジャックさん！　ああ、本当はもっと話してこの人の情報を引き出したいんですけど、警察の人達を助けるのが先ですし、協力を頼みましょう！」
「ふむ……確かに時間も無い。マスターがそう言うのならば、とりあえず信用はするが……」
　するとジャックは、再び腕時計の姿に戻ってフラットの腕に収まった。
　それを見たデュマは、クツクツと笑いながら言う。
「ありがたい事だが、流石さすがにありゃ、俺一人で何とかすんのは無理だぜ？　わざわざ動かなくて済む時計になったって事は、あんたの霊基も実は相当ヤバいだろ？」
　デュマの視線の先にあるのは、教会を挟んだ向こう側、大通りの方で断続的に光る閃せん光こうだ。
　いつの間にか教会の屋根から英霊達は場を移したようだが、この閃せん光こうと、立て続けに響いてくる轟ごう音おんが誰の手によるものかは解わからない。
「だが、それでも何とかするってんなら、協力はできる」
「本当ですか!?」
「小僧。お前よ……魔術師らしかぁねえが……目的の為ために、自分の命を鍋にぶち込む覚悟はあるか？」
「えッ？」
「安心しな。できあがりにムラっけのある魔女の大鍋じゃあねえ。最新式の圧力釜に、キッチンタイマーもつけてやるからよ」
　デュマは奇妙な物言いをしつつ、フラットとジャックに不敵な笑みを浮かべてみせた。
「なにより、調理するのは、この俺なんだからな」

「……なんて無茶な連中だ」
　感情は一切顔に出していないが、それでも少し呆あきれた様子で言うシグマ。
　今回の聖杯戦争の『黒幕側』に身を置く魔術使いの傭よう兵へいであり、本来ならばランサーのマスターとなる筈はずだった青年。
　だが、『ウォッチャー』という謎のクラスの英霊に取り憑つかれたような状態の彼は、自分なりに生存確率を上げる為ため、セイバー、そしてアサシンと一時的な共闘関係を結ぶ形となった。
　そして、『ウォッチャー』の影法師達からもたらされた情報を元に、病院で意識不明となった少女と契約を結んでいるというサーヴァント、そして、彼女を狙っているという別陣営の敵の様子を見にやってきた形となる。
　自らのサーヴァントから与えられた情報は、セイバーやそのマスターのアヤカ、そしてアサシンには『上層部から伝えられた情報』として誤魔化している。
　この街で起こっている事象を、俯ふ瞰かん的てきに把握しているという謎の英霊。
　ウォッチャーというクラスの特性も知らされぬまま、自分の明確な目的も持たぬまま聖杯戦争に巻き込まれたシグマは、未いまだに周囲の大多数からは『兵士Ａ』のように扱われている。
　寧むしろ、彼をこの戦争に連れてきたフランチェスカこそが『兵士Ａ』として存在し続ける事を望んでいたのだから当然と言えば当然なのだが、シグマと契約したその英霊が、彼をこの『偽りの聖杯戦争』における特別な存在へと変化させつつある。
　とはいえ、シグマに英霊並みの戦闘能力が備わったわけではない。
　魔術使いの傭よう兵へいとして世界各地で実戦を積み重ねてはいるが、流石さすがに英霊などという規格外の使い魔と相対した事はな

く、セイバーに加えられた金色の英霊の攻撃を見ただけで、自分がいかに場違いな存在かを思い知らされた。
「あれは英雄王ギルガメッシュ。原初の英雄の一人だよ」
　蛇の杖つえを持つ少年──『影法師』の一人がそう言った。
　彼らは『ウォッチャー』の端末であり、マスターに情報を伝えるだけのシステム。
　脳に直接リンクされているのか、シグマ以外がその姿と声を認識する事はできない。
　いっそ自分の幻覚ならば楽だとも思ったのだが、彼らの伝えてくる情報は的確で、自分の知識では知り得ない事まで伝えてくる以上、それが本当に英霊の力と認識せざるを得なかった。
「はっきり言うけど、今の君に勝ち目はない」
　蛇へび杖づえの少年から絡から繰くり仕掛けの翼を背負った青年に変化した『影法師』の言葉に、シグマは内心で『言われるまでもない』と呟つぶやいた。
　あの英霊が何もない空間から射出しているのが尋常な武器ではないというのは一目で解わかる。
　魔術や現代の銃器でどうにかなる相手ではない。
　スタングレネードやフラッシュバンで一瞬気を逸らす事はできるだろうが、ギルガメッシュというあの英霊を前に、それで何かが好転するとは思えなかった。
　せめてセイバーと完璧な連携ができれば良いのだが、彼とも出会ったばかりである上に、彼のマスター──アヤカ・サジョウは正式なマスター、いや、魔術師ですらないという。
　ならば、ここで戦力に成り得るのはただ一人。
　セイバーやギルガメッシュと同じ英霊である──隣に立つ、アサシンの少女だ。
「君は、どうする？」
　自分には明確な作戦はない。
　かといって、攻めるも退くもせずに動かずにいれば、この殺伐とし

た泥沼に沈むだけだ。
　ならば、周囲の手札に合わせて動くのが得策だと判断した。
　すると、彼女は静かに言った。
「子供を護まもりに行く。部屋の場所は解わかるか？」
「本当に行くのか？　……あの悪魔みたいになった弓兵か、あの金色のガトリングガンを相手にする事になるかもしれないぞ」
「……正面からは行かない。口惜くやしいが、この未熟の身ではあれらを誅ちゆうするには文字通り全てを懸ける必要がある。それでも届くか届かぬか曖昧な領域だ。私一人の話ならばそれで問題無いが、子供を救うのが目的なのだろう」
「それは、あの警官達の目的だ。君の目的じゃない」
「？」
　シグマの言葉の意図が解わからないというように首を静かに傾けるアサシンの少女。
　そんな彼女に、シグマは淡々とした調子で言葉を紡つむいだ。
「会ったことも無い子供で、敵にも味方にもなる確率は低い。むしろ、肝心の保護対象と契約しているサーヴァントが敵対的だったら、戦う必要が無かったその英霊と正面から戦う事になる。合理的に考えて、君の利益にはならない筈はずだ」
「……。そうか、お前は信仰を持たないのだったな」
　アサシンは得心がいったとばかりに頷うなずき、まっすぐにシグマを見ながら言った。
「利ならある。合理的な理由だ」
「それは、どんな……」
　何故そんな事を尋ねるのか、シグマ自身にも解わからなかった。
　あるいは純粋に、自らの意志で面倒事に足を踏み入れるアサシンの性質が摑つかみきれなかったからかもしれない。
　そんなシグマに、アサシンは淀よどみない声で言った。
「まだ心の満ちていない幼おさな子ごが助かるなら、これ以上の利はない」

言いながら、音も無く移動を開始する。
　戦場となった大通りの隙間を縫うように、遠回りで病院へと近づこうとしているのだろう。
　シグマはその後を追いながら、半分独り言のように問い掛けた。
「……？　解わからないな、子供とはいえ、他人だろう？　この先に君と同じ信仰を歩むかどうかも解わからない子だ」
　自分と同じ宗派の信徒を増やす為ため、というのならばまだ解わかる。
　だが、それは自分の命を懸けてまで救うべきものだろうか？
「私はまだ未熟な身。本来ならば、信仰篤あつき方々は利がどうこうなどと考えはしない。呼吸と同じように、ただ生きるだけで大いなる声を聞き、その道を選ぶものだ」
「……俺には一般的な倫理観というものは良く解わからないが……この状況で子供を救おうとするなんていうのは、君の信仰が篤あついからじゃないのか？」
　シグマの言葉に、爛らん熟じゆくなる狂信者は首を振り、一瞬だけシグマを見た。
　その眼めに湛たたえられたのは、自分への怒りと深い悲しみの色。
「私は、異端者達への怒りを捨て去る事ができなかった。寛容さを持つことができなかった。今の歩みも、他者を救いたいという私の願いが混じる限り、運命を軽んじる傲慢に他ならない。その未熟故に、私は山の廓くるわへの道を歩む事が許されなかった」
「……」
　気配を消しながら大通りを渡り、病院へと更に近づく。
　警官隊と弓兵は戦闘を開始しており、もう一人の弓兵──ギルガメッシュとセイバーも戦闘状態に入っている。
　その流れ弾が一つでも当たれば、アサシンはともかくシグマの命はないだろう。
　二つの戦いを警戒しながら、シグマは消音と肉体強化の魔術を駆使し、ようやく慎重に歩を進めているアサシンに追おい縋すがっている

状態だ。
　そんなシグマにアサシンは淡々と言葉を続ける。
「だが、そんな事はどうでもいい。私の未熟などは、子供を救わぬ理由にはならない」
「……そうか、そういうものなのか」
　シグマはそこで僅かに眼めを伏せ、子供という単語に思いを馳はせ、思わず呟つぶやいた。
「俺達は……誰にも救われなかった」
　刹那──病院の裏手に近づきつつあったアサシンが歩を止める。
　シグマは自分が失言した事に気付き、無表情のままアサシンから眼めをそらす。
　次の瞬間、彼の背後から、影法師の一人──『船長と呼べ』と言っていた老人の声が響く。

『あーあー、言っちまったなあ。……なんだそりゃ、馬鹿かお前は？　他人を救おうとしてる奴に対して「僕は救われませんでした」って泣き言か？　病院で寝てるガキに嫉妬してんのか？　巫山戯ふざけた事を言って足止めして、そのガキが自分と同じように不幸になりゃ万々歳とでも思ってんのか？』

　嘲り笑うその声に、シグマは一切反論しなかった。
　自分にしか聞こえぬ声に答える事でアサシンに怪しまれるというのが理由の一つ。
　もう一つは──反論できる要素など、何一つ無かったからだ。
　シグマは聖杯に願う強い望みも、生き抜く理由も持たない。
　ただ、『なんとなく、死にたくない』という理由のみでここまで足あ掻がき続けて来た傭よう兵へいだ。
　その心構えでここまで生き続けていた時点で、それは逆に彼にとって強みなのかもしれないが──決して誇れる要素などではない。
　アサシンの言葉を聞き、幼少時の自分を──隣に座っていた者が、そ

の日の夜には血の巡らぬ『物』と化して処理された事を思い出し、自然と吐き出された言葉。
　何故。
　何故、自分達には救いがなかった？
　何故、病院にいる少女は救われる？　自分達と何が違う？
　これまでの自分ならば、『そんなものはただの運だ』と割り切っていた筈はずだ。
　なのに、どうして今の自分からそんな言葉が出て来たのか、シグマは己の存在が揺らいでいる事に気付く。
　━これは、良くない傾向だ。
　━魔術使いとしても、傭よう兵へいとしても。
　己を揺らがせた者から死んでいく。
　それは過去に何度も仕事の最中に眼めにしている光景だ。
「すまない、今のは俺の失言━━」
　話を打ち切る事で心を平静に戻そうとしたシグマだが、その言葉に被かぶさる形でアサシンが振り返り、シグマをまっすぐに見つめながら言葉を紡つむぐ。
「幼き頃のお前を救えなかった事は、私の未熟」
「……」
「私はその場に巡り会えず、救えなかった。それこそが、私が未熟である証明だ」
　理不尽とも思えるアサシンの言葉に、シグマは言った。
「君は英霊だ。君がいつ死んだのかは知らないが、時代も違う、存在していた場所も違う子供の頃の俺に会える筈はずがないだろう」
「時の差異、地の差異など些さ細さいな事だ。その証明として、私とお前は今、ここでこうして同じ場に立っている」
　それは、シグマからすれば常軌を逸した言葉だった。
　彼女の信仰が完全なものならば、幼きシグマの前に立って彼を救っていた筈はずだという、確信を持った一言。
　今の自分がもしも幸せならば、アサシンの言葉に怒りを覚えていた

かもしれない。
　不幸なれど、自分が選んだ道だったならば、やはり反論していたかもしれない。
　自分は満足している。貴方あなたが自分の目の前に立たなかった事を、誰かに憐あわれまれる覚えはないのだと。
　だが、怒りは湧いてこなかった。
　シグマ自身、彼女の言葉に半分同意してしまったからだ。
　━ああ。そうか。
　━俺は……誰かに救われたかったのか？
　━あそこで、誰かが……俺達を助けてくれたら、違ってたのか？
　━フランチェスカ達が国を滅ぼすよりもっと前……みんなが死ぬ前に救いがあれば……。
　━それとも……もっと前……。
　━俺の母親が救われていたとしたら……？
　━いや、俺の母親が救われていたら、そもそも俺は生まれていない筈はずだ。
　自分が生まれた経緯を思い出しながら、シグマは静かに俯うつむいた。
　━全てを救うと、俺はそもそも幸せも不幸も『なかった事』になるのか……。
「……面白い考え方だな。そんな喜劇があった気がする」
「？」
　シグマの独り言に首を傾かしげるアサシン。
　そんな彼女に、シグマは移動を開始する前に問われた事の答えを返す。
「……警察の捕獲対象……繰くる丘おか椿つばきがいる部屋は、こちらから見て、最上階の右端だ」
　それを聞いたアサシンは、静かに頷うなずいて言った。
「感謝する。あとは私がやる」
「待ってくれ」

「？」
　アサシンを引き留めたシグマは、やはり無表情のまま、一瞬だけ考えた後に言葉を紡つむぐ。
「……俺も行く。守るだけじゃ心こころ許もとないが、上手うまく感染を防ぎながら連れ出す方法があるかもしれない」
　ウォッチャーの情報では、『繰くる丘おか椿つばきは空気感染しないタイプの病原菌に侵されている』という話だった。
　しかしそれが今後も同じとは限らない。
　何しろ、謎の英霊がついているのだ。
　椿つばきの身体からだに働きかけ、突然細菌の性質を変化させる可能性もある。
　だが、逆にその英霊を上手うまく味方につける事ができれば、心強い味方となるし、安全な場所への移動も楽となる。
　あとは当初の予定通り、警察周りの人間がその英霊を無力化すれば問題はなくファルデウスにも無難な報告ができる。シグマはそう考えた。
「無理をするな。いざとなれば、私が担かついで連れ出す」
　最後まで付いてくるとは思わなかったのか、アサシンがシグマに対してそう言ったが、黒髪の青年は静かに首を振った。
「恐らく、君の動きに女の子の身体からだの方が耐えられない。長く昏こん睡すい状態だった肉体に強い負担を与えれば、それだけで心臓が止まる事もある」
　──幼い頃、それで死んだ同胞がいた。
　その記憶は言葉にせず、一つの案として提案するシグマ。
「車輪付き担架ストレツチヤーの扱いは、多分君よりも慣れてる。連れ出した後、俺がその事をあの悪魔じみた弓兵に伝える。そうすれば、病院が攻撃対象になる事はないだろう」
　仮に椿つばき一人を守れた所で、病院が崩れれば大惨事だ。

『へえ、面白いね。君は今、誰の為ためにその作戦を提案してるんだ

い？』

　何故か少し嬉うれしそうに、蛇へび杖づえの少年の姿をした『影法師』が声をかけてくる。
　──誰の……為ために？
『君の任務とは関係ない。それこそ、さっき君が言った事だ。利がない。それなのに、どうして彼女の行動を補助しようとしているのかな？』
　こちらを試すような『影法師』の言葉。
『……ああ、いや、すまない。僕は影とはいえ、生前の人格の影響は受けていてね。仮に英霊として顕現したら別の姿になるだろうけれど……僕達影法師にも、一応は個別の意志らしき動きはあるんだ。影法師の更に影に焼き付いた残ざん滓しの戯ざれ言ごとと思って、聞き流してくれ』
　そんな事を言う蛇へび杖づえの少年だが、簡単に聞き流す事ができなかった。
　何故なら──シグマ自身、何故付いていくなどという判断をしたのか、説明がつけられなかったからだ。
　──これは、本当に良くない傾向だ。
　──何故、彼女に任せて撤退しなかった？
　──自分の精神の方向性を見失うのは、傭よう兵へいとしても魔術使いとしても致命的な瑕きずになる。
　シグマは、やはり考え直したと言って身を引こうとしたのだが──
「……感謝する」
　視線を落とし、そんな事を言ったアサシンの声が、シグマの心を引き留める。
「お前は善良を為なそうとしている。穢けがれた私などよりも、遙はるかに救われる価値がある」
　□□……。
　──今さら『やはり帰る』などと言えば、致命的な溝になるな。

──それは、俺の任務の成功率と生存確率に支障を来す。
そんな事を一瞬で考え、シグマは彼女の言葉には答えぬまま無言で追随する。
英霊達の激しい戦いの音が鳴り響く夜。
その音から一旦遠ざかるような形で病院の裏側に回り込み、周囲に誰の姿もない事を確認してから病院の敷しき地ち内ないに足を踏み入れた。
十階建ての病院の内部には、警官隊の魔術師達の手により人払いの処置が施されており、入院患者がいる病棟には睡魔の術式を施してある。
夜勤の看護師達も一時的に眠っている状態であり、入院患者達は普通に就寝時間だ。
就寝中に患者の病状が悪化したりした場合、無駄な被害がでる可能性があるため、魔術の効果時間は最低限に設定されている。
その情報をウォッチャーから聞いていたシグマは、ならば多少音を立てても問題あるまいと、病院の裏手から最短距離を進もうと試みた。
そして、病院の裏庭を足早に進んだのだが──半ばまで来た所で、アサシンがシグマの装備の襟首を摑つかみ、思い切り横に引っ張った。
「!?」
何を？　と問うよりも先に、それはシグマがそれまで立っていた場所に降り注ぐ。
地面に突き立つ、いくつもの金属片。
それは、歪いびつな凶器だった。
無数のメスやハサミが半分溶け合うように融合した、刃物の集合体によって形作られた槍やり。
それがいくつも降り注いだのを見るに、この病院内の全てのメスやハサミ、骨ほね鋸のこぎりなどがここに集まっているのではないかとシグマは予想した。
『正解だ、小僧。あいつ、この短時間で病院中の刃物を寄せ集めや

がったぞ？』
　船長の姿をした影法師が、少し離れた場所でニヤニヤと笑っている。
『さて、二つ目の試練だ。乗りこえて成長してみせろ、小僧』
　シグマはそれを相手取る事はせず、その刃物が飛んできたと思おぼしき方向に眼めを向けた。
　すると──

　そこには、病院の五階あたりの位置で、白い壁に垂直な形で立つ男の姿が。
「……ッ！」
　ゾワリ、と、シグマの魔術回路がざわめいた。
　横にいるアサシンの魔力が荒ぶった事もあるが──
　それ以上に、重力を無視したかのように壁に立つ『それ』の内包する魔力の不気味さに。
　あるいは魔力感知だけではなく、長く魔術使いの傭よう兵へいとして戦ってきた本能と言って良いかもしれない。
　──『アレ』は、まずい。
　──『吸血種』がいるとは影法師に聞いていたが、『アレ』はその中でも上位の存在だ。
　──最上位の部類ではないが、ただの魔物とは格が違う。
　──『アレ』は本来、人が相手してはならないものだ。
　一度だけ、似たようなモノと戦った事はあった。
　その時は、他の高名な魔術師や魔術使い達と協力してかろうじて倒す事ができたが──今、自分の眼前に居る『それ』は、自分が倒したものよりも危険な存在だと、魔術使いとして積み上げてきた生存本能が警報を鳴らし続けている。

　恐怖ではなく、魔力に気け圧おされて一瞬固まったシグマに、『それ』は言った。

「……良い判断をしたな、小僧」

「……？」
　訝いぶかしむシグマに、『それ』はゆっくりと拍手をしながら言葉を続ける。
「もしも先刻……かくも可か憐れんな彼女を置いて一人で撤退するなどという真似まねをしていたら、その心臓を抉えぐり砕いて擦り潰し、砂と練り合わせて養豚場の餌箱にばら撒まいている所だったよ」
　何故か養豚場が一方的に割を食う発言をしながら、男は満面の笑みを浮かべたまま地上に降りる。
　慇いん懃ぎんな一礼をした後、『それ』は怒りに満ちた眼めをシグマに向けながら、その口元には恍こう惚こつの笑みを浮かべるという器用な真似まねをしながら言った。
「そして、最悪な判断をしたなあ、小僧」
　今しがたの言葉を裏返す、理不尽極まりない言葉を。
「矮わい小しような人間如ごときが我が愛いとしの君と共に歩もうなどと、決して許される事ではない。そも、我が愛いとしのアサシンが、貴様如ごときと普通に会話をしているなど私には我慢ならない」
　コキリ、と首を鳴らした後、『それ』は両腕を広げ、凶笑と共に己の激憤を謳うたい上げた。
「死ねぬ身体からだにした後に、貴様の魔力回路を一本ずつ啜り剝がしてやろう。眼球を潰し全ての骨を砕き肉を剝がし脳髄を侵し心臓を犯し肺を練り、臓ぞう腑ふを寸刻みにしてやろう。ああ！　ああ！　そうだな！　生きたまま身体からだを万にも億にも千切り壊し、養鶏場の餌箱にばら撒まいてやるとしよう！」
　徐々に声を荒げながら背を反らし、金色の英霊による宝具の輝きを照り返す夜空を見上げた後──ニタリ、と恍こう惚こつの笑みに切り替え、グルリと首を回してアサシンに眼めを向ける。

「僅かなりとも心を許した者がそうなった時、君はどんな感情を浮かべるんだろうな？　ああ……おぉ……素晴らしい！　やはり君は素晴らしい！　君が己の涙に穢けがれる姿を想像しただけで、私まで涙が溢あふれ出でる！」

　本当に歓喜の涙を零こぼしながら言う『それ』──ジェスターと名乗る死徒の姿を見たアサシンは、既に行動を開始していた。
　己の心を殺し、しかし直前まで溜ため込こんだ激憤を全て自らの魔力に上乗せして、自らのマスターである魔物へと跳びかかった。
　魔物の魔力の代わりに、セイバーから貸し与えられた仮初めの魔力。
　その大半を、自らの宝具に注つぎ込こみながら。

「──黒こく刹えんを纏まとえ」

「────【非想巡霊ザバーニーヤ】──」

金色の鎧よろいを纏まとう英雄王──『裁定者』ギルガメッシュは、最初に立っていた教会の屋根に立ち続けていた。
何箇所か宝具が突き立った教会の屋根は所ところ々どころが崩壊しかけているが、余程強固な結界が張ってあるのか、まだその屋根の全体像をかろうじて保っている。
それは、傍はた目めには美しい舞のようにも見えた。
実際にその光景を観測していたティーネを始めとする遠見の術の使用者達は、尋常ならざる速さで生と死の狭はざ間まを踊り駆けるセイバーの姿に思わず眼めを奪われる。
王と王の争い。
だが、それは決して公平ではない。
遙はるか高みに鎮座する金色の王に、一人の王が下克上を狙う構図だ。
逆からすれば、高位の王が下位の王に裁きを与えているようにも見える。
だが、だからこその進撃。
同じ王なれば、その優劣は時勢で変わる。
その高みを奪い合うが故の戦であり、さながら今の二人の攻防は、王の霊基同士で行われる世界最小規模の『戦』であると言えるだろう。
もっとも、片方の王には民が造り上げ、王が蒐しゆう集しゆうした数多あまたの財宝が。
対する王には、七人ばかりの『支援者』がいるのだが。

裁定者である黄金色の王は、決して油断無くセイバーに攻撃を降り注がせる。
だが、黄金を纏まとう王に対し、かつて『獅し子しの心を持つ』と

言われた王の進撃は止まらず、更にその身を加速させて死の狭はざ間まを潜くぐり抜ぬけた。
　神速。
　英霊同士の戦いにおいて、通常それは人間離れしたものとして人の眼めに映る事が多い。
　だが、それを加味したとしても、セイバーの速さは少し異様に映る程だった。
　英霊としての基盤性能としての速さ。
　魔術的な増幅処置ブーストを加えられた速さ。
　座より与えられた、彼の逸話に纏まつわる何らかの『加護』としか言いようのない速さ。
　その全てが組み合わさる事によって、英霊としても特異的な速度をもって戦場となったビル群の合間を四方八方跳び回り、円を描きながらジリジリとその距離を詰めていく。
　一度動き出した獅し子し心しん王おうの進軍は、それは正しく大地と海を薙なぎ払はらう暴風に等しい。
　──『風避けの加護を持つ将軍が、ようやくそれを食い止めた』
　そう伝承に謳うたわれる程の、比類無き進軍速度。
　通常の行軍の三倍の速度を持って戦場を駆けたという逸話を持つ獅し子し心しん王おうは、ついにその剣が届くまでに相手との距離を縮めたではないか。
「ほう、不遜にもこの俺の前に立つか」
　ようやく始まりだとでも言わんばかりの言葉を言い放ち、金色の王は、『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』を撃ち放ちながら背後に飛び、その距離を再び大きく開こうとする。
　だが、それはセイバーに絶好の機会を与える事となる。

「──『永久に遠きエクス……勝利の剣カリバー』！」

　セイバーの剣が輝き、斬撃が巨大な光の帯となって宙に舞う金色の

弓兵に躍り掛かった。
「甘いわ！」
　するとギルガメッシュは、自分の前面に無数の盾を顕現させ、その光帯を霧散させる。
「よもや星の遺物を真似まねただけの贋がん作さくをこの身に向けるとはな。裁定の最さ中なかでなければ、万死に値する愚行だぞ雑種！　……む」
　拡散された光が晴れ、無数に浮かぶ盾を散らすと、今まで前方に居たセイバーの姿が消えているではないか。
　そして、着地した自分の背後、斜めになった教会の屋根の下方から膨大な魔力を感じ取った。
　眼めを細めながら振り返った黄金色のアーチャーは、そこに、剣を構えたセイバーの姿を見る。

「──『永久に遠きエクス…………勝利の剣カリバー』！」

　斜め下から斬り上げる形で撃ち放たれる、二度目の光帯。
　だが、それも先刻と同じように無数の盾によって防がれるが──
　先刻と威力が段違いになっているその攻撃を受け、盾を押し戻される形で金色の王の身体からだが数メートル浮き上がった。
「貴様……」
　金色の王は盾の隙間から、セイバーの手の中に自らが撃ち放った宝具が握られているのを確認した。
「借りると言ったろ？」
　長剣の宝具を握り締めながら、セイバーは浮き上がった敵の真下に一瞬で潜り込み、そのまま再び剣に輝きを纏まとわせる。
　一度目の真名解放において、最初に握っていた装飾剣は一撃と共に砕け散った。
　だが、神代の気配を纏まとう宝具は、二度目の真名解放の後も健在であり、そのまま宝具としての性質を纏まとい続けている。

そのまま、魔力を放出するような形で、三度目の光帯を撃ち放った。
金色の王は真下に盾を展開し、その一撃も防ぐが、更に上空へとその身体からだを押し上げられる。
そこに、四度目の光帯。
体勢を立て直す暇も与えず、セイバーは教会の屋根から天に向け、五度、六度と光の斬撃を撃ち放ち続ける。
更に恐るべき事に、その間隔は徐々に縮まり、斬撃が二十を超える頃には、もはや光は途切れず、一本の巨大な帯となって地上から夜空を撃ち抜いていた。

それもまた、無限の連撃でありながら、終わりの無い強烈な一撃だと言わんばかりに。

×　×

数分前　病院前　駐車場

時は、僅かに遡る。
病院と大通りの間に設置された駐車場。
適度な広さを持つその空間は、人払いの影響で殆ほとんど車は止まっておらず、ジョンが吹き飛ばされた病院の入口まで障害物はない。
ジョンが攻撃を受けた事を契機として、まだ余力を残していた警官達が一斉に動き出した。
彼らの手には、それぞれ別の『宝具』が握られている。
元は神秘や魔力がとうに失われた単なる遺物に過ぎなかった武具に、キャスターの手によって伝承を上書きされた『紛まがい物ものの宝具』。
フェイントや死角からの不意打ちなど、彼らは思いつく限りの手練

手管を尽くして攻撃を加えたと言って良いだろう。
　実際、警察署でアサシンと戦った時よりも連携そのものは上だったとさえ言える。
　だが──バーサーカーの宝具を奪い、悪魔の力を取り入れたそのアーチャーは、避ける事すら、手にした武具でそれらを打ち払う事すらしなかった。
　向けられた刃や矢弾の全てをその身に受け止めるが、効いている様子は見られない。

「くそッ……こいつも、あのジェスターとかいう死徒と同じか……！」
　警官の一人がギリ、と歯を軋きしませる。
　彼らの脳裏に浮かぶのは、警察署で蹂じゆう躙りんされた瞬間の記憶。
　あの時の再現になりつつある状況を前にした『二十八人の怪物クラン・カラテイン』の面々だが、逃げ出すという選択肢は彼らの中にはなかった。
　ここで撤退すれば、『正義』と呼ばれた自分達の存在意義が無くなる。
　ジョンと同じく、署長からの暗示にも近い言葉を身に宿す彼らは、さりとて玉砕を望むわけでもなく、如何いかにすれば目の前の怪物を止める事ができるか、という事を考え続けた。
　彼らが思案する合間にも、異形と化したアーチャーの足は進む。
　だが、急所を狙った攻撃は全て敵の身につけた布地に止められ、露出した腕や脇腹を狙った時は、布地と違って『攻撃が当たった』感触はあるのだが、『有効打を与えた』という域までには到いたらない。
　布地によって完全無効化される上に、素の肉体のスペックも尋常ではないのだろう。
　更に、警官隊は何が起こったのか正確に理解していなかったが、あの悪魔の力を取り込んだ事を考えると、その分の耐久力や魔力耐性も

上乗せされていると見るべきだろう。
　ならば、目の前の敵に、もはや弱点などないのではないか？
　警官隊の頭に諦めという文字が浮かぶ中、異形の弓兵は一歩一歩確実に足を進める。
「……？　こいつ、なんで一気に攻めてこないんだ？」
　警官の一人の言葉に、他の警官が答えた。
「確かに、私達なんか一瞬で蹴散らせるでしょうに……」
　すると、一歩離れていた場所で冷静に状況を見つめていた女──署長の副官であり、実質的に『二十八人の怪物クラン・カラテイン』の中心人物の一人であるヴェラ・レヴィットが言った。
「恐らく、警戒しているのでしょう」
　彼女は警官であると同時に、生粋の魔術師でもある。
　魔術師である家系の妹として生まれたが、姉の魔術回路が貧弱だった為ため、妹である彼女が魔術刻印を受け継いでいる母親の元で育てられた。
　姉であるアメリアは魔術世界の事を知らぬまま、医師としてスノーフィールドで働いている。
　彼女の家系、この聖杯戦争を取り仕切る事に協力してきた側だった為ために、その座を受け継いだヴェラは母親から一部の魔術刻印を受け継いだ状態でこの聖杯戦争に参加する形となった。
　まだ全ての刻印移植も終えていない半はん端ぱな後継だが、『二十八人の怪物クラン・カラテイン』の中では抜きんでた実力を持っており、まさしく署長の懐ふところ刀がたなとでも言えるだろう。
　そんな彼女が次にとった行動は、腰に着けた装備ベルトから、現代装備には似合わぬ小さなガラス製の試験管を取り出す事だった。
　彼女はそれを敵である弓兵の前に投げ放ち、握り込んだ特殊な装飾の回転式拳銃で狙撃する。
　弾丸は正確に試験管を撃ち抜き──次の瞬間、広範囲に煙幕が広がる形となった。
　ただの煙幕ではない。

ランダムに質が変化する魔力が籠められた、魔力感知用のジャミングとでも言うべき煙幕だ。
当然ながら視界も遮られる形となるその色濃い煙が広がるのを見て、弓兵が低い声で呟つぶやく。
「……小こ癪しやくな真似まねを」
そして、大きく横に跳躍し、煙を避けるようにその巨体を移動させた。

ヴェラの読みは、当たっていた。
異形の弓兵──アルケイデスは、警官隊ではなく、その他の要素にこそ警戒を向けている。
突然現れたセイバーと、彼と交戦を始めた英雄王ギルガメッシュ。
今は互いに戦っているが、いつその矛先がこちらに向かうかは読めない所だ。
更に、セイバーの側に別の英霊の霊基も感じられた上に、最初に病院を破壊しようとした一撃を『水の盾』で防いだ謎の魔物の気配も消えてはいない。
これは行儀正しく戦う決闘ではない、相手の裏を掻かき合い、僅かな隙を背後にすら見せられない果て無き乱戦なのだ。
それを理解しているアルケイデスは、周囲に散開しつつこちらを攻撃してくる警官隊など一瞬で屠ほふれるが、隙を一切作らぬままとなると慎重にならざるを得ない、という状況となる。
これは、警官隊が一定以上の実力を持っていたからに他ならず、彼らの積み上げてきたもの、己の命を懸ける覚悟は決して無駄になっていなかった。
この場にいる警官は二十五人。
残りは署長の護衛と情報蒐しゆう集しゆうで署に残っており、先遣隊をターゲットの病室に向かわせようかという所で弓兵の操る地獄の魔犬──ケルベロスが現れた為ため、まだ病室には誰も辿たどり着つけていない。

「何人か、繰くる丘おか椿つばきの病室に回しますか？」
　小声で言う弓の宝具を持った女性警官に、ヴェラは静かに自分の見解を述べた。
「繰くる丘おか椿つばきに憑ついているサーヴァントが敵対的だった場合、少人数では無駄死にする事になります。向かうならば、単体で対処できるバーサーカーが望ましかったのですが……」
　そのバーサーカーは霊基に重大な損傷を負い、恐らくはフラットの令呪によって戦線を離脱している。
「……繰くる丘おか椿つばきが狙われているという事を理解できるサーヴァントならば、マスターを守る為ために何らかの行動に出ている筈はず。彼女がまだ病院を離脱していないという事は、この状況に気付いていないか、あるいは守るつもりがないか……移動するまでもなく、絶対に守る自信があるか。そのどれかでしょう」
　できれば最後の可能性である事が望ましいと思いつつ、ヴェラは更に複数の試験管を取り出して周囲へと投げ放つ。
　魔術を用いて投とう擲てきされた瓶は広範囲を取り囲むように宙を舞ったかと思うと、その全てが弾丸で撃ち砕かれ、同じような煙幕を周辺に張り巡らせた。
　ヴェラはその僅かな足止めの合間に、誰かを病室への斥候に行かせるべく指示を出そうとしたのだが──

「無駄だ」

　異形のアーチャーは、その背に生やした悪魔の翼をはためかせ、色濃い魔力の籠もった風を周囲に起こす。
　禍まが々まがしい魔力を持つ風はいくつもの小さな竜巻となり、煙幕を喰くらうように搦からめ捕とり始めた。
「こんなもん……どうやって対処しろってんだ……」
　頬をひくつかせながら警官の一人が言い、警官達の顔に絶望の色が射さしかけた時──

一つの影が、煙幕の合間を駆け抜ける。
「よせ！　無理だ！」
暴風と残煙の中で顔は良く見えないが、それが自分達と同じ制服を纏まとっているという事に気付いた警官達は、口々に制止の言葉を投げかけた。

実際、アルケイデスも、それは無謀な突撃だと判じた。
自分に迫る警官がどのような攻撃をしようと、己に通じる事はない。
拳で殴り掛かってくるというのならばネメアの獅し子しの毛皮の加護を無視して攻撃は通るだろうが、その場合、余程の魔力が籠められてでもいない限りはかすり傷を負うことすらないだろうと。
弓を引けばその瞬間のみ両手が塞がり、それが他の英霊達への隙となる事は明白だ。
特にあの英雄王は、例えセイバーと斬り結んでいようが、ついででこちらに必殺の一撃を流し打つ可能性もある。あるいは、ネメアの獅し子しの毛皮の隙間に直撃した場合、そのまま『流れ弾』が致命傷にすら成り得るだろう。
あるいは、変質する前に残されていた十二の命を持つ宝具さえあれば、さして気にせずに全力の弓を引き絞っていたかもしれないが──今はその隙を見せるに値する状況ではない。
ならば、最初に首を叩たたき砕いたあの勇敢な警官と同じように、腕を払う一撃で払いのけるまでと判断した。
アルケイデスは腕を振りかぶり、闇と煙に隠れた警官がこちらに迫るのを待つ。

そして──その瞬間、彼の背後で莫ばく大だいな魔力が膨れあがるのを感じ取った。
「！」
──この魔力は……セイバーか。

ギルガメッシュと争っていたあのセイバーが、何らかの宝具を撃ち放ったのであろう。
その魔力がこちらではなく天に向かっているのを感じ取りながらも、アルケイデスは目の前に迫る小さな脅威から目を逸そらさなかった。
それは果たして、矮わい小しような敵にも油断をせぬという心構え故の行動か。
否いな。
彼は目を逸そらさなかったのではない。
逸らせなかったのだ。
それは、彼の持つ『心眼』が作用した結果だろう。
本能ではない。
これまでに積み上げてきた技能、経験、果ては鍛え上げた五感と彼を構成する血肉の全てが、彼の魂を支配し、目を逸そらす事を拒絶したのだ。
今、この場で真しんに警戒すべきは、他の英霊ではない。
目の前に迫る、一人の警官である。
彼の積み上げてきた全てが、そう告げていた。
その理由は、すぐに明かされる事となる。

アルケイデスの背後で、光の柱が空を貫き、目の前に迫る警官の顔を照らし出した。
丁度、竜巻に巻き取られる煙幕の切れ間から現れたその顔を見て、アルケイデスが呻うめく。
「何……？」
それは紛れもなく、つい先刻、彼が首を叩たたき折って病院の入口まで吹き飛ばした男の顔だ。
「おおおおおおおぉぉぉぁぁあああああ！」
警官が、言葉にならぬ雄お叫たけびを上げ、大地を蹴る。
瞬間的な加速はこちらの予測を上回った。

防ごうと動き始めたその腕が届くよりも速く、その小柄な身体からだはまさに砲弾の如ごとき勢いでアルケイデスへと躍り掛かり──
布が巻かれた異形の弓兵の鼻柱に、布地の上から思い切り飛び膝蹴りを叩たたき込こんだ。

「ジョ……ジョン!?」
警官達が、驚きの声を上げた。
先刻の吹き飛ばされ方は、多くの警官隊に即死の二文字を想像させた。
ジョンは魔術回路は持っていても、一子相伝である魔術刻印は持っていない。
瀕ひん死しの状態の時に自己修復の魔術を行使する刻印があるなら話は別だが、刻印そのものを持っていないジョンが助かるとは、ましてや、先刻とは別人のような力を持って現れるなどと、誰も想像していなかった。
だが、彼は現れた。
通常の魔術師を遙はるかに超える魔力を纏まとい、その魔力を用いて肉体と神経を何倍にも強化した状態で。

──ジョン。
──なるほど、この男の名はジョンというのか。
飛び膝蹴りを受けたアルケイデスは、そのまま背後に吹き飛ばされるも──冷静に相手の情報を頭に入れながら空中で身体からだを回転させ、足を下にして着地する。
が、その足を、いつの間にか更に背後に回り込んでいたジョンが払いのけた。
「ほう……」
感心するように言った後、アルケイデスは片腕で地面に立ち、迫っていたジョンの追撃を空いた腕で受け止めた。
ビキ、ビキ、と肉と骨が軋きしむ音が響き、アルケイデスの全身に

衝撃を走らせる。
　そのまま、ジョンは徒手空拳による連撃を繰り出し、アルケイデスに弓を構える暇を与えずに打撃を加え続けた。
　──何があった？
　──先刻とはまるで別人……いや、成長した、というべきか。
　魔術師であるとしても、とうに常人の域は超えている。
　生前に積み上げてきた経験が、目の前の警官の中に漲みなぎる力が、古きギリシャの地で戦ってきた敵軍の将並みの膂りよ力りよくに達していると告げていた。
　──宝具の力か？　それともキャスターが何かをしたのか？
　アルケイデスは自分の身体からだにダメージが通っているのを確認するが、まだ危機感を覚える程ではない。
　アマゾネスの女王に宝具を用いて殴られた時に比べれば、子供に殴られているかのような痛みしか感じていなかった。
　だが──彼は、目の前の男に最大限の警戒を向ける。
　──何故だ？
　連撃を捌さばきながら、アルケイデスは思案した。
　──何故私は、この男を警戒した？
　この程度の打撃ならば、背後に巻き起こった魔力の渦をこそ警戒すべきだったろう。
　だが、彼が積み上げてきた全てが、こちらの人間から目を離すなと告げていた。
　──膂りよ力りよくは確かに人の域を超えている。だが、戦士の相を持つ英霊には及ばぬ。
　ならば何故、と思いながら連撃を受け続ける中で──彼はまず、相手の攻めの不自然さに気が付いた。
　──……何故、右腕を封じている？
　肉体による連撃の最中、目の前のジョンと呼ばれた警官は右腕による攻撃を行ってこない。
　──この重心の差異……義手か。

コンマ数秒の単位での攻防をこなしながら、アルケイデスは瞬時に相手の動きの違和感の正体を割り出した。
そして、ならばその義手は何か、と考える。
──武具を仕込んでいるのか？　ならば、この皮衣は通らぬ。
──いや、それはもうこの男も理解している筈はず。
──ならば、魔術を仕込んでいるとみるべきか？
アルケイデスは間近に迫るジョンの攻撃を躱かわしながら、その右腕に全神経を集中させた。
──やはり、何かを──
──いや、これは……？
気配が、あった。
特有の魔力、あるいは呪いとでもいうべき『気配』が、男の義手から僅かに漏れ出ている。
その神代の残ざん滓しを幽かすかに残した『気配』が、アルケイデスの鼻び腔こうと肌を擽くすぐった瞬間──

ゾワリ、と、アルケイデスの頸けい椎ついに怖気おぞけが走る。

英霊としての本能が、『それ』に気付いた彼を、ほんの一瞬とはいえ驚きよう愕がくさせたのだ。
いくら霊基が変わろうとも──『それ』は、彼にとって特別な意味を持つ。
誰よりも危険視しているが故に、誰よりもその恐ろしさを知っているが故に、自らも特別な矢尻にそれを染み込ませているからだ。
「貴様……！」
アルケイデスがそう叫んだ瞬間、ジョンの右腕が暗く輝き──手の甲が変形する形で、独特な形の刃が現れた。

まるで意志を持った呪いであるかのように、黒い液体が義手の刃の周囲を蠢うごめいている。

かつて、数多あまたの英雄を殺し、とある大英雄をも自死に追いやった、神代屈指の厄災にして最悪の呪い──ヒュドラの毒液。

その凶悪無比な毒をまとわりつかせた刃が、アルケイデスの布の隙間へと迫る。
──馬鹿な！
──この時代にまで、残っていたというのか⁉
──あの水蛇は、もはやこの表層には存在できぬ筈はず！
彼は、自分の考えが甘かった事を痛感した。
この時代の魔術師達は、神代の魔術師達には遠く及ばない。
だが、神代の残ざん滓しを操れる程には聡そう明めいだ。
同じような呪毒の泥を身に宿した自らのマスターの事を考えれば、敵が『ヒュドラの毒』を持つ事も想定に入れるべきだった。
己を殺しうる武器を前に、アルケイデスは弓を握り、全力で背後へと跳躍する。

「……！　早く！　病院へ！」
それを確認したジョンは、手近にいた警官隊の仲間にそう伝える。
「俺ができるだけ時間を稼ぐ！　その間に対象を保護してくれ！」
「ジョン……お前……何があったんだ⁉」
「俺も理解しきれてないんだが……キャスターの先生が何かしてくれたらしい！」
そして、話は後だとばかりに駆け出そうとしたジョンだが──
ゾワリ、と、今度は彼の全身に寒気が奔はしり、思わず足を止めてしまった。
「……？」
全身に冷や汗が滲にじみ、ジョンは目を凝らす。
20ｍ以上先に立っている、異形の弓兵。
その身から湧き上がる威圧感が、それまでの数倍に跳ね上がっていた。

理由は、簡単に思い至った。
　その弓兵が、弓に矢をつがえていたのだ。
　これまでに何度か矢は撃ち放っていたが、それまでとは違う、本気の構え。
　寒気に逆らい前に出ようとするジョンに、異形の弓兵が敬意を払うように言った。
「私を殺せる手段を持つ者よ」

「貴様を、敵と認めよう」

×　×

クリスタル・ヒル　最上階

「ギルガメッシュ様！」
　クリスタル・ヒルの最上階に居たティーネが、遠見の術式越しではなく、その眼めで自らのサーヴァントである王の姿を捉えていた。
　ビルの最上階にある自分達の拠点と同じ高さにまで、ギルガメッシュの存在が押し上げられている。
　金色の鎧よろいはより輝く光帯に完全に呑のみ込こまれ、目視ではその姿を捉える事が叶かなわなくなっていた。
　ティーネだけではなく、周りにいた『部族』の人間達も眼めを丸くしている。
　教会の屋根から天に伸びた光の柱は、その先が見えぬ高みにまで上昇していた。
　如何いかに英雄王とはいえ、あの力の奔流に呑のみ込こまれては無傷では済まない。
　そう感じたティーネは、令呪で緊急退避させようとしたのだが──
　彼女は、光の柱の中で、ギルガメッシュの魔力が大きく膨れあがるのを感じ取った。

正確には、彼の周りに、多大な魔力の固まりが現れた、というべきだろうか。

それは、彼がこれまでやっている事と同じだった。
宝ほう物もつ庫この宝具を、空間から射出するだけ。
だが──今回の宝具展開は、それまでと些いささか性質が違っていた。

数多あまたの宝具それぞれが膨大な魔力を纏まといながら、一つの巨大なうねりとなって光の奔流そのものに絡からみつき、力尽くで光を霧散させていく。
それまで単調に射出していた宝具だが、今は巨大な蛇のように複雑な動きを見せていた。
だが、それは魔力で武具をコントロールしているわけではなく──四方の空間から伸びる金色の鎖が、宝具の群を搦からめ捕とりながら無理矢理軌道を修正している。
霧散した光の中からギルガメッシュが姿を見せ、そのまま、宝具の雨は寄り集まる事で宝具の滝となり、激しいうねりを伴いながら下降する。
まるで、セイバーの撃ち放った光を喰くらいながら突き進む、巨大な金色の龍のように。

×　×

教会

屋根の上で宝具を撃ち続けていたセイバーは、自らが放出した魔力が押し返されている事を感じ取る。
そして、自分に迫る、圧縮された宝具の群を見て、思わず頰に汗を垂らした。

自らに迫る龍が如ごとき宝具の群を見上げたセイバーは、そこで一瞬目を伏せ──
　強がるように笑いながら、自らの魔力を次の一手に注そそぎ込こんだ。

×　×

「何？　何が起こってるの……？」
　一方、そんなセイバーの真下──
　教会の中では、彼のマスターであるアヤカが戸惑いの声を上げていた。
　窓の周囲の様子からして、どうやら教会の屋根で何かが輝いているらしい。
　だが、魔術師でないアヤカには、外の様子を確認する術がなかった。
　そんな彼女に、監督役である神父が訝いぶかしげに声をかける。
「お嬢さん。君、身体からだはなんともないのか？」
「え……？　ああ、そういえば、少しダルいような気もするけど……」
「少し。ふむ……」
　やや考えた後、ハンザが言う。
「お嬢さん、君はなんだ？」
「え？」
「あれほどの魔力を英霊に与える事ができるというのは、尋常ではない。少なくとも一流と呼ばれる層の魔術師でなければ、既に魔力が枯こ渇かつしている筈はずなのだが……」
「そんな事言われても……魔力ってのがそもそも良く解わからないし……」
　困ったように眉を顰ひそめるアヤカを、ハンザは興味深げに見つめていたのだが──

「いや、問答をしている暇はないな。奥に移動した方がいい」
「……どうして？」
　すると神父は、教会の高い天井を見上げながら言った。
「結界で強化はしているが、そろそろ屋根が崩れそうだ」
「っ⁉」
　そして次の瞬間──屋根の一部が大きく崩れ、そこから一つの影が落ちてきた。
　ハンザが咄とつ嗟さに腕を引いたお陰で、アヤカは瓦が礫れきの直撃をかろうじて免まぬがれた。
　だが、その状況が頭に叩たたき込こまれるより先に、穴の開いた屋根から尊大な男の声が響き渉る。

「教会ごと消滅させるつもりだったのだがな。よくぞ止めた、というべきか」
　それは、金色の鎧よろいを纏まとった男だった。
　鎧よろいのあちこちは砕けているが、泰然自若たる様子で腕を組み、教会の中央に積み上がった瓦が礫れきの中央を見下ろしている。
「え……？」
　アヤカは、その鎧よろいの男を見た瞬間、自分の脳のう味み噌そが激しく揺さぶられたかのような錯覚を覚えた。
　正確には、その男の顔を見て、だ。
　良く似た顔を、何年も前に見た事がある気がする。
　それも、ここと同じような教会の中で。
　思い出そうとすると、ノイズが走る。
　ザザ、ザザ、と、脳髄が揺れ──視界の中にまで現れたそのノイズの狭はざ間まに、赤い頭巾の少女が現れる。
「ひっ……」
　頭を抱えようとしたアヤカだが、そこで気付いた。
　あの金色の鎧よろいを纏まとった男は、何故、瓦が礫れきの中央に話しかけていたのだろうと。

──「よくぞ止めた、というべきか」
誰が、何を止めたのだ？
それを考えようとしたアヤカだが、その答えはすぐに出た。
瓦が礫れきの中央にあったものの正体に気付いたからだ。
身体からだから数本の剣や槍やりを生やしたそれを、アヤカは一瞬、瓦が礫れきの一部だと見間違えていたのである。
それは紛れもなく──先刻まで談笑しながら道を共に歩いていた、セイバーの姿だった。
心臓や頭部こそ無事だが、腹や肩口、太ふと股ももにいくつかの武具が突き刺さっており、通常の人間ならば既に死体となっていてもおかしくない。
「セイ……バー……？」
それを認識した瞬間、彼女の視界から、ノイズも赤い頭巾の少女も消え去った。
ヘタリとその場に腰を落としかけるが、すんでの所で踏ふみ止とどまり、なんとかセイバーに近づこうとした。
だが、瓦が礫れきに足を取られて、くしゃり、ころり、と転んでしまう。
そんなアヤカなど目に入っていないのか、屋根の上の男はセイバーに語り続けた。
「避ければ斯か様ような傷を負う事もなかったものを。この教会を守ろうとでも思ったか？　本来ならば思い上がりだと誅ちゅうするべきだが、結果としてあの一撃を相そう殺さいしたのだ。とりあえずは褒めてやろう」
すると、それまで動かなかったセイバーの身体からだがゆっくりと動き、ニヤリと口元を歪ゆがめながら屋根の男に答えた。
「それは……光栄だな」
セイバーは息も絶え絶えのまま、金色の英霊を見上げて言う。
「教会を壊すとはな。罰が当たっても知らないぞ？」
「くだらん。神々の怒り程度のものなど、とうに喰くらい飽きておる

わ」
「神々……。そうか、多神教の所で……その物言い……ハハ、君は……いや、君達は、かの『原初の旅人』か……」
　口くちの端はから血を溢こぼしながら笑うセイバー。
　そんな彼を見て、金色の英霊は怒りも嘲りもせず、ただ尊大に問い掛けた。
「雑種、貴様……何を内包している？」
「……？　何の……話だ？」
「貴様の供回りどもの話ではない。貴様自身の霊基の源の話だ」
　息も絶え絶えのセイバーに、屋根の男は淡々とした調子で言葉を続ける。
「どちらにせよ、貴様はまだ戦う理由を持ち合わせてはいないらしい。斯か様ような心持ちのまま我に戦を挑むとは、それこそ思い上がりも甚だしいぞ、雑種。我が宝物聖杯を前にして胡う乱ろんな欲望しか持てぬのならば、貴様の内に抱く全てを腐らせながら果てるがいい」
　そして、腕を組んだままの彼の頭上に、空間の歪ゆがみが生まれる。
「裁定を下すが、その前に言い残す事はあるか？」
「……ない、と言いたい所だが……そうだな……俺に魔力を回してくれてた子はマスターじゃない……。俺が、一方的に搾さく取しゅしてただけだ……」
　それを聞いて、よろよろと立ち上がったアヤカは目を見開いた。
　次にセイバーが何を言うか、思い至ってしまったからだ。
　━止めろ。
　━言うな。
　声に出そうとするが、喉が上手うまく回らない。
　呼吸を荒げながらまた転びかけた所で、セイバーが穏やかに笑いながら言った。
「あんたに敵対したわけじゃないから……酌量してやってくれ」

「いいだろう。だが、あくまで酌量するだけだという事を忘れるな？　つまらぬ存在と解わかれば消し飛ばすまでの事。他の有象無象と何も変わらん」
　そして、ゆっくりと片手を上げ、鎧よろいの男がセイバーへの言葉を締めくくろうとする。
「雑種。貴様への裁定は——」

　だが、その言葉を最後まで続ける事は叶かなわなかった。

　黄金の鎧よろいを纏まとった英雄は、その直後————

×　×

数分前　大通り

「あれは……ジョン……なのか？」
　自分達を救う形で現れたのは、先刻首を折られながら吹き飛んだ筈はずの同僚だった。
　突然人間離れした動きをする彼は、まさに『生まれ変わった』とでも言わんばかりの状態となっており、『二十八人の怪物クラン・カラテイン』のメンバー達は戸惑いに心を囚とらわれかける。
　その状況を打破したのは、凜りんとして響き渉るヴェラの声だった。
「前衛は下がって後衛の盾に！　後衛は全力でジョンの援護を！」
　普段は物静かな彼女が言い放った言葉に、全員が意識を覚醒させる。
　警官隊は各おの々おのの宝具を構え、言われた通りの配置でジョンと異形の弓兵を囲もうとした。
　近接武器を持つ者達も、あの弓兵相手では援護どころか邪魔になるだけだろう。

ならば、目め眩くらましとして後衛の遠距離攻撃に任せるべきであり、あれが本当にジョンだったならば、後衛との連携の取り方は解わかっている筈はずだと警官達は判断した。
　そして、その形でジョンの援護に回りつつ、その流れ次第で彼が望むように警官の半数を病院の内部に送ろうとしたのだが──
　敵から飛来した数本の矢が、一瞬でその陣形を突き崩す。

　大盾の宝具を構えた大柄な警官がそれを防ごうとするも、矢が当たった瞬間に粘着手しゆ榴りゆう弾だんが盾の表面で爆発したかのような衝撃が走り、そのまま大きく後ろに吹き飛ばされた。
　しかもそれは、極限まで弦つるを引き絞った一撃ではない。
　隙を見せぬように撃った、牽けん制せいの数本のうちの一つに過ぎなかった。
　警官達は実感する。
　未いまだに自分達が街の景色ごと肉片になっていないのは、あの英霊に理性があり、マスターの指示か自分の判断かは知らないが、『神秘の秘匿』にある程度配慮しているからに他ならぬと。
　最初にケルベロスを引き連れて来た時には、そんな事は欠片かけらも気にしない兇きよう賊ぞくかと思っていたが、逆だったのだ。
　あの英霊にとっては、自分が全力を出すよりも、ケルベロスのような猛獣に敵の肉だけ喰くらわせておいた方が『神秘の秘匿』になるのだと。
「なにか、なにか弱点はないの⁉」
　警官の一人がそう叫ぶ。
　確かにジョンは英霊さながらの動きをしているが、相手の英霊は、彼らが想定していた英霊の強さを凌りよう駕がしていた。
　あれほどの強さを持つのは、ギルガメッシュか、その英雄王と初日に砂漠で激突したランサーと思おぼしき英霊だけだろうと考えていたが、それは甘い考えだったと今さらながらに痛感する。
　だが、能力が英霊に及ばないのは最初から解わかっていた事だ。

同じく計算外であったジョンをサポートし、最低でも撤退に追い込む必要がある。
　向こうとしても、こちらで警官隊を全滅させた所で、マスターもサーヴァントも直接手にかけられるわけではないと理解しているだろう。
　ならば、最低限『これ以上は割に合わない』と思わせればそれで良い。
　警官達の何人かは、そのように考えていたのだが——

　その最中、異形の弓兵の背後に、ジョンとは別の警官がいる事に気付く。
「！」
　警官達はヴェラの指示を守れと叫びたかったが、声を出しては敵に気け取どられてしまうだろう。
　いったい誰が指示を無視しているのかと、その警官を注視した瞬間——彼らは気付いた。
　一人だった筈はずのその警官が、いつの間にか弓兵の背後で二人に、そして、次の一呼吸の間に四人へと増えている事に。
　つまりそれは、自分達の仲間の誰でもない。
　先刻まで弓兵と戦っていた警官の姿に化けた英霊——バーサーカーのサーヴァントであるという事に他ならなかった。

　バーサーカー——ジャック・ザ・リッパーが変じた警官の群。
　音も無く十六人にまで増えたその警官は、敵の背後からジョンを援護すべく襲撃をかけんとした。
　だが、それは脆もろくも蹴散らされる。
　背後を向かぬまま、弓兵は己の背に生えた異形の翼を蠢うごめかせ、最初に躍り掛かった数名のジャックを切り裂いた。
「……まだ、動けたか」
　背後を見ぬまま、感心と呆あきれが半分ずつといった調子で言葉を

紡つむぐ弓兵。
　そう言いながらも、彼はその弓でジョンの攻撃を払い凌しのぎ続けていた。
　背後に迫る気配と音を消したジャックに対処するその超感覚は、正しく心眼と呼ぶに相応ふさわしい。そんな事を考えつつ、残った複数のジャックの一人が声をあげる。
「よくもまあ、奪ったばかりの翼をそうも器用に扱えるものだ」
　その言葉の間にも、別のジャック達が弓兵に躍り掛かった。
　新たに増えたジャック達はもはや警官の姿ですらなく、ただの町人や医者、老ろう若にやく男なん女にょ問わず、様々な姿となっている。
　警官で姿を統一する余裕もないのだろうか。それは伝説に出てくるような悪魔を討ち滅ぼそうと、あるいは命乞いをしようと追おい縋すがる、憐あわれな人間達の群のようにも見えた。
「笑止」
　結局の所、先刻よりも力の落ちているジャックに、既に動きのキレはない。
　弓兵もそれを理解しているのか、目の前にいる人間の警官の方に意識の多くを向けていた。
　しかし、その評価は次の瞬間に一変する。
　ジャックの陰から無数の黒腕が伸び上がり、その身体からだに絡からみ付ついたからだ。

「む……？」
　影。
　夜の闇を更に呑のみ込こむような漆黒の渦が、周囲の空間を包み込む。
　それが魔術であると気付いた弓兵──アルケイデスは、警官の義手と弓を鬩せめぎ合わせたまま意識を周囲に巡らせた。
　すると、景色の一部に歪ゆがみがある事を見つける。

常人にはまず見破れぬだろうが、アルケイデスほどの英霊からすれば実に解わかりやすい、雑な幻術だ。
「……魔術師め。穴蔵から出て来たか」
それがバーサーカーのマスターであると判断したアルケイデスは、その影になんの意味があるのかを即座に見抜いた。
これは、ただの目め眩くらましに過ぎない。
直接危害を加えるタイプの魔術ならば、自らの身体からだに傷を付ける事はできない筈はずだ。
相手が神代の魔術師というなら話は別だが、バーサーカーのマスターが神代の英霊ではなく人間の魔術師である限り、それは有り得ない。
自らのマスターであるバズディロット・コーデリオンからの情報によれば、バーサーカーのマスターは時計塔と呼ばれる魔術協会の総本山に所属する鬼才との事だが──現代を生きる魔術師である以上、その魔術自体は怖おそれる対象とはならず、相手もそれには気付いている筈はずだ。
ならば、これは目め眩くらましと見るべきだろう。
事実アルケイデスは、周囲に複数の英霊がいるこの状況での目め眩くらましが、生半な攻撃よりも遙はるかに厄介であると理解していた。
故に、油断する事なく次の一手を打ち放つ。
「……啄ついばめ」
軽く囁ささやいたその言葉は、重々しい呪いとなって周囲に振りまかれる。
水平に振り回された大弓の勢いに押され、ジョンやバーサーカー達が大きく後退した。
その一瞬の隙を突き、アルケイデスは手にした複数の弓を一気に撃ち放つ。
すると、放たれた矢はみるみる内に青銅の爪と嘴くちばしを持つ戦鳥へと変化し、大通りの奥の歩道にある空間の歪ゆがみへと襲いか

かった。
　魔力を纏まとった鳥達が通り過ぎる度に空間の歪ゆがみが切り裂かれ、何もないように見えた場所に、一人の青年の姿が曝さらけ出だされた。
「うひゃわぁッ!?　──ぷ、ぷぷ、対処開始プレイボール！」
　慌てて魔術の障壁を張りつつ、周囲の風を乱して鳥の襲撃を逸そらす青年。
　だが、竜巻のような強風に散らされる鳥達の隙間を縫う形で──アルケイデスの強烈な一いつ矢しが、その青年の鳩尾みぞおちを貫いた。
「□□□□□□」
　強風も魔術障壁も欠片かけらも意に介さず、全てを穿うがち進んできた破滅の化身。
　それは確かに青年の核を破壊し、周囲の骨肉を砕きながら臓ぞう腑ふを破壊していく。

「マスターッ！」
　アルケイデスの背後で、バーサーカーが怒声を上げる。
「フラット！」
　ジョンと呼ばれていた警官も、その名を叫ぶ。
　それを聞いたアルケイデスは、バズディロットから与えられた情報の中にあった名がフラット・エスカルドスだったと記憶から引き出し、自らの一いつ矢しがバーサーカーのマスターを討ち滅ぼした事を確信した。
　あるいは魔術師の身体からだに刻まれた魔術刻印が自動的に起動し、無理矢理致命傷を癒やして蘇そ生せいさせるかもしれないが、そんな暇は与えない。
　全身の魔術刻印ごと魔術師の肉体を破壊すべく、既にアルケイデスは第二第三の矢を撃ち放った後であり、突風から逃れた鳥達も敵の身を啄ついばむべく動き始めていた。
　だが──

その破壊が行われる直前に、青年の身体が霧のように薄らぎ始めた。
「何……？」
　一瞬幻術を疑ったが、それはすぐに否定される。
　自らの宝具の一部であり、魔力の経路が繋つながった『鳥』が、確かに敵を貫いた感覚はあった。
　だが、現実として、その死体は、まるで英霊のように消えていく。
　彼の意識の比重が『マスター殺し』への疑念に傾いた、ほんの数秒。
　その僅かな合間に──『彼』は、その複雑怪奇な術式を完成させていた。

『──介入開始ゲームセレクト』

　その声は、アルケイデスのすぐ近くから聞こえてきた。
　ここまでの僅かな時間で屍しかばねと化したバーサーカー達の一部。
　その山の中から、屠ほふった覚えのない個体が口と手を動かし、瞬時に魔術を発動させたのだ。
　刹那──アルケイデスがつがえていた矢の一本が爆散し、異形となっていたその身を一瞬だけよろめかせた。

　──馬鹿な。
　アルケイデスは、自分が何をされたのか即座に理解する。
　宝具たる『十二の栄光キングス・オーダー』の一つ、『ステュムパリデスの鳥』を発動する為ための魔力の流れを弄いじられ、無理矢理ショートさせられたのだ。

　だが、それは術式の始まりに過ぎない。

「むう……ッ！」
　体勢を立て直そうとした所で、更なる魔力の暴走が起こる。

　魔術師ではないアルケイデスだが、その身体からだ自体が魔力の固まりであるが故に、身体からだを巡る血脈と神経の全てが魔力回路であるとも言えた。
　その全てが今、導火線と化し、連鎖する形で次々と小さな魔力暴走を起こしていく。

　鋼のように引き締まった腕の中で魔力が爆はぜる。
　　時には刃と化すまでに鍛え上げられた足の爪先で魔力が爆はぜる。
　　　世界樹の根のように深く強く張り巡らされた身体からだ中の血管で魔力が爆はぜる。
　　　　美しく編み込まれた全身の神経で魔力が爆はぜる。
　　　　　息を吸い込む間も無く肺胞の一つ一つで魔力が爆はぜる。
　　　　　　布に隠された眼球の裏側で魔力が爆はぜる。
　　　　　　　脳幹の一部で魔力が爆はぜる。
　　　　　　　　爆はぜる、爆はぜる、爆はぜる――――――

　魔力が爆はぜる間隔は徐々に狭まり、最後に心臓のあたりで巨大な魔力が弾はじける感覚があった。
　痛みと熱さの区別がつかぬ衝撃。
　背中の翼と頭の角の半分が弾はじけ飛び、弓を握る手からも魔力が弾はじけ、分厚い爪の何枚かが剝がれ飛ぶ。
　身体からだの内部でも魔力が暴れ、一部の臓器が派手に引き裂かれた。
　だが、恐るべきは、かつて大英雄と呼ばれしその霊基。
「……させんッ！」
　気合いの声と共に、アルケイデスは震脚のように道路を踏みしめ、

暴走した己の魔力を大地へと流し込んだ。
　次の瞬間、数百メートルに渡る大通りのアスファルトが何箇所も捲めくれ上がり、水道管が破裂する事によって土砂と水が一斉に吹き上がる。
　並の英霊ならばこの時点で全身が弾はじけ飛んでいてもおかしくない状態だが、彼はその肉体的な強さのみで無理矢理己の身体からだが四散するのを防ぎ切ったのだ。
　とはいえ、当然ながらそのダメージは尋常ではない。
　反動で周囲の道路は滅め茶ちゃ苦く茶ちゃになり、路上駐車されていた車の何台かは半分スクラップの状態でひっくり返っていた。
　だが、そんな車よりも、アルケイデスの身体からだの内部の方が遙はるかに大きい損傷を受けている。
　それは、一人の魔術師が英霊に与えた影響としては、通常考えられぬ事だった。
　対魔力が非常に高いアルケイデスの霊基に、現代の魔術は通じない。
　ならば──
──徒あだとなったか。
　己を構成する霊基の中で、対魔力が薄い部分。
　そして同時に、バーサーカーの一部である以上、直前までマスターである青年との魔力の経路が繫つながっていたという事に他ならない。
　先刻バーサーカーから奪った宝具の力──幻想種たる悪魔へと変貌した部分を介して、その魔術師は魔力の流れそのものを混乱させる術式を流し込んだのだ。
　とはいえ、簡単にできる事ではない。
　それこそ、この状況で複雑な魔力の流れそのものを完全に把握でもしていない限り、斯か様ような真似まねは不可能な筈はずだ。
　つまり、『彼』はそれをやってのけたという事になる。
「この距離まで近づかなきゃ、無理でしたよ」

バーサーカーの群の中に紛れていたその魔術師は、安あん堵どの笑みを漏らしながら呟つぶやいた。
　周囲のバーサーカーの死体が消え始め、それと同時に、先刻アルケイデスが貫いた魔術師の死体も完全に消きえ失うせた。
　そちらの死体は正しく、フラット・エスカルドスという魔術師へと変貌したバーサーカーの姿に他ならなかった。

　状況が積み重ねられ、アルケイデスの心眼が一瞬鈍る。
　そして──その刹那の揺らぎが、彼に致命的な隙を生み出していた。

　雄お叫たけびのような叫びが、アルケイデスの耳じ朶だを揺らす。
　それが、ジョンと呼ばれた警官が、命すら吐き出しているかのような渾こん身しんの一撃を撃ち放った合図であり──音が耳に届いた時には、既にジョンは懐ふところにまで飛び込んでいた。
　瞬間的に音速を超える一撃。
　衝撃波が起こり、周囲の瓦が礫れきとフラットを吹き飛ばす。
　刹那。
　トスリ、と、その勢いが嘘うそのような、アルケイデスにとって軽い衝撃が脇腹を走る。
　音速を超える、宝具と化した義手の一撃とはいえ、アルケイデスの尋常ならざる肉体に対してはそれがせいぜいだった。
　事実、義手の刃はそれで根本から折れてしまい、反動でジョンもまた数メートル吹き飛ばされて地面を転がる形となる。
　だが、それで充分だった。
　持てる力の全てを籠めたジョンの義手──つまりは、ヒュドラの毒が染しみた刃による一刺し。
　その時点で、大抵の英霊にとっては致命傷となるその毒だが──
　アルケイデスにとっては、殊更に霊基を蝕むしばまれる理由がある。

—死。

　純然たる死毒の呪い。
　かつて自分を自死に追いやったモノが、アルケイデスの身体からだに流れ込む。
　それと同時に、フラットが自らの作戦が終了した事を告げる、術式の締めの言葉を口にした。

『—観測完了ゲームオーバー』

　必殺と言うに相応ふさわしい一撃を持つジョンの為ために、僅かな隙を造り出す。
　その刹那の時間を生み出す為ために、彼らがした事は単純明快。
　魂を捧げたのだ。
　出会ってから数分と経たたない間柄である、キャスターのクラスを持つ英霊に。

×　×

　—【俺の英霊としての特技に、そこそこ名のある道具を調理して、それこそ宝具にまで仕立て上げるってもんがあるわけだが……】
　—【本物の英霊を素材にできる機会なんざ滅多にねぇ】
　—【何しろ、所有者の同意が必要になるわけだからな。普通は無理だ】
　—【だがな、『例外』って奴は、上手うまくピースが嵌はまりゃ最高の味付けになるもんでよ】
　—【つまり、だ。お前さんの『誰にでもなれる』って能力を弄いじって、昇華させる】
　—【より完璧に、あんたが他人になれるようにする】
　—【まあ、マスターを『他人』と呼ぶかどうかはあんた次第だが

な】

アレクサンドル・デュマが持ちかけた提案は、かなりピーキーなものだった。
ジャック・ザ・リッパーの霊基が持つ特殊能力スキル、『千貌』。
更に宝具である『其は惨劇の終焉に値せずナチユラルボーンキラーズ』を材料とし、そこにもう一つの『食材』──即すなわちマスターであるフラット・エスカルドスのエッセンスを組み合わせ、能力を一時的に強化させようというのだ。
それは当然比喩であり、フラットが切り刻まれて鍋の具材になるという事ではなかった。
だが、魔力の経路をデュマの力でより強化させ、互いの存在を擬似的に混ぜ合わせるという、マスターとサーヴァントという存在にとっては、ミキサーにかけられて合あい挽びき肉にされるというのも同然の提案である。
何しろ、マスターからすれば、『殺人鬼の霊基が自分の存在と混ざる』という事に他ならず、どのような副作用や後遺症が残るか想像もつかない。場合によっては、魔術を失ったり、あるいは切り裂き
ジャックという英霊が持つエピソードに引ひき摺ずられ、無意味な殺人を犯すようになるかもしれない。
考え得るマイナス要素を上げれば切りが無いが──それを、フラットはあっさりと承認した。
デュマが宝具を使用する事によってジャックの力は強化され、『フラット・エスカルドスという魔術師に、行使する魔術まで含め、本人と遜色ない形で変化できる』という力を手に入れたのだ。

×　×

いつの間にか天空に伸びていた『光の柱』は消え去っており、代わりに、その柱の根本にあった教会の一部が崩壊している。

闇に包まれつつある周囲の空間の中に、重々しく、それでいて静かな声が響き渉った。
「……何故だ？」
ジョンの義手から折れたままの毒刃を脇腹に食い込ませたまま、アルケイデスがバーサーカーに問い掛ける。
バーサーカー達がどのようにしてそれを為なしたのかは解わからないが、完璧な偽装を持って己にマスターの位置を錯覚させた事を理解したアルケイデスは、それでも疑念が晴れなかった。
「完全にマスターに変じる事ができるのならば、貴様がここでマスターとなって私に術をかけても同じ事だったろう。何故、お前のマスターは危険を冒して戦場に立った？」
すると、警官の姿をしていたバーサーカーが、アルケイデスに答える。
「簡単な事だ。私がどれだけマスターになれても、私では持てぬ物がある」
その言葉を聞いたアルケイデスは、地面に伏せた状態から立ち上がりかけていたバーサーカーのマスター、フラット・エスカルドスに目を向けた。
彼の右手の甲では、二画目の令呪が薄らいでいる。
それを見たアルケイデスは、自分の魔術を暴走させる術式の、『最後の一押し』を理解した。
「……自らの令呪の術式を組み替えたか」
令呪が効果を発揮するのは、自らが契約したサーヴァントだけだ。
その理ことわりを崩し、他者のサーヴァントに命令を行使する事は不可能だが──その莫ばく大だいな魔力を巧妙に書きかえ、アルケイデスとそのマスターの魔力経路を『ハッキング』する形で魔力をねじ込み──令呪を以て自害をさせるにも等しい術式を走らせたのだ。
「ええと……賭けだったっていうか……。アーチャーさんのマスターさん、もう令呪全部使ってますよね？　もし、一画でも残ってたら、その繋つながりの力に弾はじかれてたと思います」

幸運だったと笑いながら胸をなで下ろすフラットを見て、アルケイデスはその異常性を理解する。
「なるほど、そこまで見通す『眼め』を持つとは……」
そして、相手には聞こえぬ幽かすかな声で独りごちた。
「貴様、――――か」

「？」
聞き取れなかったフラットは首を傾かしげるが、アルケイデスはその疑問に答えない。
彼は―自らの肉体を『死』が蝕むしばんでいく事を理解していた。
かつて、半身であった筈はずの憎き男神の栄光が、人の衣と魂を捨て去った程の『死』が。
アルケイデスは脇腹に刺さった刃に眼めを向けた後、壊れた義手の持ち主であるジョンを見た。
尚なおも立ち上がろうとするジョンに、アルケイデスが呟つぶやく。
「見事だ、人の子よ。神の支配を否定し、己の足で立つ我が同胞よ」
ゴポリ、と、何かが溢あふれる音がしたかと思うと―弓兵の顔を覆う布の隙間から、ドス黒い血がこぼれ落ちた。
「貴様に与えられた力が神の加護であれば、真っ先に屠ほふり去っていた。だが、貴様に流れているのは人と地が生み出した力だ。決して神などが介入したものではない。ならば、私はこの世界を、この時代を賞賛しよう。水蛇の毒を用いたとはいえ、神の加護を拒絶しながら、なおも我が身を滅ぼす技を練り上げた事を言こと祝ほごう」
彼が穏やかに話をしていたのは、自らの消滅を理解した英霊の引ひき際ぎわの良さだろうか。
斯か様ような錯覚を覚えかけたジョンに、アルケイデスは言った。
「そして……憐あわれもう、勇者よ」
「え……？」
訝いぶかしむジョンの目の前で、アルケイデスの脇腹が毒によって

蝕むしばまれ、漆黒の傷となって溶け出したのだが──
　次の瞬間、その漆黒の毒素が、より禍まが々まがしい色合いをした『泥』に呑のみ込こまれた。
「なッ……!?」
　警官隊やフラット、バーサーカー達も思わず動きを止める。
　アルケイデスの全身から湧き上がったその『泥』のような魔力の塊は、ヒュドラの毒を、『死』そのものを呑のみ込こむように搦からめ捕とり、そのまま傷口へと吸い込まれて行った。
「神の衣を打ち捨てているだけの私ならば、苦しみの後に安らぎを得た事だろう」
　肋ろっ骨こつと腰骨が見える程に溶け抉えぐれていた毒の傷が消え、後には何事も無かったかのように回復した肉体がそこにある。
「我が霊基が歪ゆがむ前であれば、今のかすり傷で斃たおれてやる事も吝やぶさかではなかった。この毒に限り、無数の命脈を全て蝕むしばむ事も可能だったかもしれん」
　そして──言葉を失うジョン達を前に、弓を握りながら言い放つ。
「だが、互いに……不運だったな」
　声に、僅かな諦めが籠もったかと思うと、即座にそれは怒りへと反転する。
「十二の命代替の心臓を失っているが……死毒では、悪お泥でいに侵されしこの身は滅ぼせぬと知れ」
　ジョン達ではなく、己自身と、果ての無き『力』そのものへの怒りを込めて、アルケイデスは呪いの如ごとき言葉を張り上げた。
「この穢けがれた私の血を……我が魂が抱く復ふく讐しゅうの炎を！　死毒程度の物で染められるものか！」

　そして、魔力が溢あふれ出だす。

　それは魔力の蠢うごめきだったが、物理的な風となって周囲の者達の身体からだを打ち据えた。

まるでアルケイデス自身が巨大な竜巻であるかのように、赤黒く染まった魔力の渦が周囲に吹き荒れる。
　戦いを見守っていた使い魔が吹き飛び、魔力回路が悲鳴を上げ、ただ風を浴びただけで膝をつく者まで現れた。
　何かをしたわけではない。
　ただ、アルケイデスがそこに佇たたずむだけでこの始末だ。
「今まで……本気じゃ……」
　警官隊の一人が、絶望の色を顔に浮かべながら呟つぶやく。
「いいや、本気だったのだろう」
　苦笑しながら、バーサーカーがそれに答えた。
「ここまでは、本気で『見』に回っていた……という事だろう。周囲の全てを警戒してな」
　彼もまた、万事休すという顔つきで、如何いかにしてマスターと共にこの場を離脱するかを考えている様子が窺うかがえる。
「だからこそ、我々はここで奴を殺し切らなければならなかった……。その力の全てを殺意に振り分けるその前にな」

　次の瞬間、アルケイデスが動き出した。
　だが、向かう先は、警官隊でもバーサーカーでもない。
　彼らの事はもはや眼中にあらずと言った様子で、一人の復讐者アヴエンジヤーは大地を蹴った。
　その一蹴りで、アルケイデスは宙高く舞い上がると──
　大弓につがえた矢を引き絞り、迷う事なく撃ち放つ。
　神の気配をその身に纏まとう、今、まさにセイバーに裁定を下そうとしていた弓兵へと。

×　×

教会上部

崩れた屋根のかろうじて残っていた部分に立ち、瓦が礫れきの上で血みどろになっているセイバーを見下ろすギルガメッシュ。
「雑種。貴様への裁定は――」
　彼が王ではなく、【裁定者】として一つの裁きを下そうとしたその瞬間。
　赤黒い魔力の暴風が周囲に渦巻き、色濃い殺意がこちらに迫る。
「……無粋な真似まねを」
　裁定の言葉を途中で止めると、ギルガメッシュは冷めた表情でそう舌打ちした。
　空間が揺らめき、迫り来る矢を『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』から射出された宝具が迎撃する。
　派手な音が鳴り響き相そう殺さいされた矢と宝具が砕け散った。
「王の身ならば道化の所業と流す所だが、裁定に横やりを入れるならば排除するまでだ」
　そして、ゆっくりと向き直り、教会の反対側の縁に下り立っていた弓兵復讐者、アルケイデスに語りかけた。
「仮面を剝ぎ取られたか、道化」
　相手が身体からだに纏まとう赤黒い魔力を見たギルガメッシュは、さして問題はないとでも言いたげに言葉を続けた。
「ついでに布を剝がす事を許す。どのような泣き顔をしているか見てやろう」
「……流す涙など、とうに枯れた。神々愚者どもに未来を奪われた、あの日にな」
「代わりに泥を眼めから溢こぼすか。随分と無粋なものを持ち込んだものだな。……雑種の妄念で穢けがれた泥で我の宝たる聖杯を穢けがした罪、この儀式を用意した者達に償わせる事としよう」
　その赤黒い泥のような魔力の正体を見抜いているかのような物言いをした後、ギルガメッシュは試すようにアルケイデスに問う。
「それで、なんとする？　余力がある内に我を討ちに来たのは、無礼なれど正解とも言えるが……その程度の穢けがれ、我に祓はらえぬと

でも思ったか？」
「……強き王よ。確かに貴様なら、その財を用いれば穢けがれなどものの数ではあるまい」
　周囲に渦巻く膨大な魔力とは対照的に、アルケイデスは不気味なほど静かに、自然体で佇たたずんでいた。
　だらりと落とした両腕。右手に軽く握られた弓。
　しかし、力んですらいないその全ての四肢が、次の瞬間にはこちらの首を刎はねる刃になるであろう凶まがつの気配を孕はらんでいる。
「だが……弱き戦士よ。貴様を屠ほふるのはその穢けがれではない」
「ほう？」
「その泥に溺れる……屍しかばねだ」

×　×

　二騎の英霊の間にあるのは、教会の屋根が崩れる事で生まれた大穴が一つ。
　その下にいるセイバーは、頭上で対たい峙じする二つの気配を見ながら呟つぶやいた。
「ああ……。参ったな。これから大きな戦いくさが始まるってのに、参加しそこねそうだ……」
　すると、這はいずるように瓦が礫れきを登ってきたアヤカが小声で叫ぶ。
「馬鹿！　そんな事を言っている場合じゃないよ、早く逃げないと……！」
「ああ、悪いなアヤカ。教会は守り通すつもりだったんだが……ちょっとだけしくじった」
「これを『ちょっと』って言い張るつもり⁉　いいから、早く怪我けがの手当てを……。教会なら、包帯か何か……」
「……包帯で英霊を治そうとするあたり……君はつくづく……魔術師じゃあないんだな」

そんな事を言い出すアヤカに、セイバーは血だらけの身体からだで苦笑した。
「なに……包帯なんかより、君の気持ちの方が良い薬草……だ……」
「冗談はやめて！　せめて、ここから逃げないと……」
　セイバーの腕をとり、なんとか自分の肩に回して持ち上げようとするアヤカ。
「ああ、待った待った……守るべき民にそんな事をさせたら……騎士としても王としても名折れだ……」
「私なんかと一緒にいる時点でとっくに名前なんか折れッぱなしだよ！　いいから早く！」
「君にそうやって自分を卑下させてしまうのは……英霊としての……名折れだ……」
　なんとか自力で立ち上がろうとするセイバーは、それでも心だけは折れぬまま、強がりの苦笑いを浮かべて呟つぶやいた。
「まあ……こんな状況にした時点で……サーヴァント失格と言われればそれまでだがな……」

×　×

　下方の瓦が礫れきの山の上で呟つぶやかれたセイバーの言葉は、当然ながら頭上の英霊達には届かない。
「この身は既に骸むくろなれど、我が身の罪は永えい劫ごう消えぬ」
　自らを死者と称したアルケイデスは、そのまま一歩踏み出した。
「なれば、冥府に揺蕩たゆたう忘却の椅子に、我が身、我が魂を委ねるまで」
　何気ない一歩。
　だが、それが己の全てを乗せた重みのある一歩であると、対たい峙じした英雄王は理解する。
「偉大なる敵にして憐あわれなる輩ともがらよ、貴様も我が狂奔と共に踊るがいい」

そしてアルケイデスは、自然体のまま、力ある言葉を口にした。

「────────『射殺す百頭ナインライブズ』」

ギルガメッシュが『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』を展開するのとほぼ同時に、アルケイデスが弓を撃ち放つ。
放たれた数百の宝具。
以前荒野で相対した時に撃ち放った攻撃力の弱い部類のものではなく、確実にその一撃一撃が相手の霊基を撃ち砕くものだ。
慢心と共に撃たれるのならば、効率も何もなくただ凶悪な殺意の雨として降り注ぐであろう宝具の数々。
だが、エルキドゥという友と同じ地に立っている今、ギルガメッシュに慢心はない。
的確な宝具を用いて、正確にネメアの獅し子しの毛皮に覆われていない部分に向かって射出されるそれは、正しく必殺の群であり、通常の英霊ならば跡形もなく消し飛ぶ攻撃だ。
だが、アルケイデスが横に跳びながら撃ち出した矢の連撃が、その宝具を相そう殺さいする形で撃ち落としていく。
一本の矢につき数本の宝具を打ち落としているが、その威力よりも眼めを見張るのは、連撃そのものの速さと異常な軌道であった。
一度に二本から三本の矢をつがえ、眼めにも止まらぬ速さで弓を引き続けるアルケイデス。
のみならず、その矢はまるでそれ自体が意志を持っているかのように空中で軌道を変え、四方八方から迫り来るギルガメッシュの宝具を的確に撃ち落としていった。
避けきれぬものは身体からだを捻ひねる事で『毛皮』で受け止め、その威力を無効化する。
傷一つつかぬその毛皮を見て、英雄王は鼻を鳴らしながら次の一手を繰り出した。
「この我が手ずから査定してやろう」

そして、英雄王の左右の空間が大きく歪ゆがむ──
「貴様の毛皮が、果たしてどこまでを人の業わざと見なすのかをな」
　左の空間からは、白く輝く炎。
　右の空間からは、銀色に輝く液体が。
　正確に言うならば、液体自体は無色だが、その周囲の空気中の水分が瞬時に凍り付き、傍はた目めには銀色に煌きらめいているように見えている。
　英雄王の倉にある以上、その炎も液体も人が生み出したものなのだろう。
　それらに人工の雷撃すら加え、炎と氷と雷の嵐となってアルケイデスに襲いかかった。
「……」
　対するアルケイデスは、無言のまま一ひと際きわ大きく弓を引き絞る。
　大弓が激しく撓たわみ、真っ二つにへし折れようかというその瞬間に力が解き放たれ──『それ』が教会の上空に生み出された。
　それは、禍まが々まがしい魔力を纏まとい、うねる軌道がそのまま巨大な大蛇のように見える九本の矢。
　まるで伝説のヒュドラそのもののように、目の前に迫る宝具の群のみならず、炎も、冷気も、雷さえも、全てを平等に喰くらい潰しながら大通りの空を覆い尽くす。

　正しい弓兵の姿であれば、それは禍まが々まがしい泥の如ごとき魔力などではなく、神気そのものを纏まとわせて撃ち放っていた筈はずだ。
　本来は『竜を纏まとう』と表現される、技術と神気の極致。
　剣で放てば無呼吸の剣舞九連撃となり、槍やりで放てば九連同撃の御み業わざとなるその宝具流派は、一子相伝すら叶かなわず、かの大英雄がただ一人で生み出し、ただ一人で完結させた一つの『神話』であると言えよう。

だが、復ふく讐しゆうの徒と化した大英雄から放たれた矢は、毒蛇かあるいは邪じや竜りゆうであるかという姿で高層ビルの合間を駆け巡った。
　そして、金色に輝く英雄王こそが最後の餌だとでも言わんばかりに、拡散していた九頭の大蛇が凄すさまじい勢いで襲いかかる。
「ヒュドラの毒か。王は毒を盛られるのが世の常とは言え、芸がなさ過ぎるぞ、雑種」
　そして、一度宝具の射出を止め、新たな宝物の扉を開くべく眼前の空間を歪ゆがませる。
「蛇めを我の蔵に収めるのは業ごう腹はらではあるが、その程度の毒は貯蔵済みよ」

「その血肉も、解げ毒どく剤ざいも含めてな」

×　×

「勝てる……勝てます、ギルガメッシュ様……！」
　その様子をカジノホテルの最上階から見ていたティーネは、思わず拳を握りしめていた。
　あのアルケイデスと名乗った異形の弓兵は、此こ度たびの聖杯戦争で屈指の難敵であろう。
　だが、この攻防を見て、ティーネは自らのサーヴァントであるギルガメッシュの勝利を確信していた。
　相手の攻撃を全て防ぎ切る流れであり、今の宝具らしき弓の九撃は切り札の一つだろう。
　状況から判断するに、相手の宝具を奪うという反則気味な宝具を持っているアルケイデス。
　だが、このまま行けば、『天地乖離す開闢の星エヌマ・エリシユ』を撃ち放つ為ための乖かい離り剣エアを出すまでもなく、それが奪われる心配もないだろう。

何よりも、欠片かけらも恐怖も憂いも顔に浮かべていないギルガメッシュのその態度にこそ、ティーネは何よりの安あん堵どを覚えていた。

「流石さすがで御座います。我が王よ……！」
　思わず漏れ出たその言葉は──土地の奪還を願う魔術師としてのものではない。
　正まさしく、英雄王の輝きに心酔した、幼さの残る子供としての言葉だった。

　ティーネ・チェルクは忘れていたのだ。
　自らが英雄王の臣下であると同時に、ギルガメッシュのマスターでもあるという事を。

　そして、ティーネは知らなかった。
　如何いかにギルガメッシュが強大で尊き存在であろうとも、
　たとえ、英雄王が慢心と油断を捨てていようとも──
　マスターとサーヴァントの共闘無くして勝ち抜ける程、聖杯戦争は甘いものではないのだという事を。

×　×

　ギルガメッシュが、巨大な赤黒い異形の如ごとき魔力を纏まとって迫り来る九本の矢を迎撃する為ための宝具を出そうとしたその瞬間──
　突如として、ギルガメッシュの周囲に広がっていた空間の歪ゆがみが消え失せた。
「……何？」
　そこで初めて、ギルガメッシュが眉を顰ひそめる。
　空間の歪ゆがみの消失は、一つの事実を示していた。
『王の財宝ゲート・オブ・バビロン』を余す事無く溜ため込こんでい

る、バビロンの宝ほう物もつ庫こ。
　現世のどこかに現存しているとも、あるいはこの世ならざる別の空間にあるとも言われているその宝ほう物もつ庫この扉が、一斉に閉じたのだと。
　もちろん、そんな真似まねをギルガメッシュ自身がする筈はずがない。
　だが、ギルガメッシュ自身以外に、それができる者などいるだろうか？
　ありえない。
　そうギルガメッシュが判断するコンマ数秒の間にも、英雄殺しの毒矢が迫る。
　だが、今のギルガメッシュに慢心も油断もない。
　この程度の事態で心が折れる事はなく、既に射出された宝具の残りを用いて対処しようとしたのだが──

『□□□□　□□　□□□□　□□□□　□
□□
□□□□□□　□　□□　□□□□□□□□
□□　□□□』

　奇くしくも『それ』は、初日にエルキドゥが謳うたい上げた大地の声と良く似ていた。
　突然スノーフィールドの町中に鳴り響いた『それ』は、不協和音となってその場にいた者達の脳髄を掻かき乱みだす。
　エルキドゥと違うのは、その声質だ。
　今回響き渉わたった『それ』は、大地と人を礼らい賛さんする美しき歌声などではなく──
　この世界の全てを呪うかのような、歪いびつな怪物の怨えん嗟さの叫びそのものであった。

×　×

　ティーネ・チェルクは遠見の術式越しに、その瞬間のギルガメッシュの表情を見た。
「え……？」
　彼女は一瞬、自分の目の方をこそ疑った。
　何故なら──そこに映し出されていたギルガメッシュの顔は、これまでティーネが見た事が無かったものだったからだ。
　一見すると、それはエルキドゥの存在を察知した時の驚きの顔に良く似ている。
　だが、その眼めには。
　あろうことかその眼めには、英雄王にあってはならぬ感情が僅かに漏れ出ていたのだ。
　それは、普通ならば敵対する者達の眼めから英雄王に対してこそ向

けられる感情。
　彼の眼めに映っていたものは、驚き、焦燥、戸惑い――――そして、ほんの僅かな恐怖。
　その光景を見た者は、一瞬の事とはいえ、誰もが同じ結論に辿たどり着ついた。
　英雄王が、その叫びを耳にした瞬間、確かに身を竦めたのだと。
　―ありえない。
　―嘘うそだ、自分の見間違いだ。
　ティーネがそう自分に言い聞かせる間すらなく、遠見の術式に悲劇は映し出された。

　英雄王に迫っていた毒矢の一つが、その肩口を貫く瞬間が。

×　×

「ぬうッ……！」
　かろうじて、急所は避けていた。
　だが、毒矢を前に急所か否いなかなど、さして意味を成さない。
　そんな彼に、軌道を逸そらしていた残りの毒矢が迫る。
　宝ほう物もつ庫こは開かない。
　矢の一撃を食らい体勢を崩している。
　そして、剣で打ち払う事など不可能な勢いで迫る弓矢の群。
　万事休すと言った状況で、二発目、三発目と、腕と足を貫かれる英雄王。
　四本目以降は確実に急所を貫くであろう。
　誰の眼めにも、英雄王が堕おちる番狂わせが起こると思わせたその瞬間―
　何処どこかから飛来した『土の槍やり』が、ギルガメッシュの横を通り過ぎながら残りの毒矢を打ち払った。
　激しい衝突音と共に、矢が纏まとっていた魔力が弾はじけて周囲の

ビル群の窓まど硝子ガラスを震わせる。
「……邪魔が入ったか」
「きさ……ま」
　敵の言葉が聞こえているのかいないのか、英雄王は怒りに満ちた顔を夜空に向けた。
「まさか迷い出るとはな……貴様、よもや……そこまで堕おちていたか」
　それは、アルケイデスに向けられていた言葉ではなかった。
　虚こ空くうに向けられたギルガメッシュの眼めは、その気配を既に感じ取っていたのだ。
　これまでは、巧妙に消されていた気配。
　ギルガメッシュが毒矢に貫かれた瞬間、もはや隠れる必要はないとばかりに浮かび上がった気配を。
　そして──その言葉に答える形で、大通りの空に第三者の声が響き渉わたる。

「堕おちた、なんて酷ひどい物言いね」
　それは、美しく透き通り、それでいて寒気を感じさせる程に冷え切った声だった。
「私がいる高みは最初から変わっていないわ。貴方あなたが勝手に私達より上り詰めたと思い込んでいるだけ。そうでしょう？」
　高層ビルの一つ、その陰から空に浮かびつつ現れたのは、白い肌に紅あかい眼めを持つ、人間離れした美しさを持つ女だった。
　ギルガメッシュは、その外見の女を知らない。
　だが、恐らくその『中』にいるであろう存在は、嫌という程に知っている。
　知り過ぎている、と言っても良い。
「それにしても、やっと隙を見せたわね。……っていうか、そろそろ毒の激痛が回ってる頃だと思うけど、転げ回らなくていいの？　笑ってあげるからさっさと悲鳴を上げなさいよ」

僅かに笑みを浮かべ、ヒュドラの毒に侵されつつあるギルガメッシュにそう言い放つ美女。
　だが、本来ならば痛みという言葉すら生なま温ぬるい、全身の血管に強酸が流れるが如ごとき衝撃が走り抜けている筈はずのギルガメッシュは、額に脂汗を浮かべつつも、上空にいる女を見下した。
「吼ほえるではないか。貴様の魂に貼り付いたその傲慢、千年単位の移ろいでも消えぬとは、余程深く根を下ろしたカビのようだな」
　不遜という単語が鎧よろいを着て歩いているかのような英雄王に『傲慢』と言い切られたその女は、余裕の笑みを浮かべながら言葉を続けた。
「なんとでも言いなさい。それにしても、探すのに苦労したわ……。私にあんなジメジメした洞窟を歩かせるなんて、それだけで万死に値する所よ」
　洞窟、という単語を聞き、ギルガメッシュと遠見の術式越しに聞いていたティーネの二人は、同時に一つの場所を思い浮かべた。
　外部の魔術師が、最初にギルガメッシュを召喚した峡谷の洞窟。
「でも、許してあげる。おかげで、貴方あなたを殺す為ための有意義なものが見つかったんだもの」
　女はギルガメッシュを上から睨ねめ付つけつつ、大仰な拵こしらえの鍵を一つ取り出した。
　彼女の手に握られているのは、魔術師が英雄王を喚よぶ為ために使った触媒に他ならなかった。
　宝ほう物もつ庫この、表の鍵。
　乖かい離り剣けんエアが仕舞われた最さい奥おうの扉を開く鍵剣ではない。
　文字通り、宝ほう物もつ庫この表の扉そのものを開く為ための逸品だ。
「ただの人間が持っても使い道のない、何の意味も無い物よね」
「貴様……」
　脂汗を流しながら呻うめき、それでもなお真まっ直すぐに立ち続け

るギルガメッシュに対し、女は小首を可愛かわいらしく傾かしげ──底冷えするような笑みと共にその言葉を吐き出した。
「でも、私なら……『鍵を掛け直す』事ぐらいはできるわ」
　英雄王の宝ほう物もつ庫こを封じたという、ティーネ陣営にとって致命的とも言える一言を。
　だが、英雄王はその事実よりも重要だとばかりに、皮肉の言葉と共に口角を上げた。
「貴様が我の財に目を眩くらませる前に扉を閉じるとはな。堕おちたと言ったが、訂正しよう」
「……」
「随分と殊勝になったではないか……豊穣の女神イシユタルよ」
　イシュタル。
　吐き出された名に冷たい微笑ほほえみを返す事で肯定の代わりとした女に対し、ギルガメッシュは全身の毒の苦しみを常識離れしたプライドのみで押さえ付けながら、尚なおも皮肉の笑みを返す。
「それとも、その器にでも影響されたか？」
「それは無いわね。元の人格なんて完全に私の影に隠れてるわ。……この子、器になる為ためだけに作られた類の人形だもの」
　次の瞬間──
　彼女の足元から虹のような七色の煌きらめきが広がり、その真下に巨大な『何か』がその姿を現した。
　恐らくは──先刻ギルガメッシュを竦すくませる程の『叫び』を響かせた存在が。
「この子みたいにね」
「……ッ！」
　現れた巨大な物体──この時点でのギルガメッシュは知り得ぬ事だが、ハルリと喚よばれるマスターが召喚したその『真なるバーサーカー』を見て、英雄王はその身にいくつもの感情を走らせる。
　そして、最終的に怒りに満ちた眼めを向け、ゆっくりと頭を左右に振った。

「やれやれ。我とした事が見誤ったか。……本人ではなく、劣化した呪いの残響とはな」
「……」
　やはり薄い微笑ほほえみを返すだけのイシュタルは、その言葉に答える代わりに、周囲を見ながら愉たのしげに口を綻ばせる。
「本当はもっと遊んであげたいけれど……これ以上は、少し面倒な事になりそうね」
「何……？」
「エレシュキガル……いえ、ネルガルの眷けん属ぞくかしら？　逃げた方がいいと思うけど？　喰くらい飽きたって言ってたけれど、今の貴方あなたは『神の罰』を受けたばかりなのよ？」
　セイバーとの会話を聞いていたのだろうか。淡々とそんな事を言う彼女は、そのまま巨大な英霊と共に背を向け、最後に捨すて台詞ぜりふのようなものを吐きながらその場を後にした。
　最後に、神と言うにはあまりにも邪悪であり、妖よう艶えんとも言える笑みと言葉を残しながら。
「せっかく急所は避けたんだから、できるだけ長く苦しみなさい」

「……って、言いたい所だけど」

　そこで動きを止め、ぐるりと首をギルガメッシュに向けながら、一ひと際きわ冷酷な笑みを浮かべるイシュタル。
「私は許しても、この子は許せないみたいね、貴方あなた達たちの事」
　次の瞬間、鋼の巨体から虹色の光輪が放たれたかと思うと、削岩機の先端のように捻ねじれ尖とがり──そのまま、ギルガメッシュの腹部を真まっ直すぐに貫いた。

「ギルガメッシュ様！　いや、いやあああぁぁあ！」

年若きマスターの叫びが空高くで木霊こだましているが、地上近くにいるイシュタルと喚よばれた女にも、アルケイデスにも届かない。
　果たして、サーヴァントたるギルガメッシュにその叫びは届いたのか否いなか、それを計り知る事はできなかった。
　ただ一つ、確かな事はある。
　その意識を失う瞬間まで、ギルガメッシュは威風堂々と、敵を前に仁王立ちを続けていた。
　多くの英雄の師であるケンタウロスですら、不死性を捨ててまで死を願う災禍の痛撃。
　その毒に三箇所も蝕むしばまれ、更に、鋼の獣に腹を貫かれようとも——ギルガメッシュは、王として敵の前に立ち続けたのだ。
　英雄王ギルガメッシュ。
　此こ度たびの戦において、彼に慢心は欠片かけらも無い。
　それでもなお、神の謀略と獣の暴力の前に屈したという現実が突きつけられる。
　やがて彼の立つ教会の屋根が崩れ去り、瓦が礫れきの中に消えると同時にティーネと繫つながる魔力の経路が薄らぎ始め——

　王の霊基が今、完全に失われた。

　そして、数十秒後。
　アルケイデスの泥とも違う、圧倒的な『黒』の群。
　病院の一室から湧き出した漆黒の風が、周囲の全てを包み込み——

　あれだけの喧けん噪そうに包まれていた大通りから、全ての命が消きえ失うせる。
　ギルガメッシュの姿も、アルケイデスの姿も、警官隊も、フラットも、教会にいた監督役の神父や綾あや香か達たちとセイバーすらその姿を消し去る結果となった。

後には虫の死骸一つすら残らず──

そこにはただ、静寂が支配する街並みだけが残されていた。

いったい何が起こったのか、黒幕サイドである警察署長やファルデウス、あるいはフランチェスカ・プレラーティですらその全貌を摑つかめぬまま。

ただ、ただ、静寂だけが大通りを闊かつ歩ぽし続けた。

過去

　シグマが魔術使いの傭よう兵へいとして活動を始めてから暫しばらく経たった頃、共に戦っていた傭よう兵へいから裏切られた事がある。
　しかも、幼き頃に同じ『施設』で育て上げられた同胞に。
『施設』ではラムダと呼ばれており、シグマよりも魔術の腕前は数段上だった男だ。
　共にとある魔術使いの犯罪組織を制圧しに行った際、敵の待ち受ける陣地までシグマを誘い込んだ挙げ句に、背中側から呪いガンドを撃ち放ったのだ。
　その後、紆う余よ曲きよく折せつはあったが──結果として、生き残ったのはシグマだった。
　確かに魔術はラムダの方が上だが、彼はそれ故に魔術に傾倒しすぎていた為ため、その隙を突かれる形でシグマの現代兵装を用いた戦術に敗北を喫する形となったのである。

「……なんで、俺なんだ？　どうして……俺が死ぬんだ？」
　死に到いたる呪じゆ詛そを暴走させられ、自家中毒を起こす形で死にゆく魔術使い。
　全身が動かなくなり、心臓が止まりかけている状態にも関わらず、その口からは怨えん嗟さの声が溢あふれ続けていた。
「お前が、俺を敵に売ったからだろう」
　殺されそうになったから殺した。
　ただそれだけの単純な答えを返したシグマに、息も絶え絶えの魔術使いが首を振る。
「そうじゃない、そんな話をしているんじゃあないんだ。おかしいだ

ろう、おかしい。強い奴が生き残るのはいい、それが俺達の摂理だ。殺意は呪じゅ詛そとなり世界に刻まれ、相手からは呪じゅ詛そ返しとして殺意が返る。当然のことだ。だが、そうじゃない……俺が言いたいのは……そういう事じゃあ、ない……」
　胃液と混じり、ドス黒く染まった血を吐きながら、男はただ怨えん嗟さの言葉を叫び続けた。
「俺には……俺には生きる理由がある！　守らなきゃならない奴らもできたんだ！　欲しいものだって山ほどある！　俺達の故郷だって、あの『施設』は潰れたが何も変わっちゃいない！　だから俺が変えなきゃいけない！　もう二度と、俺達みたいな奴が生まれない為ためにだ！　その為ためには、あの組織を今潰されるわけにはいかなかった……！　だから俺は、全てを捧ささげた！　時間も、命も、同じ施設に育った親友のお前さえ、大儀の為ための贄にえにするつもりだった！」
　今にも跳ね起きてこちらの首を絞めそうな目つきで叫ぶが、その命の火は、確実に失われつつある。
　無表情でその叫びを聞き続けるシグマに、ラムダは尚なおも呪いの言葉を吐き付けた。
「なのに！　なのにどうして！　どうしてだシグマ！　大儀も意志も何も持たない、持つ気もないお前が、どうして俺を殺すんだよ！　なぜ……どうしてお前は俺を超えた⁉　お前の力を引き出した信念はなんだ⁉　お前は何の為ために生きるんだよ！　俺を殺してまで！　お前は……なんの為ために生きる……」
　いよいよ男の肺も動かなくなってきた所で、シグマは少し考えた後━その呪いの言葉に対するあっさりとした答えを投げ返す。
「理由が……必要なのか？」
「な……に……？」
「……死ぬのは、なんとなく嫌だ。痛いのも好きなわけじゃない。だから、俺は反撃して殺した。それだけだ」
「なんと……なく……？」

男の顔から、急速に色が失われる。
自らの怨えん嗟さの声が、相手に刻み込もうとした呪じゆ詛そがまるで相手に届いていない事を悟ったのか、男は先刻までとは別種の怒りと絶望に染まっていく。
だが、シグマはその顔を前にしてもなお無表情で言葉を続けた。
「多分、お前に大儀を語られた後に『頼むから死んでくれ』と言われても断っていた気がする。だから、闇討ちしたお前は正しい。お前はお前の裏切りに、胸を張っていい……と、思う」
無表情のまま、しかもどことなく自信なさげに言うシグマの言葉に、魔術使いの男は最後の命を振り絞って何かを叫ぼうとした。
「ふざ……そん……」
が、それは叶かなわなかった。
頭蓋内の血管のあちこちが破け、眼球からも血を流し始めた事を合図とし──男の命が、完全に終わる。
シグマはそんな男を冷たい目で見下ろしながら、考える。
──親友のお前さえ、大儀の為ための贄にえに──
最後に言っていたその言葉が頭の中に繰り返され、シグマは静かに空を仰いだ。
「そうか……俺の事を、親友だと思ってくれていたのか……」
ラムダと喚よばれていた男がどれだけ苦しんだ末に自分を罠わなに嵌はめたのかを理解すると同時に、自分は、彼の事を友人ともなんとも思っていなかった事に気付く。
「……笑えない冗談だ」

全てが終わったシグマは、雇い主から報酬を受け取った後、借りてきたコメディ番組のＤＶＤを繰り返し繰り返し再生し続けた。
他人からは、楽しんでいるようには見えないかもしれない。
だが、表情が薄いだけで、彼は確かにそうした番組を楽しんでいた。

ただ──一つだけ、心に雑念を交えながら。
　呪いの彫像のような、怒りと絶望が入り交じった顔をして死んでいった魔術使いの顔を思い出し──『いくら敵とはいえ、あんな顔で死ぬのは辛つらそうだ』と、シグマは思った。
　せめて最後に、何か気の利きいたジョークの一つでも投げかけてやれば、彼は少しは安らかに逝ゆけたのではないかと。
　しかし、なんと言えば良かったのか欠片かけらも思い浮かばぬまま──ただ、テレビ画面に映る赤い衣装の喜劇役者達を見て、心の底からの本音を呟つぶやく事しかできなかった。
「……コメディアンというのは凄すごいな……。宗教裁判すら喜劇に変える事ができるなんて」

　　　　×　×

現在　スノーフィールド　病院裏

　シグマは、考える。
　何故この状況で、あの時の『元』同胞の顔を思い出したのかと。

　目の前の状況は、当時とは似ても似つかない。
　アサシンの少女が身体からだの周りに纏まとった色濃い霧が、巨大な獣や大蛇、美しい女性や男性の巨人の姿など様々な姿に形を変え、どういう仕組みなのか、物理的な力を伴って吸血種、いや、『死徒』と喚よばれる怪物らしき男に襲いかかる。
　それらを時には躱かわし、時には手足を千切られては一瞬で再生させながら、愉たのしげに戦場を舞う人型の怪物に襲いかかる。
「ははは！　それは幽精ジンニーヤーか？　そんなものまで支配しているとは！　まったく、君は次から次へと私を飽きさせないな！　私を受け入れれば、もっと強力な幽精ジンニーヤーを支配させてやるぞ？　かのソロモン王スライマンのようになってみたくはないか？」

「……支配ではない。偉大なる先人とその教えを侮辱するか……！」
　ボソリと、憎しみと共にその言葉を呟つぶやいたアサシンは、そのまま自らも跳躍し、霧の変化した巨獣・巨人達と共に相手へと躍り掛かる。
　だが、その攻撃を身に受けながらも、笑いながら再生する怪人を見て、アサシンが思わず眼めを細める。
「魔物め……」
「魔物、魔物か！　確かにある側面では間違いではないが、そんな大雑把な括くくりで呼ばないでくれ。他の魔物全てに嫉妬し、思わず殲せん滅めつしてしまいそうだ！　まず不可能だが、君の為ためなら不可能も可能にしてみせよう！　しかしながら我が愛いとしの君よ。とりあえず私の名前を呼んではくれないか？　私の名はジェスターだ、ジェスター・カルトゥーレ！　何度でも君にこの名を伝えよう！　ああ、伝えようとも！」
　戦っている最中とは思えない叫びを口にしながら、恍こう惚こつと笑い続けるジェスター。
　シグマは、そちらの怪物については「まあ、魔術師にも怪物にも、ああいうおかしなのが多かった」と考えて流すだけだったが──
　逆に、その死ぬ姿が想像できぬ怪物と戦い続けるアサシンからは眼めが離せなかった。
　怒りに満ちた顔。
　敵と、力の無い己への憎しみに満ちた顔。
　──ああ、そうか。
　と、シグマは納得する。
　何故、あの同胞の顔を思い出したのかと。
　同じだからだ。
　あの怪物は、かつての自分と同じように、相対した者の生き様を穢けがそうとしている。
　生きる理由の無い自分が、彼の決意を穢けがしてしまった時と同様に、あの怪物は、己の全てを懸けて生き抜こうとしている英霊を穢け

がそうとしているのだ。
　アサシンと自分の同胞は全く違う存在だ。
　善性と悪性という意味でも正反対と言ってもいいだろう。
　だが──善人だろうと悪人だろうと、憎しみに染まった顔は、絶望に染まる顔は同じだ。
　同胞は自分を裏切ったが、彼もアサシンと同じように、譲れない何かを守ろうとしていたのだろう。
　──あいつは……ラムダは、何を守ろうとしていたんだろうな。
　相手の事を、知ろうともしていなかった。この瞬間になるまで、思い出す事すらも。
　ただ一つ確かなのは、彼の呪いはシグマの魂には届かなかったが──記憶の片隅には、残り続けていたのだ。
　苦しみを与える為ためではなく、呪いというよりは暗示に近い形で。
　それは即すなわち──
　このような状況で、ほんの僅かに、アサシンを助けなければと思うささやかな意識誘導。
　怨えん嗟さだけを届けたかったシグマの同胞にとっても、それは意図しない暗示だったが──
　まるで喜劇のような皮肉となって、それはシグマの心を動かした。
　結果として、シグマは銃を抜き放ち、即座にジェスターにその弾丸を叩たたき込こんだ。
　かなり距離はあったが、シグマの強化された感覚と肉体は、己自身を一つの銃座であるかのように調整し、正確にジェスターの眉間を撃ち抜いた。
　当然ながらその程度では死なないが、魔術処理を施した弾丸は、通常の武器とは違うダメージを確かに与えていた。
「ちッ……。しゃしゃり出るな、人間風ふ情ぜいが」
　即座にその傷を再生させながら、ジロリとシグマを睨ねめ付つけるジェスター。

その僅かな隙の間にシグマがやった事は──ただ、念話で問い掛けるだけだった。
　己のサーヴァントである『ウォッチャー』の影法師達に、現時点で知りうる眼前の怪物の情報を。

　そして──返って来た答えを、そのまま言葉として吐き出した。
「……お前の中の『弾丸』は、あといくつ残っている？」
　困惑させる為ための言葉を吐く事で、相手を揺さぶりにかかる。
『ウォッチャー』というサーヴァントの正体は分からないが、その特性は『召喚されている間に町で起こったことの全てを把握している』という、現実離れした性能の監視システムのようなものだ。
　その能力から得られた情報によると──ジェスターという吸血鬼は『弾丸』と自称する『核』をいくつか持っており、それを切り替える事で魂ごと身体からだを組み替えるという。
　魔術師の霊基はアサシンに破壊されたらしいとの事だが、その時点ではウォッチャーは召喚されていなかったが故に、詳細までは分からなかった。
「……何？」
『お前の事を知っているぞ』という挑発の効果は、単純ながら覿てき面めんだった。
　ジェスターは顔から表情を消し去り、元から無表情のシグマと能面のような顔を向け合う形で対たい峙じする。
「……？」
　突然動きを止めたジェスターに警戒しつつ、シグマの方を見るアサシン。
　そんな彼女にも好意的な意識を向けつつ、ジェスターはシグマに視線を向けて問い掛けた。
「貴様、マスターなのか？」
「……答える必要はない」
「どうやって私の情報を知った？　サーヴァントの力か？」

「情報源を明かすつもりはない。俺が伝えられるのは、ただ、お前が子供の姿に変身して代行者から逃げた事と、そのまま病院に潜伏して少女のベッドの下で何かしようとしていたという事だけだ」
　淡々と事実だけを紡つむぐシグマに、完全に隠おん密みつ行動をしていたつもりだったジェスターは、眉を顰ひそめながら苛いら立だちの声を上げる。
「気味の悪い奴め……なぶり殺しにするのは変わらないが、先に口を利きけなくしておくか」
　そして、攻撃対象を改めてシグマにしようとしたその瞬間──

　スノーフィールドの空に、巨大な蛇が舞った。
「！」
　流石さすがにジェスターもその魔力の奔流に警戒し、アサシンとシグマから距離を取りながらそちらに意識を向けた。
「これは……ここまでの力を持つ弓兵とは……なるほどなるほど、ここまでの下準備を重ねた聖杯戦争ともなれば、まさに神代の如ごとき──」
　そんな事を愉たのしげに言いかけた所で、更なる激流が彼らを襲う。

『□□□□　　　　　　□□　□□□□　　　□□□□　　　　　　　　□
□□
　　　　　□□□□□□　　□　　　　　□□　　　　□□□□□□□□
□□　　□□□』

　大通りの辺りから、この世の全てを呪う悲鳴のような叫びが響き渉わたった。
　まるで大地そのものが啼ないているかのようなその絶叫を聞き、ジェスターは眼めを丸くし、アサシンとシグマも自分の魂が砕かれた

かと錯覚して一瞬だけ時間から取り残される。
「なんだ……？　聖杯とは、ここまでの物を喚よべるものなのか……？」
　その叫びの根源にある霊基を感じ取ったジェスターは、困ったように独り言を呟つぶやいた。
「やれやれ、このままでは私好みの喜劇にも悲劇にもならない。観客も舞台も全て燃え尽きてしまうではないか」
　ジェスターは大仰に嘆くような動作をしたかと思うと、次の瞬間、邪悪な笑みを貼り付けながらアサシンに眼めを向ける。
「まあ、いい。ならば我々は、新たな舞台に身を移すとしよう」
「……？　何を……言っている……？」
　敵意を薄らせぬまま魔力を走らせ、纏まとう霧をより巨大な獣へと変じさせようとしたその瞬間──病院の中から、黒い煙のような『何か』が溢あふれ出だした。
「!?」
「これは……」
　驚くアサシンとシグマの前で、ジェスターは両手を広げながらその黒い煙を受け入れる。
「さあ、第二幕の始まりだ！　安心したまえ、君達が立つ舞台は、こんな殺伐とした場所ではない。平和そのもの、穏やかな風が吹く理想郷だ！」
　そのまま黒い煙に己の身を溶け込ませ──ただ、声だけを周囲に響かせる。
「その美しい景色を……君達が自らの手で穢けがし尽くすのを楽しみにしているよ」

　こちらの全身を舐なめ回すような声が全方位から響いたかと思った次の瞬間、高波のように押し寄せた『黒』の群が、アサシンとシグマを包み込み────

そして、舞台は暗転する。

ゆめのなか

　かぜがふく。
　　かぜがふく。

　びゅうびゅう、ごうごう、とろけてまざる。
　おほしさまも、たかいたかいびるも、ねぼけたまちのひとたちも。

　　　　　×　×

　少女はただ、夢の中でも眠り続ける。

　暗くなったから寝る、眠いから寝る。
　それこそが、少女の抱いたささやかな望み。
　だからこそ、なればこそ。

【□□□□□□□□□□】
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　【□□□□□□□□□□□□□□□□】

　彼女を守るものはただ、それを叶かなえる為ために動く。
　少女の安眠を妨げる、眩まばゆい光を眠らせる為ために。
　少女の救いを脅おびやかす、五月蝿うるさい風を止める為ために。

　　　　　×　×

●●●●●にて

声が。
微睡まどろむ『観測者』達の耳に、声が届き始める。

「貴様ごときが、我が恩おん讐しゅうを語るというのか」
それは果たして、誰の声か。
放たれるだけで場の空気が凍り、次の瞬間には惨劇が起こってもおかしくないような鋭く、それでいて怨えん嗟さの炎が揺らめいているかのような声。
『観測者』達は、続いて聞こえて来た声には覚えがあった。
「ああ、そうだ。こいつは取引だ。俺があんたの復ふく讐しゅうをアレンジして本にする。パリ中の人間に、世界中に、あんたという人間を語ってやる」
自分達に戦う力を与えたくれたサーヴァント──アレクサンドル・デュマの声だ。
音に続いて、視界がぼんやりと開けてくる。
『観測者』達の目に映ったのは、黒衣の男が、デュマの喉元に鋭いフォークを突きつけている光景だった。
それは一種の闘争だったのかもしれない。
武勇を馳はせた父親とは全く違う道を歩んだデュマ。だが、彼は今、眼前の『好敵手』を前にして、まさしく自分の命を懸けてその声を張り上げている。
「多かれ少なかれ恩おん讐しゅうなんざ誰でも抱く。ガキでも語れるもんだ。だが、お前さんの、エドモン・ダンテスの、巌窟王モンテクリスト伯の恩おん讐しゅうを語れるのは誰だ？　……俺だ、俺だけだよ復ふく讐しゅう者しゃ。弟に菓子を取られたガキの恨みと、人生を丸ごと全部奪われた手前の恨み、どこが違う？　もちろん違う！　だが、それを誰よりも劇的に語れるのはお前さんじゃあない。あんたは何万、何十万もの民衆の心に語りかける事ができるか？　俺は語れる！　その為ためにペンがある！　……いや、逆に言うとな、あんた

はもう、何百万、何千万の人間に語り終えたも同然だぜ！　書き記すのは確かに俺の筆だが、その俺にその生き様を見せつけたのは、他でもないお前さん自身なんだからよ！」
　フォークを突きつけられたままだというのに、途中で椅子から立ち上がり、まるで軍隊を前に演説する粗野な指揮官のような調子で朗々と語るデュマ。
「……」
　しばしの沈黙。
　黒衣の男は表情を消してデュマを見つめていたが、やがてフォークを下ろしながら呆あきれ気味に言葉を吐き出した。
「……見返りなど求めはせんが、取引というには随分と道理の通らぬ話だな」
「見返りならあるさ」
　肩を竦すくめ、ニイ、と口角を上げながらデュマは答えた。
「あんたを、人気者にしてやる」
　そして、両手を大きく広げながら、まるで将来の夢を語る子供のように目を輝かせ、黒衣の男に己の展望を語り始める。
「俺の小説の主人公が歩むのは、真っ赤に染まった血煙とどす黒い怨念が敷き詰められているくせに、『だからこそ美しい』と誰もが喝采する復ふく讐しゆうの道だ。この先１００年の間、『復ふく讐しゆう者しや』って単語を聞いたフランス中の人間が、あんたの事を思い出すようにしてやろう」
『観測者』達はようやく気付く。
　これはどうやら、デュマの交渉なのだと。
　目の前にいる黒衣の男は、恐らくはデュマの膨大な『作品』の中に出てくる何者かのモデルなのであろうという事を。
　複数存在していた『観測者』達の中で書に明るい者達は、その黒衣の男が何者であるのか理解していたが、それでも頭の中に『まさか、実在していたのか？』と疑問符を浮かべる事となった。
「あんたの復ふく讐しゆうは、そこで完成される。社会に冤えん罪ざ

いをかけられ、民衆から忘れられ、世界から捨てられたあんたの復ふく讐しゅうが、そこで初めて正しいと認められるのさ」
「正しさ……？　そんな物を、オレが求めているとでも？」
「お前さんはともかく……あんたに関わってきた人間達は救われるかもな」
　その言葉を聞き、黒衣の男は再び沈黙した後、ゆっくりと首を横に振った。
「好きにしろ」
「いいのか？」
「もはやエドモン・ダンテスなどという人間はいない。ここに居るのは、恩おん讐しゅうの彼方かなたに向かい堕おち続ける怨念だけだ」
　達観しつつも暗い炎を燃やし続けているかのような男の声。
　デュマはワイングラスを再びくゆらせ、少しだけ寂しげに言った。
「お前さんはエドモン・ダンテスを捨てるってんだな？」
「……元より、イフ城で消え去る筈はずだった男の名だ」
「あんたを包くるんだその外がい套とうは、まるで黒い炎だな。いつか身を焼く気か？　……いや、それとも……もう焼いた後か？　同じ黒でも、これが黒い鬱金香チユーリツプだったら民衆の心を掻かき立たてる見世物になる所だが、ただの消し炭になる前に、引き返すのも一つの手じゃあねえのか？」
『観測者』達は困惑した。
　自らが復ふく讐しゅうを肯定するような言葉を発していたデュマが、何故今さらに相手を引き留めるような言葉を吐き出すのかと。
「ああ、そうだ、あんたの進む先には、地獄しかない。あんたを包んでた黒い炎よりも、一ひと際きわ色濃い暗闇だ。救いはねえ。多くの人間って奴を見てきた俺が断言するぜ。九割がた、あんたはこっちに帰ってこれねえ。人並みの幸せなんてものを、あんたは自分で握り潰すハメになる。だけどな、ここで引き返せば、あんたは俺の書こうとしてる小説と同じ結末を迎えられるかもしれねえぞ？」
　まるで自分に小説を書かせるなとでも言いたげなデュマの言葉を聞

き──黒衣の復ふく讐しゅう者しゃは、なんとも愉快そうな笑みを浮かべながら、その兇きょう笑しょうを虚こ空くうに向ける。
「そうか……この先の地獄を、パリの王とも呼ばれた貴様が保証するというわけか」
「なんで笑ってんだよ」
「安あん堵どしたぞ。なればこそ、その道には足を進める価値がある」
　復ふく讐しゅう者しゃは自分自身さえ焼き尽くすような憤ふん怒ぬを滲にじませながら、続く言葉を口にした。
「救いなど要らぬ、慈悲など要らぬ！　無む垢くなる者まで我が憤ふん怒ぬに巻き込んだ報いを、他ならぬオレ自身が受けずしてどうして『復ふく讐しゅう』などと口にできるものか！」
　──私達は、何故ここにいる。
　──何故、この光景を見ている？
　そう『観測者』達は考えた。
　だが、同時に、その光景から目を背ける事もできなくなっていた。
　デュマと話している男が何者なのか、その正体が分からずとも、男の宿している魂の暗い炎だけは痛い程に伝わってくる。
　まるで、自分達はその炎に引き寄せられるかのようにこの空間に辿たどり着ついたとでも言うかのように。
　男の事情もデュマの事情も分からぬまま、『観測者』達は、ただ、自分達の心が黒衣の男に不思議と感化されつつある事を感じていた。
　黒衣の男は一度言葉を止めた後、改めてデュマの方に目を向けて再び口を開く。
「しかし……地獄を歩む者の行く末など、気にする事もあるまいに」
　クツクツと笑いながら、どこか愉たのしげに告げた。
「我が大敵どもの同類、金の亡もう者じゃであろうと見ていたが……存外に懇篤だな、小説家」
「……どうだっていいだろ？　金ならもう唸うなる程持ってるってだけだ」

唐突に言われ、困ったように頭を掻かくデュマ。
　そんなデュマに対して背を向けながら、黒衣の男は個室の裏口へと歩み始めた。
「どうあれ捨てた名に過ぎぬ。貴様が筆で救うと言うならば、やってみせろ」
「やってやるさ。そうだな……準備はいるが……、次に俺があんたと関係ない所で『モンテクリスト島』の名前を誰かから聞いたら、それが運命の合図って奴だろうよ。その時から書き始めるとするかね。新聞かどっかで連載してやるから、楽しみに待ってな」
「努ゆめ々ゆめ忘れぬ事だ。気に食わぬ結末ならば、貴様の寝床まで原稿と喉笛を喰くい破りに行くぞ」
　鋭い目つきの笑みと共に吐き出されたその脅しに、デュマは真っ向から皮肉を返す。
「ああ、儲もうけたらその金でセーヌ川のほとりに『モンテクリスト城』を建ててやるよ。あんたが俺を探す時、道に迷わねえようにな」
　皮肉に過ぎなかった筈はずの言葉が、後に実現する事になるとも知らぬまま。
「まあ、逆に気に入った結末ならその時は喝采しに来いよ？　できる事なら、モデルになったあんたが本当はどんな末路を辿たどったのか知っときてえしな」
「オレが貴様に述べる言葉は一つだけだ」
　黒衣の男は僅かに苦笑を浮かべ、デュマに背を向けたまま一つの言葉を投げかけた。

「待て、しかして希望せよ……とな」

　二人の会話を聞いていた『観測者』達は、その後の光景を見ることは叶かなわなかった。
　黒衣の男の言葉と同時に、意識をこの空間から離脱する結果となってしまったのだから。

ただ一つ──自分達は既に、デュマという英霊が体験した人生、その『物語』の一部として組み込まれてしまったのだという予感を覚えながら。

そして、『観測者』達の意識は光に包まれ──

×　×

朝日の中で

「……今、のは……？」
警官隊のまとめ役であるヴェラは、自分が病院の敷しき地ち内のベンチに横たわっている事に気付き、ゆっくりと身を起こす。
「ここは……どうして？」
すると、他の警官隊の面々も近くの地面に転がっており、示し合わせたかのようにその身を起こし始めている。
皆、口々に周囲を見回しながら、困惑した表情を浮かべている。
「ここは……？」
「あれ？　今、キャスターさんが……」
「キャスターの旦那と……黒い服の……」
そんな事を呟つぶやいている事から、ヴェラは、全員が同じ光景を見ていたのだと判断する。
「夢……？　それにしては、あまりにも……」
生々しく、現実的な光景。
ハッキリと会話の内容まで思い出せるそれは、まるで覚醒したまま、意識だけを別の時と空間に飛ばされていたかのようだった。
「ああ、ヴェラさん達も見たのか」
「……ジョン？」
ヴェラの背後から声をかけたのは、既に覚醒していたと思おぼしきジョンの姿だった。

その義手は半壊しており、既にヒュドラの毒の刃は失われている。
もっとも、義手が壊れた状態で刃が剝むき身みになっていれば危険極まりないので、ある意味では幸運だったかもしれないが。
「黒い服がどうこうって事は、キャスターの先生が、レストランで復ふく讐しゆう者しやと話している所か……まあ、あそこは俺も最初に見せられたからな……」
「最初に……？　ジョン、貴方あなたは何があったんですか？　どうしてあのような力を？」
冷静に尋ねるヴェラに、ジョンは困ったように首を傾かしげながら答える。
「ああ……俺も良く解わかってないんですけどね……。俺は、そこから始まって、多分10時間ぐらいかな……色んな『英えい雄ゆう譚たん』を見せられましたよ。それこそ三銃士みたいな馬鹿強い銃士達に、革命の英雄ガリバルディ。変わり処どころだと、パリで出会った物もの凄すごい作家達の会合まで見せられましたけど……ああ、あの作家達も、確かに英雄だったのかもしれない……」
困惑しながら言葉を紡つむぐジョンだが、ヴェラはその言葉の中にあった一部に反応し、首を傾かしげる。
「10時間……？」
「ええ、おかしな話ですけどね。目が醒さめたら、まだ俺の上から病院の天井の埃ほこりが落ちてきてる所でした。数分も経たってなかったんじゃないかな……。ただ一つ確かなのは、キャスターの先生が、俺に力をくれたんだろうな……ってことは解わかります」
「キャスターが……？　もしかして、地下から出て来たのですか？　彼もここに？」
「ここっていうか……そもそも、ここが何処どこっていうか……」
ジョンはそこで言葉を濁し、大通りに続く病院の正門を見ながら言った。
「俺は教会の前で目が醒さめたんですけど……まあ、見てきて下さいよ。俺じゃ説明がつけられないんで……」

「？」

　ジョンに促されるまま、ヴェラは他に意識を覚醒させていた数名の警官を連れて、病院の敷しき地ちから出たのだが──
　そこには破壊の跡はなく、傷一つ無い大通りの中を小鳥が飛び交っている景色があった。
　屋根が半壊していた筈はずの教会も完全に復元されているが、復元、というより、破壊そのものが行われた痕跡すら認められなかった。
　まるで、昨日の英霊同士の戦いの破壊そのものが幻であったとでも言うかのように。
　困惑しているヴェラ達の後ろで、やや憔しよう悴すいした目をしているジョンが、半分独り言のように彼女達に問い掛けた。
「意識を失う前の戦いが嘘うそじゃないとしたら……ここって、いったい何処どこなんですかね……？」

×　×

スノーフィールド　コールズマン特殊矯正センター

「消えた、としか言いようがありませんね」
　表向きは、当時のアメリカでは一般的である民営の刑務所という形を取っている施設。
　その奥にある特殊監視設備の中で、ファルデウスは小さな溜ため息いきを吐き出した。
　報告書に目を通した彼は、その場に居た多くの関係者達がその姿を消している事について考察をする。
　報告書にあるのは、警察署の人間達が病院を取り囲んでいた事。
　そして、事前に病院に対して警察署の人間から電話でコンタクトが取られた事が解わかっている。

連絡が取られた主治医が担当していた患者の名を見て、ファルデウスは首を左右に振った。
「繰くる丘おか椿つばき……。繰くる丘おかめ、まさか入院中の娘をマスターに仕立て上げるとは」
　ファルデウスは、今回の偽りの聖杯戦争に協力的であった魔術師、繰くる丘おか夫妻の動向が不自然であった事に疑念を抱いていたが、昨晩の騒動により大まかな事情は把握していた。
「偶発的に令呪が出たのか、それとも意図的なものかは解わかりませんが……なるほど、娘に魔力供給をさせて自分達は安全な所からサーヴァントに指示を出す……。小こ賢ざかしいですが、まあそれもありでしょう。冬ふゆ木きの聖杯戦争でも、かの高名な君主殿ロードが婚約者を魔力の供給源にしていたと聞き及んでいますし」
「その、繰くる丘おか椿つばきのサーヴァントが何かをしたと？」
　ファルデウスの副官である女性──アルドラの言葉に、ファルデウスは軽く頷うなずく。
「認識阻害の魔術が使われた形跡もなく、幻術の類がかけられた様子もないとフランチェスカさんから御お墨すみ付つきを頂きましたよ。もっとも、彼女はこの状況を楽しんでいるようでしたが」
「だとすると、僅かな時間の間に三十人以上の人間が大通りから消失した事になります。霊体化して身を潜めているというのでもなければ、サーヴァントもその対象です」
　事務的な調子で淡々と告げるアルドラに、ファルデウスは改めて報告書のリストに眼めを通す。
「警官隊の他に姿を消したのは、フラット・エスカルドスと、教会に居た監督役を名乗るハンザ・セルバンテスとその部下と思おぼしき四人のシスター。……表向きは通常の神父ですが、オーランド署長からの報告とこちらの監視網に映った戦闘記録を見るに、代行者でしょうね。しかもかなり腕うで利ききの部類だ」
　そして、一度眉を顰ひそめてから、残る面子メンツについて口にする。

「あとは……シグマに、彼と同行していたセイバーのマスター……」
　映像記録などに映る眼鏡を掛けた金髪の女性を見て、ファルデウスは考え込む。
「彼女が何者なのかは気に掛かりますが……魔術師という風にも見えませんね。可能性は捨てきれませんが、やはり繰くる丘おか椿つばきのサーヴァントが何かしたと見るべきでしょうね」
　実質的にこちら側の人間であるシグマとも連絡が取れなくなっており、同行していたと思おぼしきアサシンとセイバーも今朝から確認できていない。
『呼び水』として召喚されたアサシンはともかく、セイバーは消滅すれば聖杯にその霊基と魔力が注がれる筈はずだ。
　その様子が無いという事は、少なくともセイバーは生存している可能性が高い。
　ならば、彼らはいったいどこに消えたのか？
　それをじっくりと考えたい所だったが、ファルデウスはそれよりも先に纏まとめなければならない案件についてアルドラに告げた。
「大通りの破壊は、先日の砂漠のパイプラインの事故の影響で、連鎖的に地中のガス管が破裂した……という事にしましょう。些いささかガス会社が憐あわれですが……まあ、どのみち使い潰す為ために作った会社です。何も知らない末端の社員には同情しますが、そこは『普通の』政治家の方々が組み上げる社会保障にお任せするとしましょう」
　他人ひと事ごとのように言いながら、ファルデウスはまた別の案件について頭を巡らせる。
　──さて。
　──そろそろ、私のサーヴァントの動きも摑つかまなければ。
　──最悪、令呪を使ってでも呼び戻す必要が……。
　そんな事を考えながら作業に戻ろうとした瞬間──
　彼は、自らの中を巡る魔力に、ほんの僅かなゆらぎを感じ取る。
「……」

己の身体からだの内部が僅かに薄暗くなるかのような、通常の五感とは異なる奇妙な感覚。
　それが『合図』であると直感で理解したファルデウスは、アルドラに後の処理を任せて観測室を後にした。

　そして、同施設内にある自らの『工房』へと足を踏み入れ、その扉を閉じる事で外部からのあらゆる電波や魔力を遮断した事を確認してから、口を開く。
「……どういう事なのか、お伺いをしても？」
「何を問う？　契約者よ」
　喜怒哀楽といった感情が何一つ込められておらず、それ故に逆に底冷えするような恐ろしさを感じる声が、ファルデウスの背後から響く。
　先祖代々から受け継いできた、工房内の人形達。
　その一つ一つから声が響いているかのような錯覚を覚えつつ、ファルデウスはマスターとして凜りんとした調子でその言葉を吐き出した。
「無論、私が貴方あなたに命じた事についてですよ、アサシン。……いえ、ハサン・サッバーハ」
　敢あえて、その名を口にした。
『呼び水』である狂信者の少女とは違う、ファルデウスが召喚した『真なるアサシン』とでも言うべき存在である、自らのサーヴァントに対して。
「私が貴方あなたに命じたのは、スクラディオ・ファミリーの首領である、ガルヴァロッソ・スクラディオの暗殺です。ですが、どうやら妙な事になっているようですが？」
　その指示を出してから１日の間に、アメリカ合衆国の一部は混乱に陥った。
　経済界やマスコミ、政界や外交に通じる重要人物が、この１日の間に三十五人も事故や病気で身み罷まかっている。それも、病死の場合

は長年の闘病の末などではなく、脳梗塞や心筋梗塞など突発的なものが大半だ。
「ガルヴァロッソの死亡報告こそまだ入っていませんが……彼の所在地と思おぼしき場所から順に死者が出ています。関係を疑うな、という方が無理筋ですよ」
　冷や汗を背と手の平に忍ばせつつ、ファルデウスは強気に言う。
　これが、何かしら彼なりの考えで殺さつ戮りくを繰り返したのだとすれば、令呪を用いてでもその行動を制御しなければならない。
　だが、相手が自らの消滅をも厭いとわないタイプだとするならば、令呪を発動させる前にこちらを始末する事は充分に可能であろう。
　覚悟を決め、令呪を発動させる為ための意識と魔力を整えながら問い掛けたファルデウスだったが――
　一方の『影ハサン』は、ただ淡々とそれに答えを返す。
「取り決めは何一つ違えられてはいない。お前の信念が断つと決めた命脈を、微睡まどろみの裏側に帰したまで」
　意志を持たぬ影がそのまま喋しやべっているかのような、ただ、ただ、無機質な声。
「尊し大たい嶽ごくの陰を歩みし身として誓おう。彼の者達、ガルヴァロッソ・スクラディオの命脈は確かに閉じられた……と」
「……彼の者……『達』？」
　訝いぶかしむように眉を顰ひそめた後、ハッと顔を上げるファルデウス。
「まさか……ッ！」
「然り」
　ファルデウスの疑念を明かす形で、彼の背後に立つ『暗闇』は、粛々と一つの事実を告げた。
「ガルヴァロッソ・スクラディオは、既に『人』を蝕むしばんでいた。それだけの事に過ぎぬ」

×　×

１日前　アメリカ某所　スクラディオ邸

　スクラディオ・ファミリー。
　裏社会のみならず、経済界にも大きな影響を与えている全米でも指折りの暴力組織だ。
　犯罪カルテルへの締め付けが厳しくなった昨今においても、なお強力な地盤を持ち続けているのには理由がある。
　それは、故あって時計塔や東洋の魔術組織を追われた魔術師、あるいは生来のはぐれであった魔術使い達の囲い込みを行い、潤沢な資金でその活動を保護していたからだ。
　見返りとして魔術を提供するが、決してそれは強制ではなく、魔術師や魔術使い達も、『絶好のパトロン』、あるいは『敵対組織からの庇ひ護ご者』を失わぬ為ために、自おのずとスクラディオ・ファミリーへの守護に力を貸す状態だ。
　南米の麻薬カルテルとも強固なパイプを持っているが、その『ドラッグ』が市場に出回る事はない。様々な形で改良された特殊なドラッグは、ファミリーお抱えの魔術使い達が行使する特殊な魔術触媒、あるいは秘薬の素材として用いられている。
　時計塔としては『潰せるチャンスがあれば潰すが、現状では潰した後のアメリカという国家との敵対や、ファミリー所属の魔術使い達が解き放たれるマイナスの方が大きい』という理由で半分放置されている形となっていた。

　そんな社会の表裏、そして魔術世界にまで手を伸ばした強大な組織のトップは今──
　広い屋や敷しきの最さい奥おうにおいて、呼吸器と無数の管を身体からだに付けた状態で、巨大なベッドの上で敷しき物もののように横たわっていた。
　誰が見ても『命が尽きるまで、あと数年も持つまい』という状態で

ありながら、彼は呼吸器の下で微笑ほほえみを浮かべ、ベッドの傍かたわらに立つ幼い少女に大きな狐きつねのぬいぐるみを手渡している。
「ありがとう！　ひいひいおじいさま！　わたし、一生大事にします！」
「ああ……オリヴィア。一生大事にする必要はないさ。もっと大事なものができた時には、私の事など忘れてしまえばいい」
　まだ５歳か６歳という年頃の少女に対し、しわがれてはいるが、まだ力が失われていない声で語りかける寝た切りの老人。
　彼の名はガルヴァロッソ・スクラディオ。
　偽名ではあるが、世界に刻みつけられたその名こそが彼の全てと言っても良いだろう。
　公式な年齢は１０９歳であるが、実際はその年齢を上回っているとも言われており、様々な手練手管を用いて延命を続けているスクラディオ・ファミリーの首領である男だ。
　その『手練手管』の大半は、表沙汰にはできぬ魔術的なものなのだが、それでも彼自身が魔術師ではない為ためか、肉体と精神の崩壊の保存を続けるには限界がある。
　真しんに高位に到いたった魔術師であれば、自らを吸血種など『人ならざるもの』に変える事も可能だが、少なくとも、他人――しかも、ただの人間であるガルヴァロッソをリスク無しでそうしたものへと昇華させられる魔術師は、ファミリーには一人も存在していなかった。
「なあ、オリヴィア」
「なあに？　ひいひいおじいさま」
　四十三人いる玄孫やしゃごの中で一番歳とし若い存在である少女に、ガルヴァロッソは微笑ほほえみながら言った。
「お前は、80年前に死んだ私の妻にソックリだな……もう少し、顔をよく見せておくれ」
「おかしなおじいさま、まるでもうすぐいなくなっちゃうみたい」
　無邪気に言う少女の言葉に、彼女を連れて来た護衛達は僅かに目を

逸そらした。
　恐らく、ガルヴァロッソの寿命が長くないという事を知っているのだろう。
　だが、当の老ろう爺や本人はそんな弱みを微み塵じんも見せぬまま、玄孫やしやごの話を微笑ほほえみながら聞き続けた。

　その後、幾ばくかの会話を交わした後、少女と護衛達は部屋を出る。
　中には寝た切りのガルヴァロッソだけが取り残され、呼吸器の僅かな音だけが響き続けた。
　護衛の一人もいないとはいえ、スクラディオ・ファミリーの本拠地の最さい奥おうにあるこの部屋は、魔術的な『要塞』であった。
　玄孫やしやごを連れて来た護衛達の一人が腕うで利ききの魔術師であり、彼の案内が無ければこの部屋に向かう廊下を認識する事すら叶かなわない。
　数多く存在するスクラディオ・ファミリーの中でも、特に選えりすぐりの魔術師達が渾こん身しんの力を籠めて作った巨大な複合魔術工房──それこそが、このスクラディオ家の本宅なのだ。
　35層に渡る強力な結界と、内部に敷かれたいくつもの防衛機構や数多あまたの悪あく霊りよう。
　かつてとある魔術師の工房が建築物ごと爆破されたという例に鑑かんがみ、上空からの飛来物や地下深くからの地盤破壊にまで対応できるシステムが造り上げられていた。
　これを超える魔術的防御を固めるならば、もはや魔術師達の総本山たる時計塔や彷ほう徨こう海かい、あるいは根源に近づくレベルの強大な魔術師が生涯を懸けて造り上げる迷宮や魔境といったものに倣ならう必要が出てくるだろう。
　最も強固な結界の中心におり、殺気どころか蟲むしの気配一つない空間。
　自らの寿命以外には何一つ脅威の無い状態であるにも関わらず──

ガルヴァロッソはおもむろに自らの呼吸器を外し、虚こ空くうを見つめながら口を開いた。

「……いるんだろう？　終わりを告げる暗闇よ」

虚こ空くうからの答えは無かった。
だが、それにも構わず、ガルヴァロッソは独り言のように語り続ける。
「……ああ、解わかっていた。解わかっていたさ……もう、何年も前からな」
呼吸器無しでは息をするのも辛つらい筈はずなのだが、それにも関わらずガルヴァロッソは長々と自らの言葉を吐き出した。
「オークションで手に入れた、俺の私財を注つぎ込こんで移植したこの魔ま眼がん……相性が悪かったか、それとも良すぎたのか……繰り返し……繰り返し……一つの未来しか映さなかったよ」
僅かに左右で色合いの違う目に自嘲気味な笑みを浮かべながら、男は尚なおも虚こ空くうに話し掛ける。
「今日という、俺が死ぬ日の光景をな……」
それでも、虚こ空くうは何も答えなかった。
だが、相手が『聞いている』と確信している調子で、ガルヴァロッソはどこか安あん堵どしたような表情を浮かべる。
「今日がその日だというのは……解わかっていた……オリヴィアが、狐きつねのぬいぐるみを俺にねだった時からな」
ガルヴァロッソの目に移植された『魔ま眼がん』。
とある列車でのオークションにおいて移植されたその魔ま眼がんは、確かにガルヴァロッソに未来を見せた。
今、自分の定位置となっている場所で行われる未来を。
玄孫に狐きつねのぬいぐるみをプレゼントした後に、『暗闇』によって目を閉ざされるその光景を。
「簡単な話だ。一族の末娘に……オリヴィアにぬいぐるみを渡さなけ

れば良い、それだけで運命は変わるかもしれない。そう考えていたが……これが歳としを取るって事か……オリヴィアの泣いたり拗すねたりする顔を見るぐらいなら、素直に死んだ方が……マシだと思っちまったのさ」
　誰もいない筈はずの空間で、静寂と語らうガルヴァロッソ。
　かつて対立組織を恐怖のどん底に落としてきた冷淡な首領の姿は無く、一人の死にゆく男として、目に見えぬ何かに己の言葉を伝え続けた。
「笑い話だろう、これまでいくつもの組織を潰して、何人も何人も殺してのし上がってきたこの俺が……。ああ、俺に死を運んできた暗闇よう……、もし本当にそこに居るのなら、どうか聞いてくれ……。俺は……終わるが、このままでは終わらん……いや、終われない……」
　呼吸器を外したせいか、段々と酸素が薄くなってきたかのように顔色を青くしていく。
　だが、それでも語りきらねばならぬ事があるとばかりに、虚こ空くうに手を伸ばしながら言葉を紡つむぎ続けた。
「俺の延命を望む魔術師達は……もはや俺が俺でなくとも良いいと……。バズディロットは反対していたが……。他の魔術師は……この国の有力者どもの魂を殺し……人格を……上書き。この国を……魔術師の楽土にすると……。馬鹿な事を……。止めてくれ……。俺を……終わらせてくれ……。俺はただ……魔法……魔術を使ってみたかっただけ……」
　もはや途中から言葉は断片となり、文章の形を成さなくなり始める。
　だが、それは最後に自分という存在を世界に刻み込まんとばかりに、呪じゆ詛そにも近い言葉となって部屋の中に焼き付けられた。
「ああ、ああ、俺が初めて惚ほれた女が、妻が、魔術師だった……。魔術回路も殆ほとんどない……素人しろうと同然の……。時計塔の奴に、殺され……。魔術……ああ、魔術……。魔法……。ずっと憧れてた……ガキみたいに……自分でも魔術を……彼女のように……使いた

いと……。妻と同じ世界を……景色を……見たいと……それだけ
の　為ために　　俺　は　　組織　を　　力　を　　手　に　　あ
あ　あぁああ　　あぁぁ　　ぁ　　ああ　ぁ」
　まるで罪滅ぼしのように、断片的に己の過去を語り続けるガルヴァロッソ。
　言葉の羅列と共に、その目に感情の揺らぎが起こる。
　そして、ついにその心が死への恐怖に折れかけた瞬間──
　虚空から伸びた暗闇が、その目をそっと優しく覆い隠した。

『それ』は、確かに存在していたのだ。
　至高の物ではないとはいえ、それに準ずるレベルの結界と防衛機構を備えた巨大な魔術工房の中心部で、それらのシステムを何一つ反応させる事なく入り込んだ死の御み使つかいが。

「怖おそれる事はない」

　部屋全体から響き渉わたるような、それでいてガルヴァロッソだけに聞こえるような不思議な声。単純な言葉だったが、それ故に、混迷に陥っていた感情の中に速やかに響き渉わたった。
「……ああ、良いいのか？　俺が、私のような男が……」
　もはや何も映さぬ『魔ま眼がん』から涙を流しながら言う男に、暗闇はただ、慈愛のある暗闇で男の命を包み込む。

「裁く理ことわりは我に非あらず、汝なんじに非あらず。ただ全てを夜に委ねよ」

　いつの間にか人の形を取っていた暗闇が、男の頭に手を置きながら淡々と声を響かせた。

「微睡まどろみの向こう側で、安らかに目覚めるがいい」

そして、何時いつしか暗闇は部屋から消きえ失うせており、後にはただ、どこか安あん堵どしたような表情で目を閉じ、もう呼吸を必要としなくなった一人の老人が残されるのみ。
魔術に憧れた。
そんな子供じみた理由で魔術社会とアメリカの裏側を歩き続けた男としては、あまりにも穏やかな末路であったと言えるかもしれない。

× ×

現在　スノーフィールド　食肉工場

巨大な機械仕じ掛かけの英霊とアルケイデスの戦いにより、壊滅状態にあった食肉工場。
だが、フランソワ・プレラーティの宝具により見かけ上は復元されている。
その歪いびつな状態となった空間の中で、アルケイデスのマスターである魔術師━バズディロット・コーデリオンは『元から壊れなかった要素』を寄せ集め、食肉工場の中に簡易的な工房を再建していた。
そこに置いた魔術による通信機で何処どこかと連絡を取っているバズディロットの姿を遠巻きに見ながら、部下であるスクラディオ・ファミリーの魔術師達がささめき合う。
「なあ……バズディロットさん、いつ寝てるんだ？」
「知らないのか？　あの人は特別だ。１日に数秒寝れば問題なく活動できるらしい」
「……本当かよ。そりゃ、魔術で何日かだけってんなら解わかるが……」
「それだけじゃねえ。食事だって最低限だ。雪山の奥に工房を構えた

敵対中の魔術使いを、30日飲まず食わずのまま追い詰めて始末した事もあるって噂うわさだぜ？」
　小声でそう言う魔術師達は、怖おそれの籠もった目で作業中の上司に目を向けた。
「あの人が味方で良かったな……。あんなおっかねえ英霊だかいうのを前にして、一歩も引いちゃいねえんだしよ」
「ああ、他の連中がどんな魔術師かは知らねえが、あの人が負ける所なんか想像もつかねえ」
　彼らは魔術師、魔術使いの中でもはぐれに近く、ファミリーの中での地位もさほど高いわけではない。
　だが、そうした面々とは違い、落ち着き払った壮年の男の声が工場内に静かに響く。
「いや……バズディロットさんは、別に無敵ってわけじゃあねえ。本人も隠しちゃいねえが、何度か土を付けられた事はある」
　その男は、バズディロットの部下としては一番の古株である男だった。
　敵対魔術師に入れ替わられていた部下の代わりに補充としてやって来た、スクラディオ・ファミリーの中でもかなり上位に位置づけされる魔術師だが──それでも、バズディロットと較くらべると大分見劣りする位置にいる。
　そんなベテランの魔術使いが、バズディロットについて若手の身内に語り出した。
「聖堂教会の代行者相手に死にかけた事もあるし、獅し子し劫ごうってフリーランスに出し抜かれた事もある。ダー・ファミリアのマガロには肺を片方抉えぐられ、僧侶デグラには魔術回路の大半を焼かれた。マーヴル商会の伍ウーとかいう奴とは痛み分けだったか……。そもそも、うちのファミリーに来る前だが、シュポンハイム修道院だかいう時計塔側でも名うての組織と敵対した時にゃ、流石さすがに死ぬ覚悟をしたって話だ」
「そ、そうなんですか？」

「あの人の恐ろしい所はな、それでも欠片かけら足りとも心が折れた事はねえって所だ。内臓を腐らされようと、目の前に恋人の首を転がされようと、眉一つ動かさねえ。その首を転がした奴は……動揺した隙に魔術を掛けようとしたんだろうが、当てが外れただろうな」
　煙草たばこに火を付けながら淡々という魔術師に、周囲の部下はゴクリと息を呑のみ込こみながら問い掛けた。
「……その魔術師、どうなったんだ？」
「同じだよ。他の連中と同じように、あの機械に突っ込まれて、魔力結晶にされただけだ。まあ、他の奴よりも惨みじめったらしく泣き喚わめいちゃいたがね」
　男の視線の先には、アトラム・ガリアスタという魔術師が開発した、人間の生命力そのものを魔力結晶へと変化させる巨大な機器が置かれている。先日の巨大な英霊との戦いで破損し、現在は稼か働どうできない状態だ。
　とはいえ、聖杯戦争の期間中にアルケイデスに全力を出させるには充分な結晶の備蓄はあるので問題はないのだが。
「まあ、あの人は自分の命も家族もガルヴァロッソ・スクラディオの大旦那に捧ささげてるからな……あの人が泣いたり叫んだりしてるのなんざ、見た事が……」
　淡々と告げる男だったが──ふと、そこで言葉を止めた。
　工房で通信作業を行っていたバズディロットがいつの間にか席を外し、食肉工場の奥の倉庫に向かって歩き出したからだ。
「バズディロットさん……どうしたんだ？」
　倉庫などに何の用であろうかと首を傾かしげるが、特に何か指示されたわけではないので、そのまま待機する部下の魔術師達。
　すると、少しの間を置き──
　大きく開かれた倉庫の扉から、バズディロットが姿を現した。
　そして、その姿を見て、部下の魔術師達はギョッと目を見開いた。
　彼がその右手に、とある楽器を携えていたからだ。
　無論、ただの楽器ならばそこまでは驚かない。

いや、人の皮で出来た三味線だとしても、そこまでは驚かなかったであろう。
　問題なのは、その楽器の種類である。
　バズディロットが掴つかんでいたのは━━彼の身体からだよりも巨大なグランドピアノだった。
「……」
　理解が追いつかず、魔術師達の間に沈黙が走る。
　□□？
　━━あ、いや……ピアノ？　……え？
　一見すると引ひき摺ずっているように見えたその黒い塊は、確かに片手の腕力だけで床から持ち上げられていた。
　強化魔術か、あるいは支配系の魔術で自らの身体からだを弄いじった結果だろうか。
　バズディロットの体格に見合わぬ、人間離れした剛力を『ピアノを運ぶ』という奇妙な行動に用いている状況についていけず、魔術師達は状況を把握すればするほど混乱を深めた。
　彼はそのまま歩を進め、工場の形式を整える為ために拵こしらえられた巨大冷凍庫へと歩を進めていく。
「バ、バズディロットさん!?　どうしたんですか!?　その、あの、ピアノ……」
　ピアノが、何故か倉庫に置かれているのは知っていた。
　確かにバズディロットの特技の一つにピアノがある事は知っていたが、何故このような場所に持ち込んでいるのかは誰もが首を傾かしげていた。
　そもそも冷凍庫にピアノを持ち込むなど、寿命を著しく縮める行為としか思えない。
　調律師やピアニストが見たら卒倒するのではなかろうか。
　……などという、些いささかずれた心配をする程に混乱していた魔術師達。
　あれはピアノに見せかけた何かしらの魔術礼装なのではないかと考

えた所で、バズディロットが無表情のまま口を開いた。

「Ｍｒ．スクラディオ……。首領ドン・ガルヴァロッソが、身み罷まかられたそうだ」

「――……え？」
　今度こそ、魔術師達の脳髄を流れる時が停止する。
　思考が追いつかぬままの魔術師達を置き去りに、バズディロットは冷凍庫の扉を開き、解体された牛の肉が樹林のように並び吊つるされている空間の中へと消えて行った。

　扉が閉まり、冷凍庫の中が暗闇に閉ざされる。
　その中央に漆黒のグランドピアノを置いた事により、赤身と脂肪が入り交じった赤白い世界の中に、異物である『黒』が浸しん蝕しよくする。
　まるで一つの芸術作品のように、不気味な調和が取られたテニスコート大の冷凍貯蔵庫。
　その中央で、鍵盤の上に無表情のまま指を置き、静止するバズディロット。
　顔の周りに白い吐息が漏れる事もなく、呼吸すら止めている様子だった。
　沈黙と静寂が合わさり、凍いてついた空気が鋭さを増して魔術師の肌へと突き刺さる。
　時間ごと凍り付いたのではないかという静止が、実に一分ほど続いた後―
　バズディロットは呼吸を止めたまま、軽やかに指を滑らせ始めた。

「なあ、首領ドンが死んだって、どういう……」

「待て」
　不安げに外で待っていた面々の一人が、静かにしろとジェスチャーをし、耳を澄ます。
　すると──冷凍庫の扉の奥から、軽やかなピアノの旋律が聞こえて来たではないか。
　美しくも儚はかないそのメロディは、困惑していた男達の心を清流の水面のように落ち着かせる。
「……レクイエム……『涙の日ラクリモーサ』……か？」
　古株の男が、そう呟つぶやいた。
　ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。偉大なる作曲家が晩年に手がけ、死後に弟子に引き継がれる形で完成した壮大な『鎮魂歌』。
　その中の一編である『ラクリモーサ』の旋律。
　悲しみを湛たたえながらも慈愛に満ちたピアノの響きに心を囚とらわれた者達は、そこで初めて、『ガルヴァロッソ・スクラディオが死んだ』というバズディロットの言葉の意味を受け入れた。
　受け入れざるを得なかった。
「バズディロットさん……首領ドンの為ために……」
　下したっ端ぱの構成員の一人は、涙目になって冷凍庫の奥から漏れ聞こえるその演奏を聞き続けた。
　ガルヴァロッソがもう長くないだろうという話は聞いていたが、いつその訃報を聞いてもレクイエムが弾ひけるよう、彼はピアノをスノーフィールドに持ち込んでいたのだろう。
　その覚悟と、顔色一つ変えぬままに首領ドンへの弔意を示したバズディロットへの敬意を胸に刻みながら、ただ、ただ、男達はその演奏を己の魂に受け入れ続けた。
　他の人間が見たならば「いや、とはいえ持ってくるだろうか？　ピアノを？」と首を傾かしげる光景であろうが、バズディロットの部下達は今さらそのような事は気にしない。
　バズディロットという自分達の上司は、何もかも規格外の男なのだ

と改めて納得するのみだ。
　―しかし。
　―何故、わざわざ冷凍庫の中で弾いているのだろう？
　そんな疑問が改めて頭に浮かんだ所で、演奏が終わりを迎える。

　更に暫しばしの沈黙を経て、冷凍庫の大扉が開かれた。
「バズディロットさん！」
　何人かが駆け寄り、詳しい話を聞こうとしたのだが―
「首領ドンが亡くなられたって、いったい何時……」
　そこで、言葉を止める。
　言葉だけではない。
　男達の時間が凍り付き、それ以上何も言い出せぬまま固まった。
　とても、今のバズディロットに声をかけられる状況ではない。
　彼の顔そのものは、いつもの機械じみた殺意に満ちた無表情のままだ。
　ただ、それとは裏腹に―巨大な冷凍庫の中が、赤黒い地獄と化していたのだから。

　赤と黒。
　まさしく冷凍庫の内部は、その二色によって支配されていた。
　吊つるされていた筈はずの数十頭分の牛の肉塊は、全てフックから弾はじけ飛んでいる。
　ある肉塊は壁に叩たたきつけられて赤い敷しき皮がわのようになっており、別の肉塊は骨ごと挽ひき肉にくのように粉々になって床に散乱している。
　ところどころで砕けた肉片が赤い血ち溜だまりのように腐り溶けており、違う場所では肉片が完全に炭化するまで焼き焦がされていた。
　そうした肉と肉の間には赤黒い泥のようなものが蠢うごめいており、まるで破壊された肉塊を、食材としてではなく、『牛の死骸』として喰くらい漁あさっているかのように見える。

「ひッ」
　部下の一人が腰を抜かす。
　彼らとて魔術師あるいは魔術使いの端くれだ。
　見た目だけならば、怖おそれる事はなかっただろう。
　だが、子供が癇かん癪しやくを起こして力任せに殺意と敵意を混ぜ合わせたかのような、部屋から漏れ出るデタラメで底なしの魔力に当てられて思わず悲鳴を上げてしまったのだ。
　彼らは、純粋に恐ろしかったのだ。
　自分達の上司である、バズディロット・コーデリオンという男が。
　あれほどまでに美しい旋律を奏かなでながら、このような惨禍に等しい魔力の暴走を起こし──尚なおかつ、それを部屋の中のみで完結させていたという理性的な異常性が。
　へたへたと座り込んだ部下の一人をチラリと見た後、バズディロットは部屋に入る前と変わらぬ無表情のまま、冷凍貯蔵庫の中を振り返った。
「……ピアノが、汚れてしまったな」
　牛の肉片が僅かに跳ね、脚の部分についている。
　赤黒い『泥』はピアノを綺き麗れいに避けており、まるでその部分だけ結界が張られているかのようにも見えた。
　次の瞬間──そのピアノが泥の海に一瞬で沈み、完全にその姿が消え去った。
　バズディロットはそのまま冷凍庫の扉を閉め、何事も無かったかのように自分の工房の中心部へと歩を進める。

　すると、未いまだに竦すくんで動けぬ彼の部下達の代わりに、これまで霊体化していたサーヴァントが顕現して口を開いた。
「些いささか、意外だな」
「……なんの話だ？」
「楽奏を嗜たしなむ輩やからだったか」
　バズディロットの感情については一切触れず、ただ単に、『ピアノ

を奏かなでるのが意外だった』と口にするアルケイデス。
　そんな復ふく讐しゆう者しやに対し、バズディロットはただ淡々と言葉のみを返した。
「精神の調整の為ために修練に取り入れた事がある。……Ｍｒ．スクラディオがたまたまそれを聞き、気に入って下さっただけの事だ」
　僅かに間を置き、ピアノを今弾いた理由も並べて口にする。
「もしもの時は……鎮魂歌を弾くと約束していたのでな」
　バズディロットはアルケイデスに向き直ると、逆に問いを返した。
「肉体的な損傷は回復したようだな。夕べは、随分と痛めつけられたようだが」
「問題はない。あの状態からライダー……アマゾネスの女王の追撃が来たのは多少厄介だったがな」

　アルケイデスは、昨日の大通りの戦いに参加しながら、現在その姿を消すことなくスノーフィールドに残っている数少ない存在の一人である。
　夕べ、病院から溢あふれ出でた『黒い煙』がその身を覆い尽くそうとした瞬間──アルケイデスは自らの宝具『十二の栄光キングス・オーダー』の力の一つ、『ディオメデスの妖馬』を四頭召喚し、三頭を黒い煙への囮おとりとして残る一頭で駆け抜けることで現場から脱出に成功したのだ。
　だが、そのタイミングを狙って現れたライダー──アマゾネスの女王、ヒッポリュテの襲撃を受け、手傷を負った形となる。
　現在のアルケイデスからはその際の損傷も、ヒュドラダガーで抉えぐられた脇腹の傷も綺き麗れいに消きえ失うせていた。
　バーサーカーから奪った『悪魔』の力も現在は身の内に収めており、一見すると、召喚し、変質させた直後のアルケイデスと何も変わった様子はない。
　だが──バズディロットは、ただ淡々とサーヴァントの裏側にある事実を問い掛ける。

「あと、何日持つ？」

　すると、アルケイデスも存外にあっさりと答えを返した。

「正気を保てるのは、あと３日から４日と言う所だろう」

「そうか、これで偽にせ物もの連中への優位は消えたな。……いや、狂気に取り込まれるだけで消滅はしない事を考えれば、まだこちらが有利か」
　アルケイデスは、確かにヒュドラの毒を受けた。
　そして、悪お泥でいを持ってそれを逆に喰くらい、肉体の崩壊を防いだ形となる。
　だが──自らを死に至らしめ、間接的に三番目の妻をも自死に追いやったその『死毒』は、確かに彼の身体からだの中に取り込まれていたのだ。
　それでも肉体が蝕むしばまれていないのは、やはり『十二の栄光キングス・オーダー』の力が影響している。
　引き出した力は、『エリュマントスの猪いのしし』を手に入れる際に奪い取った力。
　だが、猪いのししそのものの力ではない。
　その行軍の最中に奪い取り、ねじ伏せた最大の物は猪いのししなどではないからだ。
　アルケイデスが生前の難行の中で、恩師であるケイローンから奪い取ったもの。
　それは、彼が持ち合わせていた『不死性』に他ならない。
　不死の力を与えられていたケンタウロスであるケイローンは、アルケイデスの誤射により、ヒュドラの毒にその身を蝕むしばまれる事となった。
　そのあまりの激痛、苦痛に耐えかね、ケイローンは己の不死性をプ

ロメテウスに譲り渡して命を落とす結果となる。
　故に、アルケイデスは本来の霊基が持ち合わせていた十二の代替の命を失っているものの、『プロメテウスに譲渡するまでの間の不死性』を宝具の一つ、たった一つの代替寿命として己の身に宿していた。
　だが、それを発動させる事は、ケイローンが味わった苦痛をその身に宿す事に他ならない。
　現在も絶え間ない苦痛が──それこそ、生前の己すら死を選んだ苦痛がその身を焦がし続けるが、『泥』の影響でその痛み、苦しみをこそ力に変えて相そう殺さいしているような状態だ。
「後悔しているのか？　師を殺した事を」
「……復ふく讐しゆうに身を委ねた我が心情に従うのならば、あの時に『不死』などという神の悪あしき呪いから師を解き放つ事ができた事を、素直に喜ぶべきなのだろうな」
　遠回しに答えをはぐらかした後、アルケイデスは言葉を続ける。
「……今は泥が勝っている。だが、この毒は私の死の象徴だ。僅かずつだが、この霊基の肉体ではなく精神の根幹を喰くらい続けているのは確かだ」
　だが、それを怖おそれる様子はない。
『泥』で緩和されているとはいえ、通常の毒とは比べものにならぬ苦痛が絶え間なくその全身を流れているにもかかわらず、アルケイデスは己の復ふく讐しゆう心しんでそれに無理矢理耐えながら、通常と変わらぬ精神を形作っていた。
　ただ、それが通用するまでの期間が、先刻マスターに告げた日数という事なのだろう。
「充分だ。お前が終わる前に、聖杯を手に入れればそれで良いい」
　バズディロットの言葉に、アルケイデスは布の下でやや訝いぶかしむように言った。
「……貴様は、聖杯そのものに興味はないと思っていたが？」
「俺の主がただ寿命で身み罷まかっただけならば、そうだったのだろ

うがな」
　そこで、僅かにバズディロットの目が細められる。
　普段感情を表さぬ彼にしては珍しく、声から憎ぞう悪おと殺意に近い感情が漏れ出している。
「……ファミリーの魔術師の一部が、余計な真似まねをしていてな……。俺の主の人格を、他人の脳にいくつも複写していたのだが……その『依より代しろ』も、全て死んだ。それも別々の死因でだ」
「ほう」
「それはつまり、魔術の副作用による連鎖的な死ではない。他者の介入があった事に他ならない。このタイミングでそれを為なす組織は想像がつく」
　そしてバズディロットは、自らの憎ぞう悪おを喰くらって成長する『泥』を人間離れした精神力でねじ伏せながら、自らの英霊を言こと祝ほぐように宣言した。
「聖杯を手に入れた暁には、その力をもって存分に示すがいい。この国を破壊し、蹂じゆう躙りんし尽くした後に──貴様が捨てた名を取り戻し、示してやればいい。世界の常識を覆くつがえし、神秘を殺し尽くす事で貴様の忌いみ名……『ヘラクレス女神の栄光』の名は人理の中で地に落ち、女神ヘラもろともにその名は死に絶える事だろう」
「……言われるまでもない」
　この日、この瞬間──アメリカにとって、一つの悪あしき可能性が生まれた。
　バズディロットが聖杯を手に入れた場合──その力を以て国家への復ふく讐しゆうはなされる事となるだろう。
　それは即すなわち、聖杯の力を全て注つぎ込こまれたアルケイデスの力をもって、彼自身の望みを叶かなえる為ための『贄にえ』となる事に他ならない。

　ファルデウスのミスはただ一つ。

バズディロット・コーデリオンを、非情な魔術師であると──
神秘の秘匿を最優先とする、魔術師らしい魔術師、あるいは魔術使いであるなどと、まるで見当違いの推測をしていた事だ。
一度巨大な組織に属した歯車である魔術師ならば、その組織の司令塔が無くなれば、魔術師としての本懐を果たす為ため、最も利を得る事ができる別組織に身を寄せる事になるであろうと。
無論ファルデウスはバズディロットも殺すつもりだった為ため、そうした動きを見せた瞬間の隙を突いて始末するつもりだった。
だが──それこそが、ファルデウスが魔術師であるが故の見誤りであった。
彼の思う通り、ファミリーの魔術師達は、スクラディオを利用して自らの研究を進め、独自に根源へと到いたる術を探す者、あるいは逆に、魔術使いの傭よう兵へいとして最適な拠より所どころとして所属する者が殆ほとんどである。
だが、バズディロットを含めた、残りの一部は違っていた。
魔術師らしからぬ思考形態──さりとて、一般人のそれとも異なる理ことわりで動く者達も僅かながらに存在していたのである。
バズディロット・コーデリオンは、そうした者達の中でもとりわけ深くスクラディオ・ファミリーに根を下ろした存在だった。
ただ、その気質から理解されづらいというだけで──既に彼の中では、根源よりもファミリーの方が上位の目的となっており、魔術師ではない何かに変わり果てていたのである。

バズディロットは、魔術師に非あらず。
魔術使いに非あらず。
聖職者に非あらず。
彼の魂の根は、スクラディオ・ファミリーという共同体にこそ根付いていたのだ。
深く、そして複雑に。
それこそ──魔術師たるファルデウスには、その心根が理解できよう

筈はずも無いほどに。

　ファルデウスはまだ、その事実を知らない。

　　　　×　×

？？？？？にて

　気が付くと、アヤカ・サジョウの意識は遠い景色の中にいた。
　アヤカは自分の状況を把握すると、それが前回と同じく、セイバーの視点で見ている彼の『過去』であるとすぐに気付く。
　意識はハッキリしているのに、身体からだが勝手に動く感覚。
　以前は荒野を仲間の騎士達と駆け、自動車に乗ったサンジェルマンと名乗る妙な男に出会った景色だと記憶しているが──
　今回は、その時よりも大分様子が違っていた。
　古風な石造りの城の中、煌きらびやかな装飾品などに囲まれている。
　しかし、テーブルなどと較くらべた自らの視線の高さや、時折見える己の手の大きさなどから、アヤカはこれが『子供の視点』であると確信した。
　□□……。
　──あいつの……セイバーの子供時代……って事？
　自分の意志では動かせない身体からだが、どうやら何か楽器を演奏しているようだ。
　アヤカの耳から聞いても、美しい旋律だという事が解わかる。
　子供の手で奏かなでられているとは思えぬ程の音が石壁に反響し、ソロにもかかわらずまるで楽団の演奏を聴いたかのような豊潤な音となってアヤカの耳に染しみ渉わたった。
　──ああ、楽器は得意そうだったけど……子供の頃からだったのか……。

ライブハウスで即興で色々と弾いていたのを聞いたアヤカは、そんな風に考えていたのだが──演奏が終わると共に、視界の中にいた大人達が口々にこちらを褒めそやす。
「いやあ、流石さすがですな、リチャード様！　まさか……この僅かな期間でそこまで……」
「楽器だけではありません。芸術にも武術にも秀ひいでておられる」
「先日、王妃の近この衛え兵へいを剣技で打ち負かしたとか」
「流石さすがは、『比類無き婦人』、アリエノール様のご子息といった所ですな」
　目の前にいる、時代がかった格好をした男達が、口々に賞賛の言葉を述べていた。
　だが、アヤカは理解した。
　理解できてしまった。
　賞賛の言葉の裏側に、こちらに対する恐怖と嫉妬の感情が見え隠れしているという事を。
　そして、幼い身体からだのセイバー自身の視線や挙動を見ても、そこまで喜んではいないように感じられる。

　暫しばらくして、自室に戻った少年を迎えたのは、一人の美しい女性だった。
「どうしたのです、リチャード。浮かない顔をしていますね」
　すると、そこで初めて、幼い身体からだとなっているリチャードの声がアヤカの耳に木霊こだました。
「……母上」
　──え？
　──この、綺き麗れいな人……。
　──もしかして、セイバーのお母さん……？
　荘そう厳ごん、という言葉がよく似合う女性だった。
　豪ごう奢しやな城の中でなお存在を周囲に呑のまれる事はなく、寧むしろ、彼女を守り、彼女を引き立てる為ためだけにこの城と兵士達

の全てが在るといっても過言ではないと思わせる存在感だ。
　物語に出てくるような女王というのはこういう存在の事を言うのだろうとアヤカが感じていると、その美しき古都の擬人化とでも言うべき女性は、母親としての愛に満ちた笑みを浮かべてこちらに語りかけてきた。
「話して御覧なさい、リチャード。母は貴方あなたを無条件で助けはしません。ですが、貴方あなたの話を笑い捨てる事もしません」
　すると幼いリチャードは、少しだけ迷った後に、ハッキリと己の母に告げた。
「……母上。私は怖いのです」
「怖い？　何がでしょう？」
「私は……私には、なにもかもできてしまうのです。上手うまくこなせてしまうのです」
　──……はい？
　──とんでもないこと言い出した。
　──でも、うーんと……。
　──いやいや、やっぱりとんでもない事を言い出してる！
　アヤカが心中で二度ツッコミを入れるが、当然ながら相手に伝わった様子はない。
「教わった剣術は、もう城の中で私に勝てる者はいません。私が王子だから手加減しているのだろうと思い、城を抜け出して武勇自慢の盗賊達を襲いましたが、あっさりと打ち倒せてしまいました」
「……」
　──何してるの、この子⁉
　──馬鹿じゃないの⁉
　──いや、セイバーらしいといえばそうだけど！
「音楽も、そうです。どんな楽器でも一度習っただけですぐに使いこなせてしまいましたし、弓術も、絵画も、レスリングも、狩りも、釣りも、槍やりも、乗馬も、波斯チェスシヤトランジも、ナイン・メンズ・モリスも、何を始めても、すぐに私は熟達してしまいます。勝負

事は、誰もすぐに私に勝てなくなってしまうのです！」
「あらあら」
「このままでは、私は友人の一人もできません。誰もが私に嫉妬の目を向けてきます。私はみんなと仲良くしたいのに、人々に慕われたいのに、どうすれば良いのでしょう？　私が手加減をして、何もかも苦手なフリをした方が良いのでしょうか？」
　━うわあ、子供じゃなければ背中を蹴り倒したい。
　━……でも、普段のセイバーは流石さすがにそんな事言わないし……。
　━成長したって事かな……。いや、でもあんまり変わってないような気も……。
　アヤカは呆あきれたようにそんな事を考えていたが、先刻の嫉妬と畏怖が入り交じった大人達の目を思い出し、僅かに幼いリチャードに同情した。
　━まあ……あんな目でずっと見られたら、歪ゆがむものなのかな……。
　だが━そんな幼ようリチャードの言葉を聞いていた母親は、愉たのしげにカラコロと笑い出した。
「笑わないと言ったではないですか、母上」
　拗すねるように言うリチャードに、母親は言った。
「いえ、私は『笑い捨てない』と言ったのです。笑いはしましたが、そのまま貴方あなたの言葉の意味を、想おもいを捨ててはいません」
　そして、そっとリチャードの頬を撫なでながら、王妃と思おぼしき女性は言った。
「良いですか、リチャード。確かに貴方あなたは天才です」
　━言い切った……。
　アヤカが驚いていると、リチャードの母親は微笑ほほえみながら息子に言い聞かせる。
「けれど、ただそれだけ。天才である事などに、なんの意味があるのですか？」

「え……？」
「あなたはただ、できるだけ。それで何かを成したわけではありません。『できる』ということと『何かを残す』ということは全く別なのですよ」
　母親は息子としてリチャードをあやすと同時に、一人の人間として相手の魂に己の言葉を刻み込む。
「町の盗賊に対して思うさまに力を振るった事を誇示する前に、その盗賊に虐しいたげられていた人達の悲しみを共に嘆き、共に乗りこえる術を考えなさい。貴方あなたが撃ち倒した盗賊達を生み出した環境を、この国の現状を恥じるのです。私も貴方あなたと共に恥じましょう」
　そして、息子の身体からだを抱きしめながら、母親は更に言葉を続ける。
「たかが天才というだけでは、英雄にはなれないのですよ、リチャード。逆に、なんの才能も無き者であろうと、人は己の歩みを貫いた時に初めて英雄になれるのです」
「英雄、ですか」
「ええ、かのアーサー王と円卓の騎士達のように、あるいはシャルルマーニュの聖騎士達のような英雄に。円卓の中で最も才能が無いと言われていたケイ卿きようが、彼だからこそ円卓を支える英雄となったように。彼らが如何いかにしてこの土地を造り上げたのか、人々の心の礎いしずえを如何いかにして築きあげてきたのか、貴方あなたは識る必要があります。あなたが本当になんでもできるというのならば、リチャード、貴方あなたはまず『語り継ぐ』才を誰よりも誰よりも大事になさい」
　そして、彼女は語り始める。
　アーサー王と円卓の騎士の物語を。

　ランスロット、ガウェイン、トリスタン、ギャラハッド、パーシヴァル、ガレス、アグラヴェイン──果ては裏切りの騎士であると謳う

たわれているモードレッドに到いたるまで、母はまるで己が見てきたかのような口ぶりで語り続けた。
　途中で熱が入ってきたのか、何も知らぬアヤカが神話の類だと割り切って聞いたとしても『話を盛りすぎだ』と言わぬばかりの様相を呈してきて、最後に『アーサー王のエクスカリバーが天と地を隔てたのが世界の始まりであり、月をロンドンに落とそうとした卑王ヴォーティガーンの企たくらみを知ったアーサー王はマーリンを投げつけて月を跳ね返し、ランスロットは湖を守る為ために五十億人のピクト人をわらしべ一本で食い止めた』などと支離滅裂な事を言い出した時には、すでにリチャードは穏やかな顔で微睡まどろみの中に落ちかけていた。
　アヤカ目線でもぼやけ始めた視界の中で、そんな息子の顔を優しく見つめながら──
　母親は、その頬を軽く撫なでながら言った。
「ふふ、流石さすがにヴォーティガーンは月を落としたりしてないわ。私の作り話よ……さあ、起きなさい」
「う……母上……？　ベディヴィエール卿きようはその後どうなったのですか……？」
「おはよう、可愛かわいいリチャード。それはまた今度話してあげますよ」
　そして、母親はそこで僅かに空気を変える。
「その前に、リチャード。貴方あなたには生きたまま地獄を見て貰もらわなければなりません」
「えッ？」
「盗賊を倒す為ために勝手に城を出た事は……母として咎とがめねばなりませんから」
　にこやかな笑みを浮かべたまま、偉大なる母親の特大の雷が落ち──

　それと同時に、アヤカの意識は闇の中に放り込まれた。

×　×

「……ヤカ、アヤカ、大丈夫か？」
　子供の声ではなく、いつも通りのセイバーの声がアヤカの耳を打つ。
「うん……？」
　目を醒さますと、そこは教会の中だった。
　目の前で起きているセイバーを見て夢の前の状況を思い出し、自らも飛び起きる。
「あんた……！　怪我けがは!?　大丈夫なの!?」
「ああ、完全には回復してないが、動けるようにはなった。何だかんだ言って、もう半日以上経たってるからな。あの金色の弓兵の攻撃が、霊基ごと喰くらうタイプの攻撃だったり毒を仕込まれたりしてたらまずかったが……」
「そうなんだ……良かった……」
　安あん堵どの息を吐き出すアヤカ。
　そんな彼女に、セイバーは僅かに目を逸そらした後、覚悟を決めて頭を下げる。
「悪い！　治癒魔術を仲間に使って貰もらうのに、大分アヤカから魔力を借り受けた。アヤカが昼過ぎまで寝てしまっていたのはそのせいだろう。すまなかった」
　申し訳なさそうに言うセイバーだが、アヤカはその腕をガシリと摑つかみ、怒りながら言った。
「そんなのはどうでもいいよ！　私が貴方あなたに怒ってるのは、そんなことじゃない！」
「えッ？　ああ、大口を叩たたいてたのに負けたことか？　確かに、それは……」
「馬鹿！　それでもない！　そんな事じゃないよ！」
　戸惑うセイバーに、アヤカは怒るというよりも、寧むしろ悔しそうに言葉を絞り出した。

「貴方あなた……私を教会に置いたのって、自分が死んだ時にそのまま保護させるつもりだったからでしょう……？　聖杯戦争は、負けたマスターは監督役に保護されるからって……」
「それは……まあ、その方がアヤカの為ためになるかなって」
「私なんか気遣う暇があったら、自分を大事にしてよ……。これは自虐じゃない。私が王様でも女王様でも同じ事を言うよ、セイバー！　貴方あなたはもっと、自分を大事にして！　ああ、もう、もっともっと言ってやりたい事があるのに、私じゃ言葉が上手うまく見つからない……。あと……その……ありがとう。私はまた、貴方あなたに守られた……」
　アヤカも、理解していた。
　セイバーは、躱かわそうと思えば教会の屋根への攻撃は避けられたのだろうと。
　だが、躱かわせば教会は消滅し、中にいるアヤカは死んでいた可能性が大きい。
「……すまない、俺はまた、君に気苦労をかけてしまっていたんだな。教会からどこか遠くに誘おびき出だすべきだったんだが、あの英霊は不意打ちに近い形で速攻で斃たおさなければ、絶対に勝てないと思ってな……。いや、結局負けた以上、ただの言い訳だな」
　困ったように言いながら、セイバーは大きく息を吐いた後、天井を仰ぐ。
「あの金色の英雄にも見透かされていたよ。俺はまだ、この戦争に本気になっているわけじゃないのかもしれない。……まだ、聖杯に望む心の底からの願いを見つけてないからだろう」
　冗談めかして『座に様々な歌と英えい雄ゆう譚たんを持ち帰る』とは言っていたが、それは別に聖杯が無くても叶かないそうな夢だ。
「ただ、本気で何かを願ったら……。その時こそ、俺は君を『戦争』に巻き込む事になる。それは俺の本意じゃあない」
「もう、とっくに巻き込まれてるよ。さっきだって、教会ごと吹き飛ばされ……」

言いかけて、気付いた。

セイバーが仰ぎ見た天井は、たしかに教会のものだった。

金色の英霊の攻撃によって崩れた筈はずの教会が、無傷のままになっているではないか。

「うそ……何これ？　これもセイバーの魔術って奴……？」

「残念ながら、そんな事ができるなら最初に破壊した劇場をとっくに直してる。俺にだって、できない事はあるんだ」

自嘲気味に言うセイバーに、ようやく気持ちを落ち着けたアヤカもまた大きな溜ため息いきを吐き出し──眼鏡の位置を直しながら、照れを隠すようにその言葉を口にした。

「……『母上、私はなにもかもできてしまうのです』……って言ってたのに？」

すると、セイバーはその場で全身を強こわばらせた。

そして、冷や汗を流しながら、口元だけに笑みを浮かべて問い掛ける。

「……見た、のか？」

それが、魔力の繫つながりによってアヤカに見せた『過去』の話だと知ったリチャードは、カタカタと震えながら言った。

そして、『口が滑った』と思いつつも、アヤカは目を逸そらしながらそれを肯定した。

「……まあね。……綺き麗れいなお母さんじゃん」

その後暫しばらくの間、セイバーは顔を真っ赤にしながら教会の床を転がる事になった。

「……今でも、なんでもできると思ってる？」

落ち着きを取り戻したセイバーに、アヤカがなんとなく問い掛けた。

揶や揄ゆするような形ではなく、真剣な表情での問いだったので、リチャードもまた真面目にそれに答えた。

「そこまで子供じゃないさ。だけど、大抵の事はこなせる自信はあ

る。座にそういう性質として刻み込まれてるんだろうな」
「まあ……実際、あんたはなんでもできそうだね。空気を読むこと以外は苦手な事なんて無さそうだし」
「流石さすがに言い過ぎだ。俺にも生前できなかった事はある。今は座の知識でできているが……」
「何ができないの？」
　興味を持って聞いたアヤカに、リチャードは僅かに逡しゅん巡じゅんした後、目を逸そらしながら答える。
「……英語」
「え？」
「俺は……フランス語やイタリア語やペルシャ語はできたんだが……英語が苦手だったんだよ。……イングランドの王だったのに」
　気まずそうに言ったリチャードに、アヤカはしばしポカンとした後──
　そこで初めて緊張の糸が途切れたのか、呆あきれたように笑みを溢こぼす。
「人の苦手な事を笑うのは良くないぞ、アヤカ」
「ごめん。でも、だって……あんなに自信満々に『なんでもできる』って言ってたのに……」
　そこでアヤカはもう一度大きく呼吸し、眼鏡の下の涙を拭いながらセイバーを見た。
「……生きていて良かったよ、セイバー。ありがとう」
「ああ、お互いにな」
　アヤカの笑顔を見たセイバーは、それで満足だとでも言うように声を上げげた。
「ようし！　切り替えた！　過去の恥を知られた俺にはもはや失うものはない！　次はあの金色の奴にも勝てるぞ！　アヤカになんと言われようと、アヤカも守る！　何しろ俺は、なんでもできる男だからな！」
　アヤカには理解できた。

それは強がりなどではなく、彼は微み塵じんたりとも心が折れていないのだと。
　あれだけ実力差を突きつけられながら、あれだけ死にかけながら、それでもリチャードの心は欠片かけらも砕けてはいないのだ。
　羨むように見つめていたアヤカだが、その空気は、外からの来訪者によって搔かき消けされた。

「……セイバーと、アヤカ・サジョウですね」
　教会の扉が開かれ、そこには数人の警察官が立っていた。
　病院と教会の間にある大通りで、もう一人の弓兵と戦っていた警察官達だ。
「おっと、君達も無事だったのか？　あの恐ろしい見た目の弓兵を相手に生き残ったのならば大したものじゃないか。凄すごいな！」
　素直に賞賛するセイバーに、中心人物と思おぼしき女性警官が言った。
「……同行して頂けますか？」
「警察……！」
　緊迫した空気の中でアヤカが呟つぶやく。
　セイバーだけが思い出したように天井を仰ぎ、肩を竦すくめながら言った。
「そういえば留置所から脱獄した逃亡犯だったな。俺とアヤカ」
　だが、女性警官は静かに首を横に振ると、セイバーに取引を持ちかけた。
「いいえ、今は貴方あなた達たちの罪を問う気はありません。一時的な共闘を持ちかけたいのです」
「共闘か。敵は誰だ？　最後に金色の弓兵が上から落ちてきた気がするが……彼はどうなったんだ？　それとも、俺が意識を失う前に聞こえて来た妙な叫びの主が敵か？」
　子供のように食いつくセイバーに、女性警官は無表情のまま、淡々とした事実を告げた。

「私達は、恐らく固有結界のような『世界』に隔離されています」
「隔離？」
「町に人の姿は見えますが、皆、精神が何かに囚とらわれています。警察署や役所は無人、この町の外には出られますが、ある程度進むと、その道の先は再びこの町に繋つながります。空間が捻ねじれているものと推測できますが、断言はできません」
　その後も、自分達が見てきた状況を淡々と告げる女性警官。
　ヴェラと名乗った彼女の横には、壊れた義手をぶら下げた警官の姿があり、どうやら教会の周囲はすっかり囲まれているようだ。
「私達と同じような状況のマスターとサーヴァントを探していました。貴方あなた達たちも、私達の共闘関係に加わって頂きたいのです」
「世界？　隔離……なんの事？」
　訝いぶかしむアヤカに、リチャードが言った。
「……固有結界みたいなものかな。まあ、魔術師や魔物が造り出した、偽にせ物ものの世界みたいなものさ。しかし、話を聞くに、固有結界とは少し違うような気もするが……。この『世界』から脱出する目め処どは立ってるのかい？」
　問い掛けるセイバーに、ヴェラは一瞬目を伏せた後、言った。
「この『世界』の根幹にいるであろう魔術師か英霊……」

「それを、我々の手で討ち取る必要があるかと考えています」

「……」
　シグマが目覚めると、そこはどこかの民家の中庭だった。
「……何が起こった」
　首を傾かしげながらも、流れるように自らの装備の状況と周囲の様子を確認するシグマ。
　少なくとも周囲に病院はなく、町の中心に立つカジノビルが遠くに見える事から、あの場所から大分離れた住宅地であろうと推測した。
　地面に眼めを落とすと、アサシンの少女が芝生の上に横たわっている。
　頭には枕のような物が置かれており、身体からだには薄い毛布が掛けられていた。
　見ると、自分の身体からだにも同じような毛布が掛けられており、頭のあった位置には枕ではなく小さなクッションが置かれている。
　──誰かに……寝かされていたのか？
　アサシンに怪我けがはないようで、近づくと寝息を立てている事が確認できた。
　──仮初めの身体からだで顕現している英霊は、基本睡眠を必要としないと聞いていたが……。
　だとするならば、彼女の睡眠は何か外部的な要因によって霊基が睡眠状態に移行していたと考えられる。
　あの吸血種の仕業だろうか？
　シグマはそう考えたが、その割には自分はまだ生きている。
「う……」
　アサシンの少女が意識を取り戻したようで、若緑色の芝生の上でゆっくりと黒衣を起こした。
「ここは……何が……？」
「大丈夫か？」

「ああ……。あの魔物は……」
「いない……みたいだな」
　あの吸血種の気配は感じない。
　それが、シグマには逆に不気味だった。
「……奴は、最後に不穏な事を言っていたが……」
　アサシンの言葉に、シグマはジェスターと名乗った吸血種の言葉を思い返す。
　──「その美しい景色を……君達が自らの手で穢けがし尽くすのを楽しみにしているよ」
「何か、罠わながあるかもしれない。一見すると怪我けがはないが、何か術式を服や肉体に仕込まれている可能性もある」
「何故そんな回りくどい事をする？　私達の意識が無い間に始末すればいいだろう」
「趣味の悪い奴っていうのはどこにでも居る。俺の上司の一人もそうだけれど、あの吸血種は間違い無く悪趣味な部類に入ると思う」
　シグマは淡々と自らの身体からだに魔力を巡らせ、妙な術式などがかけられていないかを精査していく。そのついでとばかりに、言葉で悪趣味な実例を口にした。
「見逃したと見せかけて、家に帰った瞬間に自分の妻や子供を殺すような暗示をかけていた魔術使いもいる。特に意味なく、ただその反応を楽しむ為ためにだ」
　魔術を極めるという目的を忘れ、魔術をビジネスや己の快楽の為ために使う者達。
　魔術使いと呼ばれる中でも特に悪辣な部類に入る者達には、そういう事をする者も多い。
　もっとも、『魔術と神秘を極める為ため』という目的にさえ合致していれば、より残酷でより悪辣な事を行う事があるのが魔術師というものなので、一概に『魔術師』と『魔術使い』のどちらが厄介かという事は言えないのだが。
　シグマのあげた例に露骨に眉を顰ひそめたアサシンは、シグマに

そっと手を翳かざし、『瞑想神経ザバーニーヤ』へと連なる魔力感知能力でシグマの身体からだの内部から異常な魔力などが無いかを確かめる。
「……見た所、妙な術式を仕掛けられている様子はない。魔力を用いぬ精神的な楔くさびまでは見抜けないが……」
「ああ、俺も自分の分析では問題ない。君こそ大丈夫か？」
「子細無い」
　アサシンの言葉を信用するしかない状態のシグマは、とりあえず改めて周囲の状況を見ようとしたが──そこで、一つの違和感に気付く。
「……？」
　これまでの傾向なら、目を醒さました瞬間に『影法師』──ウォッチャーの使いである誰かが皮肉の言葉の一つでも投げかけてきて良かった筈はずだ。
　だが、現在はその影法師達の姿すら無く、この２日ほどの間になんとか感じられるようになっていたサーヴァントとの魔力の繫つながりが、明らかに薄くなっている。
「これは……」
　念話で呼びかけてみるが、影法師達からの返答はなかった。
　何か反応らしきものは感じるのだが、まるでインターネットの回線が突然込み合ったかのように、まともな情報のやりとりができない。
「どうした？」
「……サーヴァントと、連絡がつかない。死んだわけではないと思うが……」
「ランサーか……消滅したわけではないのなら、最悪令呪とやらで呼び寄せられるだろう」
　──令呪、か。
　──使ったら、どうなるんだ？
　──ウォッチャーは、空高くにいると影法師達は言っていたが……。
　シグマはアサシンを始め、周囲に対して己の英霊は『ランサーのチャーリー・チャップリン』という事にして誤魔化している。

ウォッチャーの正体自体がまだ良く解わかっていないシグマは、令呪の使いどころをどうすべきかを思案しながら考え込む。
「……ＧＰＳは機能するな」
　自らの装備である電子端末が動く事を確認したシグマは、座標を観みてここの位置を特定する。
「クリスタル・ヒルとの位置関係から見ても間違いない。ここはスノーフィールドの一角、スノーヴェルクの住宅街だ」
　スノーフィールドは、かつていくつかの市に分かれていた時期があり、最終的に一つの自治体に統合された。その頃の名残でスノーヴェルク市と呼ばれる事もあるこの地区は、高級住宅街として町の名士達が多く住んでいると聞かされていた。
「一旦外に出よう。不法侵入者として銃を向けられるのも面倒だ」
　枕や毛布を用意してくれていたのが家主とは限らない。
　銃規制が全米の中でも緩やかな州にいる事を自覚しながら、シグマは道路に向かおうとしたのだが──庭が誰の所有物なのかを確認するよりも先に、その中に立つ屋や敷しきの扉が開かれた。
「……おや、目を醒さまされましたか」
　そこに現れたのは、穏やかな顔つきをした東洋人らしき男だ。
　シグマはその顔を見て、表には出さぬまま警戒心を引き上げる。
　何故なら、それは、ファルデウスやフランチェスカから事前に渡されていた写真資料にあった顔だったからだ。
「あなたは……？」
　不法侵入かもしれない自分達から名前を尋ねるのは無礼だと思ったが、そんな場合でもないと割り切り、何かあってもすぐに反撃できる体勢を整えながら問い掛けるシグマ。
　だが、男はさして不機嫌になった様子もなく、柔和な笑みで己の名を告げた。
「ああ、初めまして、私は繰くる丘おかです。この側にある私立図書館の館長を務めています」
　資料の通りの答えだ。

繰くる丘おか夫妻は、表向きは近場にある会員制の私立図書館の館長の肩書きを持っており、スノーフィールドにおいて極力目立たない形でそれなりの地位を築いている。

──繰くる丘おか……。

──病院に入院している、例の少女の父親じゃないか。

──すると、ここに呼び込んだのはこの男か？

──娘の状況を知っているのか、それとも裏で糸を引いているのか……。時間が無かったとはいえ、ウォッチャーの観測結果の中から優先的に聞いておくべきだったな。

ウォッチャーの能力の一つは、『町の中に起こっている事象の把握』だ。

ただし心の中までは読めず、視覚と聴覚で認識できるものに限る。膨大な情報量にも関わらずに『影法師から聞く』という形でしか共有できないため、シグマ自身はネットで検索をするように自分の知りたい情報を聞き出す必要がある。

だが、今はその影法師達とも連絡が付かない為ため、目の前の男に対する情報が圧倒的に不足している状態と言えるだろう。

シグマは「向こうはこちらの情報を知らない筈はずだ」と思いつつも、偽名を名乗る必要性も感じず、とりあえず挨拶をして相手の出方を窺うかがう事にした。

「……。シグマ、と言います。お恥ずかしい話ですが、何故かこちらの庭で意識を失ってしまっていたようです。ゆうべ、町で体調を崩した所までは覚えているのですが……」

「ああ、そうでしたか。いえ、今朝、庭で倒れている貴方あなたがたを娘が見つけたようでして。今、ベッドに運ぼうかと家内と話し合っていた所なのですよ」

──……普通は警察か９１１に連絡だと思うが……。

疑問には思ったが、シグマはとりあえず話を合わせる。

「そうですか。毛布をかけてくれたのは娘さんなんですね」

すると、繰くる丘おかと名乗った男の後から現れた女性が、やはり

穏やかな微笑ほほえみを浮かべたまま言葉を返してきた。
「ええ、あの子ったら、毛布を持ち出して、また家に入ってきた子犬でも見つけたのかしらと思ったんですけど……まさか、人だとは思いませんでした」
　その様子は一見すると自然だったのだが、どこか虚うつろな空気を感じるシグマ。
　彼の感覚が正しいと証明するかのように、アサシンがシグマにだけ聞こえる小声で告げた。
（気を付けろ。この男もあの女も、誰かに暗示を掛けられているようだ）
　シグマもそれは理解する。
　ならば、この状況で逆に『暗示をかけられていない』人間が現れたとすれば、それは真っ先に疑うべき人間だろう。
　最低でもその人間の意図を汲くまなければ危険だ。そう判断したシグマだったが──
　その『素の状態の人間』は、思ったよりも早く彼らの前に現れた。

「おにいちゃん、おねえちゃん。……だいじょうぶ、ですか？」
　人見知りをするように、もじもじと母親の後ろから顔を出した一人の少女。
　年頃は10歳になるかならないかぐらいだろうか。まだ幼さの残る少女は、ゆっくりと母親の陰から歩み出ると、あたふたとしながらも、しっかりと自分の意志で頭を下げた。
「わたしは、くるおかつばきです！」
　昏こん睡すい状態で入院している筈はずの少女の名前。
　アサシンや警官隊が救おうとしていた、何らかのサーヴァントに取り憑つかれている筈はずの少女が、今、まったくもって健康的な状態で目の前に立っている。
　それが意味するところを考えるよりも先に──少女はシグマとアサシンの背後に眼めを向けながら口を開いた。

「そこにいるのは、おともだちのまっくろさん！」
　同時に──
　それまで無かった奇妙な気配が、シグマとアサシンの背後で膨れあがる。
「!?」
　二人が即座に振り返ると──巨大な木の陰に、漆黒の塊が鎮座していた。
　かろうじて人型であろうかと思おぼしきその大きな『影』の塊を前に、シグマとアサシンは最大限の警戒を持って構えたのだが──
　背中側から聞こえる椿つばきの声が、そんな二人の耳を打つ。

「とっても大きいけど、こわいひとじゃないよ！」

×　×

「楽しみだなあ」
　そんな邂かい逅こうの様子を遠くから観測していた影が一つ。
　椿つばきと同世代の少年の姿を取った、死徒ジェスター。
「ここが、世界一幸せな地獄だって気付いた時、どんな顔をするのかなあ」
　彼は少年の姿に似付かわしくない、陶酔した笑みを浮かべながら言った。
「ぼく以外は、繰丘椿を殺さないと出られないって解った時──」

「アサシンのお姉ちゃん……いったい、どうするのかなぁ？」

４日目　朝　クリスタル・ヒル最上階

「まだ、諦めるつもりはないのかい」

　穏やかな声が、カジノホテル『クリスタル・ヒル』のスイートルームに響く。
　ティーネ達の魔術工房……というよりも、英雄王が調度品を並べ立てた博物館かショールームといった雰囲気となっていたその空間の中、莫ばく大だいな魔力が渦巻き続ける。
　１日前までギルガメッシュのマスターであった少女──ティーネ・チェルクだ。
　その身体からだは、ただ霊脈からの魔力が通り過ぎる経路と化している。
　流れ込む膨大な魔力が、全身の回路だけではなく、血管や神経、骨すらをも蝕むしばんで行く。
　だが、それでもティーネは魔力の流れを止めなかった。
　丸一日以上その場に立ちながら、両手を床の中央に描かれた特殊な魔法陣に翳かざしている。
　そんな彼女の後ろから、中性的な声が掛けられる。
「……あと、２時間34分。君の回路が焼き切れるまでの時間だよ」
　穏やかではあるが、どこか機械的な冷たさも感じる声。
　それはまるで、死神の声であるかのようにティーネの心に響き渉わたる。
「その後に何も処置できなければ、およそ13分で君の生命活動そのものが停止する。僕の計算が、きちんとこの時代のシステムに適合していればの話だけれどね」
　ティーネはその死神──エルキドゥの言葉を真実だと受け入れなが

ら、それでも魔力の放出を止めなかった。
　淡く輝く萌もえ黄ぎ色いろの髪を靡なびかせた、強力無比なるランサー、エルキドゥ。
　彼はどことなく寂しげな目で、ティーネの横に佇たたずみ、その魔法陣の中心に横たわる亡なき骸がらを見据えている。
　亡なき骸がら、というのは、些いささか正確ではない。
　それは――2日前の夜までは輝ける王であったその霊基は、死に続けていながら、生きてもいないという状況だ。
　胸に穿うがたれた孔あなからは奇妙な虹色の澱よどみが浸しん蝕しよくしており、その澱よどみは矢の疵きず痕あとから広がるヒュドラの毒と互いを蝕むしばみ合っている。
　黙っていれば崩壊しつつあるその肉体をかろうじて押おし止とどめているのは、ティーネ・チェルクが流し込む膨大な魔力の圧力で、無理矢理その霊基の拡散を押さえ付けているからに他ならなかった。
「諦めません……諦められるわけがありません……！」
　先刻のエルキドゥの問いへの答えというより、自分自身に言い聞かせるように叫ぶティーネ。
　そんな少女に、エルキドゥは怒りも悲しみも言葉に乗せず、ただ淡々と事実だけを述べた。
「ギルが生きていたら、多分こう言うよ。『よもや雑種、まさか貴様の未熟で我が負けたなどと言う思い上がりを吐き出すつもりではあるまいな』って」
「そんな事は解わかっています！　でも……不敬だと言われようと、例え処刑されようと、私がここで諦めるわけにはいかない……！」
　クウン、と、小さな鳴き声が部屋に響く。
　銀色の狼おおかみが、そっとティーネの足元に寄り添った後、エルキドゥを見た。
「……この子は、あのアヤカという子とは違う。マスターの嫌いな『人間』だよ？　いいのかい？」
　エルキドゥの問いに、銀色の狼おおかみは再び小さく鳴き、そのま

ま彼女の横に蹲うずくまった。
「解わかったよ、マスターは優しいね」
　エルキドゥはそっとしゃがみ込むと、銀ぎん狼ろうの背に手を触れ、もう片方の手をティーネの右肩に載せる。
　すると、銀ぎん狼ろうの身体からだから莫ばく大だいな魔力が膨れあがり、ティーネの身体からだを包み込んだ。
「これ……は……？」
「君自身の肉体の崩壊を、僕のマスターの魔力で抑え込んだ。一時的ではあるけれど、計算よりも大分長く持つ筈はずさ」
「どうして……」
　ティーネの問いには答えず、エルキドゥは、土地の霊脈から引き出された莫ばく大だいな魔力の殻に包まれる友の亡なき骸がらを見て呟つぶやいた。
「まるで冥界の檻おりだ。エレシュキガルが見たら何て言うかな……」
　そして、その殻の中に手を伸ばす。
　魔力の奔流に晒さらされ、皮が溶けて捲めくれ上がるが、それを即座に再生させながら、エルキドゥはその中心にあるギルガメッシュの胸に手を触れた。
「君の力を借りたいんだ、ギル。もしも醒さめるのならば、目を醒ましてほしい」
　英雄王の霊基は失われている。
　仮に復活させたとしても、『王の宝ほう物もつ庫こ』の扉が閉ざされている状態では解げ毒どくする事もままならない。それでも、エルキドゥは生涯の友に対し、僅かに感情を覗のぞかせながら言った。
「僕が僕として生まれる前に出会った『彼女』の魂を……救いたいんだ」
　そしてゆっくりと身を起こし、ビルの窓から見える、昨日まで自分の本拠地としていた森が自分とは別の魔力に浸しん蝕しょくされていく様を見ながら、その変質の中心に向かって問いかけた。

「君は、その霊基の奥にいるのかい？」
　過去を。
　生前よりも更に過去。
「それとも、もう……あの花畑の記憶も、全て虚無に沈んでしまったのかな」
　この世に最初に生まれ落ちるよりも前の事を思い出しながら、彼は静かに呟つぶやいた。
「僕は……いや、僕『達』は、今度こそ君を、君『達』を……」
　感情を見せぬまま、彼はその名を呟つぶやく。
　かつて出会い、魂を救われ──
　やがて再会し、魂を救えず、自らと友の二人で討ち滅ぼした『人間』の名を。

「……君はまだ、そこにいるのかい？　……フワワ」

next episode [Fake06]

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
https://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
電撃文庫編集部
「成田良悟先生」係
「森井しづき先生」係

本書は書き下ろしです。

Fate/strange Fake⑤

成なり田た良りょう悟ご

電撃文庫

2019年4月10日　発行

ver.002

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

電撃文庫『Fate/strange Fake⑤』
2019年4月10日　初版発行

発行者　郡司 聡
発行　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

●お問い合わせ
https://www.kadokawa.co.jp/
（「お問い合わせ」へお進みください）
※内容によっては、お答えできない場合があります。
※サポートは日本国内のみとさせていただきます。
※Japanese text only